

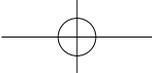
家庭教育のするめ

教育は家でやれ！

誰にも頼るな！

親がこうすれば子供は良く育つ！

目次



なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？ 7

一、朝ごはんを毎朝作って子供に食べさせろ！ 19

二、二杯のお茶と朝うんこの習性を小さいときから教えろ！

三、子供が学校に行く前、帰宅した時、寝る前は怒るな！ 29

四、家の手伝いをさせよ！ 34

五、朝は必ず仏さんに水とご飯を子供にあげさせろ！ 40

六、小さい時から子供を全身で抱きしめろ！

ただし、男の子は黒、

女の子は赤になつたら体で抱きしめないで心で抱きしめろ！ 48

七、テレビを観る時間、ゲームの時間を小さい時から制限しろ！ 7

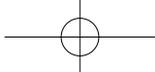
八、携帯、けつたい、撤退論

親は高校卒業まで子供に携帯電話を持たせるな！ 52

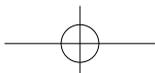
九、子供が本当に悪いことをした時は殴れ！ 56

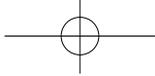
十、泥んこ論 64





- 十一、比較三原則 67
- 十二、Study first, fuck later policy 70
- 十三、子供に小さい時から家庭の味を教えろ！ 75
- 十四、喧嘩の薦め 80
- 十五、小さい時から自然と接触させ、外に目を向かせよ！ 83
- 十六、子供の前では口を滑らすな！ ただし、時には……。 89
- 十七、子供部屋は家族の人が一日で一番長い時間いる場所の隣に作れ！ 93
- 十八、特に三歳までのしつけをしつかりしろ！
- 小さいときの甘やかしは子供の人生を破局に導く。 97
- 十九、パンツの紐論 106
- 二〇、塾には通わせるな！ 教材は買うな！
- 質問は学校の先生にしろ！ 大学からは自分で稼いで行け！ 109
- 二一、踏ん張り体操と座禅の勧め 116
- 二二、子供の部活に子供以上に親が熱心になる傾向がある。
- 親は部活に首を突っ込みすぎるな！ 119





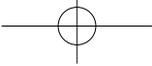
団塊親父の逆襲（ギャグ集）

153

終わりに

147

- 二三、担任人質論 123
- 二四、家庭内でしょっちゅう笑え！そして、歌え！ 127
- 二五、立て！ 親自身身体を鍛えろ！ 130
- 二六、怪我の薦め 134
- 二七、着せ替え人形論 137
- 二八、家庭教育のするめ 141

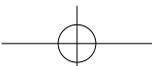


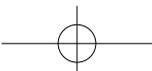
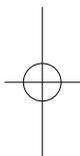
家庭教育のするめ

教育は家でやれ！

誰にも頼るな！

親がこうすれば子供は良く育つ！







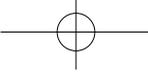
なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？

なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？

いつの時代でも人間社会は誰もが満足し、何のひずみも狂いも無い一〇〇パーセント完璧な社会ではなかったはずだが、現在の日本の社会はいたる所でほころびの度合いが極度に酷く、当たり前前の方が当たり前のように機能していかないように感じられる。今や日本の社会は細部に亘り、互いの歯車が正常にかみ合わず、修復不可能な激しい摩滅が生じてしまったような感がある。と大部分の良識ある日本人は思っているに違いない。

日本が抱えている難題の多くは解決の糸口すら見いだす事の出来ない状況に陥り、格差社会が進みその溝はますます深く、広がりの一途を辿り、あらゆる分野が金の力によって左右される世の中になってしまったように思われる。

本来、国家の安全と安定を図る事を生業としている政治家は日本には存在せず、政治屋になり下がり、国際政治の舞台では全く通用しない無能力者の集合体となった。彼らは自



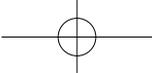
己の資産備蓄に奔走し、虚勢を張り一般国民のことはおろか、国家の将来の長期展望にたった政策も考えられず、場当たり的でいい加減な愚策を数の力を良いことに断行し国民を愚弄している有様である。

今後日本は、ますます高齢化、少子化が進み、医療費の増加、政治、経済、道德等の低下、各階層の腐敗が進行し、税収入が極端に落ち込み、国債を乱発、国際信用をなくし、十数年後、いやもつと早い時期に日本という国家が破綻する可能性すらある。

ましてや、あと数十年もすれば人間は男女を問わず今まで以上に有利己的になり、感情の対立から派生する対人関係のいざこざ、わずらわしい子育てから回避、逃避するために、主人に対して常に柔順なロボットとの結婚、若しくはロボットとの共同生活、ロボットの子供を持つ形態も在りうる現実すらあり、子供の出生数は著しく減少する。

その結果、今後、逆ピラミッド型の人口構成のため国民にありとあらゆる税金が課せられることは必然である。そうなれば将来を担う今の子供たちが労働力の中核となる時代には収入の半分近く、いや半分以上が強制的に税金として徴収されなければ日本という国家を維持する事が出来なくなることだろう。

日本滅亡を阻止するために、今後、いかにして人口増加を計り、またこれまでの経済構

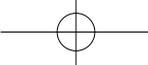


なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？

造をどのようにして保守していくかを国家が先頭だつて導いていかなければならない。しかしながら、その先頭に立つて旗を振り、実行に移すべき人物が見当たらない。さらに悪い事には本来その隊列に一丸となつて進まなければならぬはずの一般国民はほぼ全員しらくらげムードで自分の利益のみを考え、みんな好き勝手なことをし、自分と自分を含む領域を最大限に拡大する事ばかり考えている。

このような世の中であるので、国民は他人を勿論の事、どの民間、公の機関をも本心から信用、信頼していない。いや信頼出来ないのだ。今、まさに国民は誰にも頼らず自分自身の力で生きていかなければならない時代に突入しているのだ。このような世の中で次世代を担う子供達はどうかやって生きていかなければならないのであろうか。

今、子供達は迷走する政治家の実態、日常茶飯事の大人の犯罪を目の当たりにし、将来に不安を感じ、この日本の中で何がいったい真実なのか、何を生きがいにしてこれから生活していったら良いのか判断、特定できず、その進むべき方向すら決定出来ないでいる。社会はまさに混沌とした暗闇の迷路に迷い込んでしまった感じだ。今や、様々な仮面をかぶったあらゆる種類の詐欺師達や犯罪者が社会の末端まで浸透し、社会は乱れ、汚れ、腐りきってしまった。



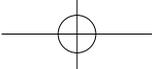
多くの犯罪者が暗躍し未来に向かって生きていく子供達がいつ犯罪に巻き込まれ、いつ危害を加えられるか、いつ命を奪われるか、まったく予測すら出来ない社会状況にある。同時に、子供達自身が状況の変化によつては自ら犯罪に手を染めていく可能性すら秘めている。

悪党どもが獲物を探し蠢く現在社会において犯罪に巻き込まれず、子供がいかなる相手からも騙されず、挫折することなく、法を犯すことなくこれからの将来たくましく生きていくにはどのように自分の子供を育てていけば良いのか。

その前途多難な世の中、これから子供達が悪の道に踏み外すことなく、力強く生き抜いていくにはどうしたらよいのか。それを阻止し、社会秩序を維持するために子供に手本を示し、模範となる行動をするには先ず親自身が覚悟を持って自分の子供に対し小さいときからのしつけをしつかりしていく事が望ましいと信ずる。

他人の子供より先ずそれぞれの親が自分の子供をどう育てていけばよいのが課題である。その答えのキーワードは「教育」である。

教育といえど子供たちがその大半の時間を過ごす学校での教育が重要視されがちではあるが、学校で教師たちが子供たちにいくら悪いことをやってはいけないと口を酸っぱくして教育しても限界がある。

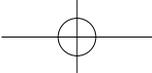


なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？

確かに学校での教師による教え、指導、育て方も大切ではあるが教師、学校はそれぞれの子供が将来どのように成長していこうが最終的に責任を負うことはない。

教師はかつての教え子たちが卒業後、例えば、社会的影響の大きい事件を起こし、他人に危害を加えたり、複数の人を殺害したりしたとしても何ら社会的制裁はおろか、小学校なり中学校の特定の教師の教え方が悪かったのがその犯行の原因の一部であると非難さえ受けないのだ。

通常、社会に特別な貢献をしたとしてすばらしい賞をかつての教え子が受けた時、恩師としてマスコミに登場し、いかにかつての自分の教え子が優秀な生徒であったかかを賞賛すると同時にいかに教師である自分は頭が良く、かつ自分の教えが正しかったかを吹聴する場面をテレビ等で見る場合はある。しかし、反面、反社会的凶行に走り、他人を殺傷し多大な損害を与えた犯人の親が「自分の子供がこのような犯行に至った事は親の育て方が間違っていたからだ」として責任を感じ自殺する事があるがその加害者のかつての恩師が「学校での自分の教え方が間違っていた」として責任を感じ自殺したり、マスコミや公の場でいかに教師である自分が間違った教育をしてしまったかを謝罪したりしたケースはない。

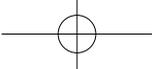


「極端に言えば、教師は生徒の一人一人が卒業後どうしようが、どうなろうが何ら責任を持たないばかりか、社会もそこまで要求をしていない。教師は生徒が卒業してしまえば一部の部活のつながりを除き、何らかかわりを持つとうとしないばかりか、当然責任を持つとする意識も無い。認知症等の病気の場合を除き、世の中に自分の子供の名前を忘れる親はどこにもいない。」

世の中に自分の子供の顔を忘れる親はどこにもいない。親は一生自分の子供のことだけを考えているのだ。例え不幸にして自分の子供が他人を殺めたとしても自分の子供である事に間違いない。例え、自分の子供が知的、或いは情緒的、若しくは身体的に障害を負って生まれてきたとしても自分の子供が一番大切でかわいく、むしろかえって愛しく思うだけで決して自分の子供の名前や顔を忘れる事は無い。

これに対し、ほとんどの教師は数年もすれば、いや数カ月もすれば現在抱えている山積する仕事との対峙で頭が一杯で余程優秀だったか、それともモンスター・ペアレンツを親に持つ生徒か相当のワルであったかを除き、卒業した生徒の名前はおろか、顔さえ覚えていない場合が多い。

一生、卒業した生徒のことを考えている教師はほとんど存在しない。



なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？

親は学校に頼るな！

親は学校の教師に頼るな！

自分の子供の教育は学校の教師に任せるな！

自分の子供の教育は親が主役である事を忘れるな！

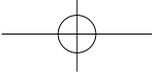
自分の子供の教育は親がやるのだという事を肝に銘ずるべきである。

子供の顔、名前を決して忘れることなく子供に対して一生死ぬまで責任を負うのは学校の教師ではなく親である。それ故に一番大切なことは「家庭教育」である。これから述べようとするこの「家庭教育のするめ」が家庭教育の真髄なのだ。

現代社会を人間性に基づく本来の社会に戻すにはやはり「家庭教育」がその核をなすものと信ずる。今の日本社会で誰もあてにするな。社会も、学校もあてにするな！自分の子供を自分の家庭の中で教育する事が一番大切である。

「家庭教育」が人間を人間らしく形成し生きる力の原点を成すものである。自分の子供がその時代に対応できる人間になるためには親の「家庭教育」をする事が大事である。

「家庭教育」の良し悪しが人間という動物を人間に形作るか、それとも他の動物に近いものに形作るかの基本を成す。人間が人間として人間らしく生活できる社会を取り戻すため



にはもう一度「家庭教育」の大切さを認識し、実行する必要がある。

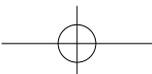
ほとんどの人々は大人になり、結婚し、子供が出来、子供中心の生活に無我夢中で毎日を送る。そして、子供と共に生活する日々もあつという間に過ぎ去り、子供はやがて親元から離れていく。その期間は僅か十年くらいだ。子供と一緒に過ごす時間は本当にわずかである。

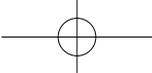
中学校に入ったら子供は部活中心になる。親よりも学校で友達と過ごす時間が多くなり、家に帰ってきても部屋に閉じこもる傾向がある。

親は自分自身のこれまでの人生を振り返ってみればわかるように自分の親と一緒に過ごす期間というものは極端に短かったということだ。そして、親がしてきたこと、親にされてきたこと、親がしたかったこと、親にされて欲しくなかったこと等のさまざまなおやみやえつてくることだろう。

その親が歩んできた道を思い起こし、それらの経験から得たことをどう自分の子供たちに生かしていくことが出来るかが問題である。

親が親として子供が生まれた時から当たり前のことをやり、当たり前の教育、助言をしていれば子供は横道にそれることなく社会で通用する一人前の人間に育っていく。





なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？

特別他の人たちと違ったことを子供に言うのではなく、常識的に考えて当たり前のことを言い、当たり前のことをやらせればいいのだ。

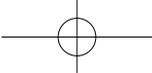
今、世の中の秩序が乱れ、当たり前のことを言えない、当たり前のことが出来ない親で飽和状態になり、社会はより混乱を極め崩壊の一途をたどっている。

そのような親に育てられた子供は無気力、利己的で他人の事などなんらかまわず自分勝手で全て自分さえ良ければよいとする傾向が極めて強い。

当たり前の事が当たり前に出来ないばかりではなく、最初からしようとしめない。長期的に見れば自分に数十倍、数百倍のマイナスとなつて跳ね返ってくる事を理解できず目先の損得だけを計算し、現時点で自分の利益にならないと誤つた判断をし、当然やらなければならぬ当たり前の事でも屁理屈をつけて逃げようとする子供が増えている。

その当たり前のこととは何か。全ての子供が親の言うことになんら反発、反抗もせず素直に何にでも親の意向を受け入れ、何の非行にも走らず、人一倍勉強し、良い成績を取り、有名大学に入り、高級官僚や一流企業と言われる会社に入って欲しいなどと言っているのではない。何も天才、秀才と言われるほどずば抜けて優秀な人になつて欲しいなどと言っているのではない。





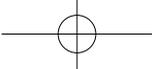
一人一人の子供がそれぞれ生まれながらにして異なった能力を持ち、その後の環境、努力により身の丈に応じたことをやり、将来、極力、摩擦のない幸せな生活ができるような身の丈に応じた仕事を得、身の丈に応じた報酬を得、身の丈に応じた平穏な生活を送って欲しいだけである。

少なくとも最低限法律を遵守し、人様に迷惑をかけず他人から少しは尊敬され、少なくとも人間として生きて証として自分や自分の身内のためばかりでなく、ほんの少しでも社会に貢献できる人間に育って欲しいだけである。

これからそのようなごく当たり前の人間になるように育てるには親はどうすればよいのか、親として当たり前に言うべきこと、当たり前前と言うべきではないこと、当たり前前にするべきこと、当たり前前にするべきではないことを列記してみようと思う。

もし、これらのことを、小学生や中学生になってからではなく、もつと小さいときから実践し、家庭の決まりでそういうものであるということを身体でもって気長に根気強く教えていけば自分の子供が当たり前前の事を当たり前前のようにして自分から進んでやるようになり、この乱世を生き延びることが出来る確率が高くなるかもしれない。

その確率は高学年になってから実行すればするほど反発が強く社会に適應する確率は低



なぜ今こそ家庭教育が必要とされているのか？

いものになるのは当然といえよう。

この出口のない長いトンネルのような暗闇で微かな救いの光を求め迷い続ける今こそ、小さい時からこの「家庭教育のするめ」が重要なのだ！

今混迷する社会で親が自分の子供にするべき事は何か？

教育は学校にも、教師にも、愚かな政治屋にも、行政にも頼るな！

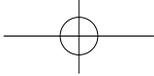
何の組織にも頼るな！

誰にも頼るな！

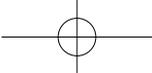
自分の子供の教育は自分の家庭で小さい時から親が行え！

これが最も重要であり、基本とすることだ。明日からと言わず、即、今日から自分の子供にこの「家庭教育のするめ」を実践してはいかかでしょうか。そうすれば子供も、親も変わり、子供は良く育つていき、家庭内が円満になる事間違いありません。

人生はたった一度だけである。苦虫を潰したような顔をして、いがいがした毎日をごすよりも明るく、楽しく、大きな笑顔を顔面に浮かべる毎日をごすごした方が良いのは当然である。あなたは子供にどちらの道を選択して欲しいでしょうか。親自身もどちらを選びますか？



題名が「家庭教育のすすめ」ではなく、この「家庭教育のするめ」を最後までお読みになつていただき、子供を持つ親として現代社会で失われた当たり前の事、失われつつある当たり前の事を再考察し、子供の教育に実践させ、当たり前の事が当たり前のようにして通用する当たり前の社会に戻す時期に来ているのではないのでしょうか。



一、朝ごはんを毎朝作って子供に食べさせろ！

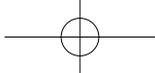
一、朝ごはんを毎朝作って子供に食べさせろ！

一日は朝の起床から始まる。小学校、中学校に入ってからからも親が子供を起こしに部屋に行くような情況を作らないためにも小さい時から親から起こされる事なく、自発的に時間（に余裕を持つて早起きさせる習慣を子供につけさせることが大事である。

このことを少なくとも幼稚園に入園した時から褒めながら訓練する事である。さらに通常遅くとも六時には起床させることだ。

六時に起きるということは夜遅くまで起きていない習慣を身につけさせることだ。ましてや近年、インターネットの出現でブログ作成、メール発信、携帯電話等で明け方まで熱中し、学校に来て授業中居眠りをしている生徒の数が増えているのが実情である。夜中の一時、二時、最悪の場合は明け方まで起きている子供もいるという。

要するに昼と夜が逆になり完全に体内時計に狂いが生じている子供が多くなっているの



だ。そのような子供に対して何も是正しようとしなない親は親としても資格がない。

もし、自分の子供が当たり前の人間に成長していった欲しいのなら子供には遅くとも夜十一時には就寝させ、ぐっすりと快適な睡眠を取らせることだ。

子供に規則正しい生活リズムを確立させる事がきちんとした子供に育てる基本である。

そして、朝ごはんは必ず親が作って子供に食べさせることだ。親として当たり前のことではあるが近年、この当たり前のことが出来ない親、あたり前のことをしようとしなない親が多くなってきたのは極めて憂慮すべき事だ。

朝、子供が一人でご飯を食べる中学生は半数近くになつてきている現状を親はどう考えているのだろうか。さらに最悪の事には朝ごはんを食べないで学校に来る生徒の数も年々増えてきていることだ。親は、病気や仕事等の事情がない限り、毎日必ず子供よりも早く起き、朝ごはんを作ることだ。そして、例えば、多少の通勤、通学時間が異なつていたとしても家族全員が一緒に朝食を食べる事だ。すなわち、祖父母がいる家庭でもみんなで一揃いに快食することだ。これが最低限の親としての条件であり、親としての責務でもある。

この時、父親も残業でどんなに夜遅く帰ってきたとしても朝は起きて家族全員で朝ごはんを食べる事だ。



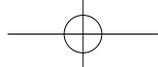
一、朝ごはんを毎朝作って子供に食べさせる！

朝ごはんを食べないと脳の働きの鈍く正常に活動をしないことが証明されている。また多くの専門家がすでに研究論文を発表しているように朝ごはんを毎日食べる子供と食べない子供の学習意欲や成績ばかりでなく落ち着き、集中力等の精神的行動にも顕著な差が生じている。

英語のブレイク・ファーストの語源のごとく前の晩の就寝時から断食状態であったのを打破するための朝食は絶対に必要なものである。朝食が口に入ったまさにその瞬間、人間は一種の恍惚状態になり、さらに胃袋の中に適量の栄養源が収納された時点である種の精神的安堵感が生ずる。

人間誰しも食べ物を入れた瞬間と、その直後、食感、匂い、味などを総合的に察しある種の快感を得る。この快感を得る事によって一日の生活が楽しくなるのかそれとも不幸な一日になるのが決定される。そのような理由からしても朝食は欠くことのできないものなのだ。

子供達は戦国の武将と同様これから学校という戦いの場に行くのだ。腹が減っては力も湧き上がってこず戦は出来ないのは当然だ。今日一日、同級生と戦わなければならないのだ。いかつい上級生とも戦わなければならないのだ。時には腕力の強い下級生とも戦わね



ばならないのだ。さらに顔を見るのもいやな嫌いな教師とも戦わなければならないのだ。出陣するにはまず腹に程よい量の栄養価の高い食べ物を入れておかなければ力も知恵も策略も出ず、思考回路機能が作動せず各教科の戦いでも負ける確率が高くなるのは当たり前だ。

また親が朝起きず、朝ごはんを作らず、子供が電子レンジでチンをしたご飯の上に前の晩の残り物を適当に寄せ集めたものを朝ごはんとして一人で食べているとしたら何も食べないよりはましではあるが学力ばかりか体力、戦略力も落ちてくるのは当然である。

長期展望に立った視野で考えれば戦術的にも人よりも優れるものを生み出すにはその源となるバランスの良い食べ物を朝に体内に取り入れなければならないのは当たり前のことである。それも添加物、発がん性物質、防腐剤にまみれた負の化学物質を含んだ食材ではなく、限りなく天然素材で作られた食物を口にするよう心がけることが重要である。

それらの食材は少々値段が張り、一般家庭においては経済的に苦しいかもしれないが家族の健康管理、脳細胞への栄養補給、成績のアップ、将来の職業の選択に付随する報酬等をマクロ的に考えれば十分に価値のある投資である。

また弁当が必要な場合は、前の晩にコンビニから買ってきたものを弁当箱に移し変える



一、朝ごはんを毎朝作って子供に食べさせろ！

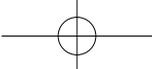
のではなくその日の朝に親が作る事が重要である。何も見栄えを張って豪華な弁当を作ることはまったくくない。栄養価を考えたバランスの取れたものでよいのだ。

子供は小さいときの弁当（の味）を生涯忘れないものだ。例えば遠足のとき、弁当の中に何が入っていたとか、あの行事の時は何を食べ、どんな味がしたか年月が経過しても忘れていない。子供は終生、母が作ってくれた弁当、父が作ってくれた弁当の中身とそれらの味を忘れてはいない。

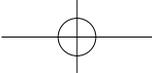
家の人が作ったきちんとした食事を食べていない子供は添加物まみれのスナック菓子や飲料水に手を出そうとする傾向が高く、その結果、精神的にも安定せず、直ぐ切れ、物事に集中できなくなる可能性が高くなると言われている。

自分の子供の将来のことを心から思うのなら何はともあれ朝は早起きし、朝ごはんを作って家族全員で食べる！ 人間いくら奇麗事を言おうとも食べる事が他の何よりも先決なのだ。先ず子供のことを考え、子供には毎日確実に食べさせる事だ。親が食べなくとも子供には食べさせることだ。ただし、食べすぎ、食べなさすぎは禁物、何事も程々にすることだ。

朝ごはんがきちんと用意されていることは家庭の円満、健康の基本であり、知力、活力、



体力、忍耐力を維持する上において欠くことのできないものなのだ。親が愛情を込めて作った朝ごはんを家族全員で親の暖かなまなざしの下で、勿論テレビを見ながらの食事ではなく、家族の顔を見ながら、楽しい会話をしながら食べる事が大切である。



二、二杯のお茶と朝うんこの習性を小さいときから教える！

二、二杯のお茶と朝うんこの習性を小さいときから教える！

朝食の後は必ず、昔の人がよく言っていたように子供にもお茶を二杯飲ませることが大切である。特に二杯目のお茶を落ち着かせて飲ませることだ。

朝のあわただしい時間、腰を落ちつかせのんびりとお茶を飲ませる時間などないと思われるが少量でもこの二杯目が重要なのだ。確かに朝、お茶を二杯飲んででも重大事故や思わぬ災難に巻き込まれる微かな危険性は誰にもあるが、朝の貴重な時間に少々のゆとりを持ってお茶を飲んだ方が一、通学途中、学校内で想定外の事象に遭遇した場合、慌てず、沈着冷静、的確なる判断をし、その難局を乗り切ることが出来る確率が高い。そのためにも朝は時間に十分な余裕を持って行動させ、二杯目のお茶を飲ませることが必要なのだ。そして、お茶の後は必ずうんこをさせる習性を小さいときから付けさせることだ。

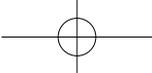
人間は食べ物をお口にしたらとき一種の快感を得ると同様に人間は自分の身体から、これ



まで身体の中にあつたものがその役目を終え、対外の放出される瞬間ある種の陶醉状態に陥る。尿や大便がまさに体外からの離脱する瞬間人は快感を覚えるのだ。この心地よい気持ち、要するに快感を伴う大きなうんこを毎朝排出する事が出来るのか、それとも出来ないかによってその人間の一日が楽しいものになるのか、それとも過酷な一日になるのかにかつている。

朝のほど良い、太めのうんこをするかしないかでその日の子供の脳の働きの活発化を左右させるだけでなく、身体全体の動き、精神的なゆとりが生じ、情緒の安定感が増すのだ。その毎日の朝うんこの習性がある後の子供の人生を左右し成功するのか、しないのかを決定付けると言っても決して大げさではない。

朝、快適なうんこが出来ず、数日間便秘の状態が長く続けば誰しも毎日が不快に感じる。三快、すなわち快食、快眠、快便のうちの一つである快便をも重要視し、毎朝、元気印の大きなうんこをし、スッキリした気分での日ばかりでなく人生そのものを爽快に過ごすことだ。ちなみにこの快食、快眠、快便の三つは人間にとって大切なものであり、その三つの達成時は賞賛に値し、実に美しいものであることから、三快の賛美と呼ばれ、三快の三美とも書ける。

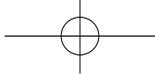


二、二杯のお茶と朝うんこの習性を小さいときから教える！

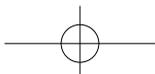
快便をするためには子供が幼稚園に通いだした頃から、毎朝、まず子供が起きたら直ぐに少なくともコップ一杯の冷たい水を飲ませる習慣をつけさせることだ。目を覚ましていても身体はまだ完全に作動していない状態に冷たい水は胃を刺激し、それに連動している腸の働きを促進し、腸内の排泄物を対外に排出しようとする運動へと繋がる事は当たり前の事である。そして、朝食の後には必ず二杯のお茶を飲ませる。そうすれば、しばらくすると相乗効果を生み出し、活気のあるうんこが出てくるのだ。とにかくこの習慣を毎日欠かさずことなく継続させることが人生の明暗を分けるのだ。それほどまで重要なのがこの朝の一杯の冷たい水と、朝食、そして二杯のお茶なのだ。

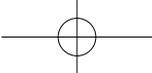
このことを親は特に小さいときから徹底的に子供に教える必要がある。子供の成長期における脳の多様化、複雑化していく高度な細胞分裂を促し、さらに発展されるためには幼児期からのトイレトレーニングの良し悪しに依存することが大であると同時に人生は朝うんこの習性いかんで決まるのだ！

毎日の爽快な快便は必ずや人生に幸せなうん、幸運をもたらすこと間違いない。人生の運は朝のうんこをいかにうんとするかにあるのだ。世の親はこの朝のゆとりを持って飲む2杯のお茶と快便を早めに子供に教え込む事だ。自分の子供が一人前になるのか、半人前



以下になるかの一生のうん命はこのうんで決定される。





三、子供が学校に行く前、帰宅した時、寝る前は怒るな！

三、子供が学校に行く前、帰宅した時、寝る前は怒るな！

客観的に見て親が激怒するに値する間違った行動を子供がとったり、親に対して言っ
はいけない言葉を使用したりした場合を除き、朝、親は少々の事で子供を怒らないことだ。

親の意の添わないちよつとした子供の発言に対し、親の独り言でも子供に悪い感情を与
える言葉をも発しないことだ。むしろ、毎朝何か例え小さなことでも褒めることを捜し、
それを褒めて学校に送り出すことだ。

褒めて学校に送り出すのと、怒鳴って学校に送り出すとは子供のその日の学校での様
子がどういものであるかは明白である。

父親だつて、女房に朝起きた早々から些細なことでガミガミ言われて出勤するとその日
一日が面白くないのと同じだ。ましてや車を使う職種についている親であるならば朝、家
庭内のいざこざが起因する交通事故を起こしたり、事故に巻き込まれたりする確率が極め



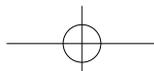
て高い事が実証されている。

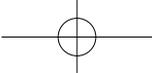
子供だって良い感情を持たないのは当然だ。いや、子供は親以上に敏感である事を親は忘れてはいけない。

人は自分が怒鳴られると他の人に八つ当たりをしたり、必要性のない小さなことにまでも怒鳴ったりする傾向がある。まさにいじめの構図と同じようにいじめられた者は、誰かをいじめ、そのいじめられた者がさらにいじめの対象を見つけ、弱いもの、弱いものへといじめが移項していく。

そのような状態が続くと成長期における人格形成に強く影響し、物事全てを否定的に見るようになりやすく、最初から他人の悪い部分だけを見つけ出す事に集中し、肯定的な捉え方をしない欠点が生じる可能性が高い。

逆に、子供の良いところを朝から見つけ、褒めてやることによつて、子供の心が豊かになり学校に行つても、友達の良いところを見つけようと柔らかな気持ちで接し、授業も意欲的に学習しようとするばかりでなく、学級、学校行事にも積極的に参加しようとする傾向が強くなる。そして、褒められて育つた子供は社会に出ても好感度な印象を他人に与え組織に入つても協調性がありそれぞれの職場の状況に即座に対応できるようになる。





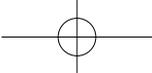
三、子供が学校に行く前、帰宅した時、寝る前は怒るな！

このことは学校から帰宅した時と同じである。学校から疲れて帰ってきた途端、「今日、中間テストが渡ってきたはずだ。すぐに持ってきて見せろ！」と大声を上げ、その結果を見るや否や「なんだ！ この結果は！ 勉強しているのか！ こんなことで希望高校には入れるのか！」などとはけつして怒鳴ってはいけない。

中学生なら朝早くから、一日、五時間か六時間の授業を受け、さらに部活をやり、くたくたに疲れて家に帰ってくるのが実情だ。教師は授業の空き時間にコーヒーとかお茶を飲んだり、時折お菓子を食べたりしてリラックスする事が出来るが生徒は一日中、授業に追われ、給食時の牛乳か、水しか飲めず、勿論お菓子などを学校に持ち込む事は禁止されておりゆつくりと甘いものでも食べて休む時間などないのだ。そのような一日を送ってきたかわい自分の子供を帰つて来た途端怒るのではなく優しい言葉で迎え、まず何か食べさせ、休ませることが先決である。そして、何かかか褒めてやる事だ。

また寝る前も同じである。絶対に寝る前には怒鳴ったり、怒ったりしないことだ。

就寝直前になって怒ったり、怒鳴ったりすればその日の楽しい一日が全ておもしろくないものになってしまう。また誰しも寝る前に怒られると、熟睡ができなくなり、次の日に悪影響を及ぼす結果となる。



寝る時間前は朝や学校から帰ってきた時と同様、その日の一日を振り返り、何か良いことを見つけ褒めることが大切である。子供が寝る前に褒められると快眠出来、その日の疲れも完全に回復し、次の日の活力源となることは間違いない。

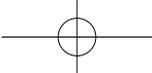
特に寝る前は必ず何かを褒める事を忘れることなかれ。

理想として、家庭内での怒鳴りあい、罵りあい、いがみ合い、殴りあい、冷やかしいなどをすべきではない事は当然ではあるが、そこは人間同士、例えば家族間においてもそれらの否定的態度や言動が時として表面化することは予想される。

どうしても子供に注意をしなければならぬとき、言わなければならない時、怒らなければならぬ時は夕食の後とか、比較的時間に余裕のある時間帯にすることだ。当然の事ながら両親が一緒になって怒る事は禁物である。どちらかが怒っているときはもう一方は絶えず子供の側に立つ事が必要である。

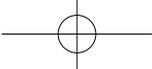
とにかく、子供が学校に行く前、帰宅した時、寝る前は絶対に怒らないで、極力褒めることをさがし、褒める事に徹底せよ！

しかし、子供の健全なる心の成長には褒める事が大切なのは誰しもがわかりきっている事だが、悲しい事のほとんどの親は褒める事よりも怒ることの方が多いのが実情だ。極端



三、子供が学校に行く前、帰宅した時、寝る前は怒るな！

に何もかも褒めすぎる事には、少々異論があるが、とにかく、子供は小さいときから褒めて育てる事が大切である。褒められて怒る子供はどこにもいない。



四、家の手伝いをさせよ！

親が自分で出来る仕事は子供に押し付けない事が基本であるが、家庭内の仕事を分担して子供に家の手伝いをさせる事を小さいときから教えることが大切である。

どんな些細な事と思われがちな事でも自分の手伝いが他の家族の一員にとつてどんなに多大な助けになるのか、また、その手助けがどんなに他の家族の一員から感謝される事であるのかを小さいときから教え、実践させるべきである。

食事前、皿をテーブルの上に並べる事、食事の後片付け、食器洗い、皿拭き、ゴミ捨て、掃除、特にトイレ掃除、洗濯干しの手伝いなどどんな仕事でも自ら率先して最低限一つは責任を持たせて子供に実行させる事だ。それが子供の人間形成に必ず役に立ち、将来、子供の人生のどんな場面にもプラスに作用することを親は子供に理解させ、実践すべきである。



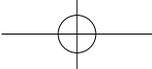
四、家の手伝いをさせよ！

子供が小さい時から自ら「家の手伝い」を継続的に実行したか、それともしなかったか
で子供が社会に出た後の人生を大きく左右する。

ただし、今の子供は自ら進んで家の仕事を手伝う事はまれである。そのような時代であるからこそ、子供が大人になり一人前に生活できるのか半人前か、それともそれ以下になるかの決め手がこの「家の手伝い」を親がさせたか、それともさせなかったかである。

どんな小さい事でも子供の年齢にあわせて子供の負担にならない程度の家の手伝いをさせ、家族という共同生活の場を円滑に運営するために自分が家庭の一員である事を認識させ、家族全員で助け合って生活している事を小さい時から体で覚えさせる事が大切である。その際、ゴミ回収日などを除き朝の登校前は子供に負担をかけないようにする事が必要だ。大人でも朝の時間は貴重だ。子供も自分のことで精一杯の時に親から用事を頼まれることは誰しもいやなものである。「ちよつと、その眼鏡とつてくれない?」「そこにある新聞とつてくれない?」などと親にとつて数秒しかかからないと思われがちなことでも子供に頼むな。親はそれくらいのこととは自分でやれ!そして、例えば、子供の役割であるとしてもゴミ捨てなども量が多いときは親が極力手伝ってあげる事である。

このことは子供が学校から帰ってきたばかりのときも同じである。



家に帰るやいなや「買物に行ってきたー!」「直ぐに玄関掃除しろ!」という言葉を発しないことだ。

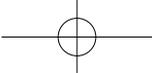
大人だって仕事から帰ってきた途端に、休み暇もなく一方的に命令口調で用事を言いつけられたらいやな思いをいだくのと同様に子供も同じである。いや子供は大人以上にいやなことである。

仕事帰りの親ばかりでなく子供も学校という戦いの場で一日中神経をすり減らしてようやくほっとする我が家に帰ってきたばかりなのだ。

そういった状況をよく理解し、帰ってきたらすぐに今日の一日のことを聞き上手になって子供が自分から話すのをじつと待ち、よく聞いてやることだ。

その中から子供を褒めるものを探し、褒めてやるほうが良いのに決まっている。子供が学校から帰ってきた時、直ぐに物事を頼むより子供のどんな小さなことでも良いところを見つけ褒めることだ!

さらに、就寝前の手伝い、子供にとつて重荷になるような手伝いは絶対にさせてはならないことは言うまでもない。いざこれからゆつくりと寝ようかと思つている時点で何か用事を頼まれる事は誰だって好まない。



四、家の手伝いをさせよ！

子供自らが家族内の空気を読み取り、率先して手伝おうとする心からの気持ちを持たせるためには親の日頃の子供に対する優しい、包容力のある言葉使い、接し方が重要な点であることは言うまでもない。

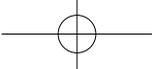
親の中には家の手伝いをする時間があるならばその分を勉強の時間に費やし、家の手伝いをさせない親もいるが、根本的に間違っていると一言わざるを得ない。

わずか一日のうちの五分、十分なり長くとも二十分程度の家の手伝いをさせることが学業の負担にはまったくならない。

家の手伝いは例え子供が受験期に入ったからといってそれを免除する必要などまったくはない。家の手伝いもさせず勉強だけさせることは間違いだ。特に子供が受験期に入ると家庭内であたかも腫れ物に触るかのように扱い、極力刺激になるようなことを言わないようにしたり、出来る限り用事を頼まないようにしたりし、全く家の手伝いをさせず、勉強だけして欲しいと願う家庭が多い。

根本的に誤りである。

本当に自分の子供がかわいいのなら、以前と同じように家の手伝いをさせる事だ。受験だからといって特別扱いをせず、甘やかさないことが子供にとってもプラスになる。勿論、



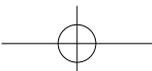
子供の身体的、能力的に応じた仕事を分担してもらうことが大切であり、受験直前やその他の状況に応じて加減し、かつして過度の仕事をさせないことは言うまでもない。

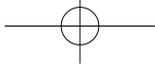
あくまでも子供が納得し、家族のみんなが団結し、感謝しあい、支えあっているということを確認して上での手伝いであつて決して、強制的に時間を設定して威圧的にさせるような事があつてはならないのは当然である。

家の手伝いはやがて、子供が社会に出て、一人暮らしを始めたとき、自分で住む部屋や周辺を積極的にてきぱきと整理、整頓し、快適な生活を送れるばかりでなく、職場においても自分から進んでその状況に応じた臨機応変の仕事ができることにも繋がる。

自ら自発的に家の手伝いをしてきた子供は社会に出てからも必ずや信頼される人間になる可能性が高い。生徒の学校生活時代においての机、カバン、自分の部屋、ファイル等の整理、整頓、後片付け状況の良し悪しを見れば歴然としている。それらが出来なかつた生徒は頭の中も整理、整頓が出来ず、何事をするにしても前途は多難だけが待ち受けていることは明らかだ。

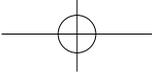
親は子供に対して、家の手伝いをする事は自分の将来のためである事を話し、納得させる事である。自分の子供の将来を考え、本当に自分の子供がかわいいのなら家の手伝いを





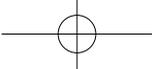
四、家の手伝いをさせよ！

させよ！
これが基本中の基本である。



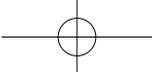
五、朝は必ず仏さんに水とご飯を子供にあげさせろ！

今の自分が生きているということは先祖がいたからこそ存在している。親はこのことを子供が小さい時から「先祖崇拜」という仰々しい宗教色の濃いものでなく、生命の継続の事実として子供に認識させることが必要と考える。同時に家族内の道徳として常に自分の先祖、家族の人々に感謝の気持ちを持つ大切さを教えることだ。毎朝仏壇にご飯と一杯の水をあげる前に朝食を食べない習慣を小さい時から教えることも必要である。自分の先祖を敬うことで自分とはその線の延長上にある一点であり、その小さな一点こそが非常に重要なものであることを認識させる。その一点の存在がなければ一本の線は断絶し、成り立たなくなる。まさに先祖から続いている一本の線の中の一点が今の存在を位置付けているのだ。子供が能力的に判断できる時期が来たらこの地球上での自分という小さな存在の意義は、同時にその線は自分の先祖の継続ばかりでなくある地域、ある国、世界としての一



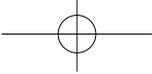
五、朝は必ず仏さんに水とご飯を子供にあげさせろ！

本の線であることも教えることも大切なのでないだろうか。宗教そのものは形而上の概念であり、自分の先祖を敬うことも宗教の一種としても捉える事が出来るかもしれないが、これが唯一最上の宗教であり、かつ信頼できる宗教であると断定するものではない。むしろ道徳の一環であると捉えた方がよいだろう。全世界的にみて慈悲の心を持った弱者救済、争いのない平和な楽園などを目的とした宗教がある反面、詐欺的要素が強い宗教団体も多く存在していることも否定できない。宗教は必ずやってくる人間の死という確実性のために誰しもが懐く死への恐怖からの解放、緩和とその最後の儀式として存在するものであると規定することも出来る。こと宗教に関しては常識から逸脱した企業経営的な儲けが発生するものではなく、商業の範疇に属するものではない。従って宗教を金儲けの手段として行っている多くの者や団体は偽善であると断定する事も出来る。勿論、それが偽物でどれが本物の宗教であるかを親は子供に強制すべきでないことは当然である。その区別は本人次第ではあるが、同時に子供に物心がついた時点から、どの宗教に依存しても災難や悩み事から救ってくれないことを教えることだ。要は他力本願ではなく自分の力で何事にも対峙しなければならぬことを教えるのだ。何の試験でも自分が勉強しなければ合格しない。試験直前になって神様頼み、仏様頼みをしたところで一時の気休めと金の無駄使いだけで



ある。人が困ったとき神様、仏様にすがりついてもある程度の精神的安定にはなるかもしれないが神様、仏様とも何も手を貸してはくれず、助けてもくれないことを誰しも知っている。

勿論、亡くなった自分の先祖にご飯や水を毎日あげて拝んだところで試験に合格する保障も病気が完治するわけでもないが、自分が悩んだとき、病気になったとき最初に助けてくれる人はその先祖の継承である自分の家族の者である事を認識させることだ。特に現代社会において、何があっても極力行政や政府に頼ることはしないことだ。何事も第一次的には自分で解決する気概を持つことが大切だ。もし、それが出来なかった場合は優先順位は第二番目に家族に頼ることだ。それぞれの家族の結束が社会を成り立たせている基本をなすものである。そして、この家族の団結に余裕があれば、周囲に手助けが必要な人がいれば、手助けをする心を持つことだ。そして、さらに社会に手助けが必要な人がいれば、その手を社会に広げていき、自分の手助けで喜び人がいることに誇りを持つことだ。そして、さらに地球的規模で物事を考えた場合、他の国で手助けが必要な人々がいれば、人間として生きていく喜びを感じながらそれらの人に手を差し延べその喜びを他国の人々と共有するべきであると思う。その基盤となる心が育むのはまず自分の先祖を敬う事の大切さ



五、朝は必ず仏さんに水とご飯を子供にあげさせろ！

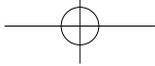
を小さい時からの教える事から始まる。要するに自分の先祖からの一本の継続した線を敬う事で、少しずつ余裕が生じた場合、他の人達の線が手助けを必要としている場合、その線を敬い、手助けをし、その規模を拡大していくことが大切である。

日本社会には何かことが仕損じたとき、「御先祖様に顔向けが出来ない」「御先祖様に申し訳ない」という文言があった。しかし、最近この言葉が聞かれなくなってきた。全てに關し完璧でない人間が毎日御先祖様にご飯と水を上げる事によって少しでも邪心を取り除き、自分は御先祖様と直結している線の一部であるという強い確信と共に心に安らぎを持つて一日の始まりとすれば悪の誘惑に入り込むことは少なくなることだろう。

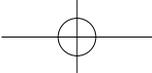
小さい時から宗教としての要素を強めた観念ではなく家庭の道徳的決まり事として「御先祖様がいつも見守っている」と教える事は子供にとってプラスになるばかりでけつしてマイナスにはならないはずだ。

そういった意味からして、朝は子供に必ず仏さんに水とご飯をあげさせることを日課とさせ、子供に先祖に手を合わせて拝むことによつて自分ひとりではなく、家族、先祖がいとも側にいて見守っている事を認識させる事が必要ではないだろうか。

核家族化になり、自分の家に先祖の仏壇がない場合は御先祖の小さな写真を掲げ、その



前にご飯と水をあげ、手を合わせてから学校に行く習慣を付けさせることも必要である。



六、小さい時から子供を全身で抱きしめろ！

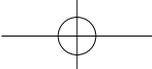
六、小さい時から子供を全身で抱きしめろ！

ただし、男の子は黒、

女の子は赤になっただら体で抱きしめないで心で抱きしめろ！

小さい時から機会あるごとに子供を全身で抱きしめて、愛情たっぷりと包むようにして育てることが子供の発達過程において特に重要である。小さい時に親の愛情をたっぷり受け、全身で親から抱きしめられて育ったか否かによつて後々の子供の人生そのものに大きな影響を与える。

子供は小さい時、赤銅色に輝き、堅い筋肉で肩が盛り上がり、太い腕の父から抱きしめられた時の光景、感触、そして匂いをいつまでも記憶に留めている。汗が勢いよく噴出し滴り落ちる父の姿にたくましさ、強さ、厳しさを感じ、誇りに思い、父の姿を投影しながら自分の生き方を学んでいく。子供は小さいとき抱きしめてくれた母親のふくよかな乳房の感触から極め細やかな優しさ、暖かさ、しなやかさなどの感性を学んでいく。子供は小さい時、親から抱きしめられた時の感情を後の人格形成の基礎とし、そこから品性、情

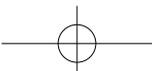


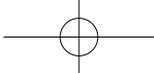
操的な発想を波及させていく。

親はとにかく機会あるごとに小さい時から努めて子供を全身で抱きしめ、子供を身体一杯で包むことによつて親は子供を命がけで保護し、絶えず守っていることを体感させることが大切である。そして、就寝時には小さいときから、子供が眠るまで本を読んで聞かせる事が重要である。愛情、感情を込めて優しい言葉使用で子供の側で本を読んであげることだ。そうする事によつて、子供は安心して物語の世界に飛び込んでいくことが出来、子供特有の界限の無い豊かな夢をさらに大きく膨らまし、想像力溢れた感性の形成にも役立つ。幼児期の心の安定がやがてはその後の子供の人生への基礎を築き上げていくことには間違いない。

特に子供が幼稚園に上がった時から一日の戦いの場から帰つて来た時は思い切り子供を愛情込めて抱きしめることだ。ただし、男の子は陰毛が生えた時点で、女の子は生理が始まつたら身体で抱きしめることを慎み、周りから精神的な愛情を注いで包み込むように心で抱きしめ、育てることが大切だ。

この時点で親子とはいえども、父親は娘と母親は息子と一緒に風呂に入らないことだ。一人の男性、女性とみなすことが大切である。中学、中には高校になつても娘と一緒に風





六、小さい時から子供を全身で抱きしめろ！

呂に入る父親、息子と一緒にいる母親もいるらしい。そのような親になるな。例えば親子であろうと陰毛と生理が始まったら身体的接触は避け男女の差をしっかりと教えるべきである。

従って、家庭内でも子供のプライバシーを尊重することだ。子供部屋に入るときは親といえども必ずノックすることを忘れるな。また親は子供の前に平気で着替えをしない配慮も必要である。

何はともあれ大人としての兆候が見られる直前まで子供を身体で思い切り抱きしめろ！
そのあとは心で思い切り抱きしめろ！



七、テレビを観る時間、ゲームの時間を小さい時から制限しろ！

子供が一日何時間もテレビを観続けても何も言わない。子供部屋にテレビ設置を容認し、一人で夜中の何時までも好きな番組を観、テレビゲームをしていても何も言わない。いや言えない親がいる。もし、そのような親がいるとしたらその子供の将来は見えている。現代のテレビ社会でテレビを観る時間やゲームをする時間を厳しく子供に制限を課することはきわめて難しいが、自己管理が完全に出来る子供であるのならいざ知らず、大半の場合それが出来ず、従って小さいときから厳格な制限を設けるべきである。小さいときから子供に、どの社会にも決まりというものがあ、家庭内でも決まりがあり、その決まりに従わなければならないのだという事を納得するように教えることが大切である。その際、家族の決まりがどの決まりよりも優先することを強調すべきだ。例えば、「何でうちだけテレビを一日一時間しか観られないの？」太郎君の家では何時間見ても親は何に言わ



七、テレビを観る時間、ゲームの時間を小さい時から制限しろ！

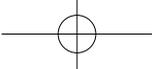
ないって！」と子供が抗議しても即座に「うちの決まりはうちの決まりだ」と小さい時から繰り返すことだ。問題は今まで一日五時間も、六時間もテレビを観たり、ゲームをしてきたりした子供に「今日からテレビとゲームで一時間だけ！」といきなりいつでも通用しないのは当たり前のことであるので何事も最初が肝心である。決まりは小さいときからすることが肝心だが、もし、テレビ観戦時間、ゲーム時間に制限をしてみなかつた家庭があるとしたら、今日から徐々にその時間を減らしていく事をお勧めする。長くとも一日最高で何時間何分にするなど家族でテレビを見る時間、ゲームをする時間を決めることが大切である。テレビの中には非常に有益な番組もあるが、現在放映されているテレビ番組の多くは余りにも低俗、品格無き、やらせ番組が多く、小さいときからそれらの番組に曝されると健全な子供でも簡単に感化、悪影響を受けやすい。本来ならば番組を監視する関係機関はもつと規制すべきであるが報道、言論の自由という障壁に阻まれ容易に規制出来ないのが実情であるので各家庭である程度は規制すべきである。何も子供に教育に関する番組だけを見させ、品のない番組を子供に見させるなど言っているのではないが現在放送されている番組の多くから得られるものはさほど期待できない。出来ればテレビは極力観ず、ゲームはしないほうがいい。



さらに大切な事は食事と時は絶対にテレビを観ないという鉄則を設け、小さいときからそれを徹底させる必要がある。家族の一人一人がテレビに食い入って一言も話さないで食事することを慎むべきである。特に親自らテレビを観ながら食事をしているのは言語道断である。朝食であれ、夕食であれ、全ての食事のときはテレビを消し、家族で会話を楽しみながら食事をするのが基本である。

勿論、余りにも厳しくすると学校でテレビ番組やゲームの内容が生徒間で話題になった場合、それについていけないという理由でいじめの対象となることもありうる。例えば、一日一時間と制限することは親にとってもつらいことではあるが長い目で見た場合、思考力のある子供ならば、数年後、数十年後にそのテレビ観戦時間やゲーム時間を厳しく制限してくれた親に必ずや感謝することであろう。今、いやな顔をされても時が経てば、ましてや自分が結婚し、親となり、自分の子供の教育を真剣に考える歳になったとき、テレビやゲーム時間を厳しく制限してくれた親の偉大さを再認識するだろう。

一日一時間以上どうしても見たい番組がある場合はビデオ録画し、週末観るようになる方法もある。従って、週末はある一定の制限を設けテレビ、ゲーム時間を延長するなどのゆるい決まりを親子での話し合いによって決定することも必要である。その決定は子供に

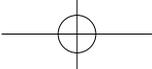


七、テレビを観る時間、ゲームの時間を小さい時から制限しろ！

対しては厳しいが親自身に対して厳しくないことが往々にしてある。従って、親自身も観る番組の選択が必要な事である。子供に対し、どの番組を観るべきと規制し、親はくだらない番組を観ていたのでは子供は当然納得しない。

子供に対して厳しく制限する以上、親もその約束を実行し、断じて子供がテレビを観ないときには親も観ないことは当たり前のことである。

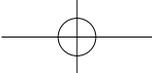
とにかく、小さいときからテレビやゲームに関して一定のルールを設け、それが家の決まりであることを徹底させることだ。子供がテレビを観すぎたり、ゲームをやりすぎたりしていることに親が何と言わない事は子供の甘やかしを助長し、子供をより愚かにするだけで決して子供を賢くさせない。逆に余りにも厳格なテレビ、ゲームの規制もまた子供のためにする可能性がある。大切な事は話し合っただけのところまで約束し、それを実行するか否かである。どの親も自分の子供が将来どうなつてもいいとは思っていない。子供の将来を考えた場合、子供が毎日テレビを観たいだけ観させる、それともある程度は規制する。賢い親はどちらの方を選択するだろうか。



八、携帯、けつたい、撤退論

親は高校卒業まで子供に携帯電話を持たせるな！

近年携帯電話が介在する極悪、非道なる犯罪が著しく増加している。勿論、携帯電話の利便性は理解できるが必ずしも携帯電話が日常生活に絶対有益で必要不可欠である必需品という結論にはならない。現在、中、高生の多くが携帯電話を持ち、会話は勿論の事メール、インターネット、ブログに時間を費やし、携帯電話を通し、家族の者よりも友人と過ごす時間が極端に多い。もし、可能ならば今子供が持っている携帯電話を全て解約し、高校卒業までは子供に携帯電話を持たせないことが望ましい。しかし、すでに携帯を与えてしまった以上それを取り上げようには困難を極める。携帯は自分で働いて給料をもらい、その中から使用料の支払いが出来るようになってから持つべきである。ただし、大学に入り親元から遠く離れ生命の安全上どうしても持たせた時は子供と携帯電話の必要性を話し合い、月単位、年単位の金額がいくらになるかを計算させ、いかに携帯に費やす金額が大



八、携帯、けったい、撤退論

きくなるかを考えさせることも大切である。一家全員携帯を持つとなると経済的負担も大きくなる関係上親も仕事上どうしても必要な場合を除き携帯は持たないようにすべきである。携帯電話を持たなくとも日常生活になんら支障をきたさない。

携帯関連会社は多岐に渡る携帯機能の高品質化を目指し研究開発に全力を注ぐと共に人間の間隙のない購買意欲を駆り立て、最大限の利益を上げようとし販売する。そのからくりを子供に教えることも大切である。連日メールに費やす時間の多くがいかに無駄で無益であり、その携帯に費やす時間を経済的金額に換算したらどれほどの額になり、その際の経済的損失を計算させ、その時間を他の事に使用した場合どれほど有益であるかを認識させることだ。

携帯電話の大部分の機能は単なる金儲けのための道具に過ぎない。周囲のほとんどの友人が例え携帯を所持していたとしても「携帯電話は家の方針で持たないことになっており、ブログ、裏サイトに他人を誹謗、中傷する文章を打つ時間も、またそれら悪質、陰湿な低俗なレベルの品性のない幼稚で文章といえない日本語を読む時間にも関心がないので高校卒業まで携帯は持たないことにしている」で通すことである。持たない事によって携帯に係わる友達関係の無意味な争いやいざこざに巻き込まれることもない。携帯電話と毎日に



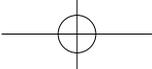
らめっこする時間があるならば、自分の目的に向かって勉強したほうが得だ。

もし、携帯を持っていないという単純な理由でいじめの対象となり、友人が距離を置くならば、そんな友人と友達になる必要はまったくない。そんな学校は辞めることだ。またそれでなくとも今、地球全土は不必要な電波で飽和状態になっている。人間の脳はそれら異常電波で汚染されていない保証などどこにもない。

携帯を持っていないからといって卑屈になることなどまったくない。むしろ携帯を持っていないことに誇りを持ち高校卒業まで堂々とした態度を保つことが今の社会に必要なのだ。

出来る事ならば携帯電話みたいなけつたいなものを死ぬまで待たずこの社会から一日も早く撤退させる廃絶運動を起こし、完全に無くしたほうがより人間らしい生活が出来るであらう。

今の社会状況から見れば中学卒業後、子供に携帯を持たせることは時代の流れで致し方ないという見方もあるが、親自身は極力、携帯電話は持たない事だ。どうしても持ちたい願望があるならば、死んだとき冥土の土産として今、一部の時代に敏感に即応した賢い葬儀屋が売り出し中の木製携帯電話を自分の棺の中に入れてもらうことで十分だ！ 携帯？



八、携帯、けったい、撤退論

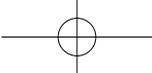
そんなけったいな物、一日も速く世の中から撤退する事を望む！
携帯、けったい、絶
対、撤退だ。
親は高校卒業まで子供に携帯電話を持たせるな！



九、子供が本当に悪いことをした時は殴れ！

子供を一人前になるまで育てる過程において予期せぬさまざまな事象が生じることは当たり前のことである。親が育った時代と子供が育っている今の時代が勿論異なっている。それぞれの時代環境、社会的背景、経済状態などの相違点が多々あるので子供と親の意見が食い違い、時にはその結果、親子間での言い争い、喧嘩になるのは理解出来る。親は自分が子供の頃、親と言いつつたり、喧嘩したりした時のことを思い出せ。自分だって親の言うことを全て聞いていた良い子ではなかったであろう。子供は全て親を満足させる行いや言動をするものではないことを親自身が一番良く知っているはずだ。

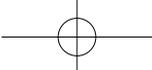
ただし、いくら時代が変化したとはいえ、明らかに子供が間違っている時はその場で注意し、それがどうして間違っているかを的確に指摘することだ。その際、子供に話す前に要点を整理しくどくと長く言わず簡潔に伝えることだ。その結果、子供が再び過ちを犯



九、子供が本当に悪いことをした時は殴れ！

す恐れがあり、猛省せずに逆に反抗した場合でも、どうして親はその行為を許容、容認できないかをさらに説明し、長くとも5分以上にならないようにすることが大切である。ただし、怒る時間帯を考えよ。出来れば日中の明るい時間帯に叱れ。決して陽が落ちてから怒らないことだ。特に夕暮れ時には怒らないように心がけたほうが良い。誰しも一日の中で太陽が沈むときは気も沈みがちになる。日中でも暗い部屋で怒ると一層暗くなるので、怒るときは電気を煌々と照らし、けつして一方的に子供にだけ光線を当てない配慮し怒ることだ。また怒る時は狭い部屋で叱るな。それでなくとも狭い空間の空気が親の威圧感と一緒にあって飽和状態になっている。狭い部屋でがらん長時間嫌味を言われたら誰でも圧迫感で窒息状態になり、良い感情を抱かないのは当然である。さらに怒るときは一定の距離を空けて座ることが最低条件である。その際、子供を正座させ、親が立ったまま上から頭越しでがみがみ言わないことだ。子供も親も椅子に座るにしても畳の上に座る場合でも対等に正面から顔と顔を向き合わせることだ。そして、弟、若しくは妹など他の者がいる前で怒らないことだ。怒るときは誰にも聞こえない範囲であることを確認してから怒れ。

また一つの過ちを注意しているにもかかわらず、今回の行為とはまったく関係のない過



去の過ちを再び持ち出しだらだらと文句を言わないことだ。注意するときはその行為ひとつだけに絞り簡潔に怒ることだ。親の中には子供の過去の過ちばかりでなく、子供がみんなの前で恥ずかしい思いをしたときのことやもう二度と触れられたくない失敗した事などを繰り返し何度も故意に言う親がいる。このような親は思慮にかけているといわざるを得ない。誰にでももう言われたくないことを一つや二つか抱えている。間違ひ、失敗はその場限りにし、子供が過去のことを言われ不快に思う事を二度と言わない親が聡明な親である。何事も後に尾を引くような言動、行動はしないことだ。

子供が本当に悪いことし、誰が考えても殴ることに値する行為や、言動をした時、父親は子供をその場で思い切り殴れ。勿論、怪我をしない程度に急所を外し、後遺症や傷跡のような外見上表面に残る殴り方や、精神的に生涯子供の内面に遺恨を生ずるような殴り方は勿論しないことだ。殴り方に最善というものはないが平手で一発ないし二発が妥当な線ではないだろうか。あくまでの親として理性ある殴り方をする事だ。

その際、親は単なる一時的な感情で殴っているのではないことをわからせることだ。ただし、殴ることは最終手段である。悪いことは悪いことであり、本当に悪い行いや悪い言葉を使用した場合は大人になった時、社会的に通用しないのでそれを親は是正させるため

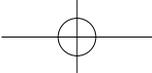


九、子供が本当に悪いことをした時は殴れ！

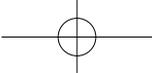
に殴っているのだということをお教えるべきである。殴ることも怒るときと同様に過去の事を再び持ち出しその過去の分までも再び殴ることは絶対に避けることだ。

今、日本の社会的秩序が統率を欠き混乱している理由のひとつに昔と比較し父親の権威が極端に失墜しさらに父親自身が精神的にも身体的にも臍抜けになり子供が悪いことをし、その行為が殴るに値するときですら尻込みし自分の子供を殴ることが出来なくなつたことに起因している。要するに草食親父が増えすぎているのだ。

殴るという行為は暴力であり、何の理由であれ悪いことであると主張する人間がいる。そのような考えを持つ事は勿論自由であり、尊重されるべきである。しかし、人間はあくまでも動物の一種であり、健全な社会共存生活を営んでいく意味において小さいときから行動の良し悪しを学んでいかなければならない事を忘れてはならない。父親は断固として、社会を乱す行為を自分の子供が犯した場合、それを是正し、正道に戻すために子供を殴る事によつて父親の権威と強さを示すことが重要なのだ。しかしながら、親自身が子供の行為以上にあくどい行為、非難されても当然な事を行っている場合は勿論親は子供を殴る資格がない。日本の父親達よ、もう一度自分の行動を良く考え、自分にも非があつたら自ら襟を正し自分の子供が本当にかわいかつたら、子供が悪いことをしたときは怒鳴れ！ 殴



れる父親になれ！そして、数十年後かに子供からその当時殴られた事を感謝される父親になれ！ただし、殴るのは高校生までだ。高校卒業後はけっして子供を殴らないことだ。その殴る時に注意しなければならぬことがある。両親が一緒になって文句を言わないことと同様、両親が一緒になって殴ったりはしないことだ。出来れば、母親は決して子供を殴らないほうが良い。今の世の中は一番前と逆転し母親が余りにも強くなり子供を殴り、父親が弱体化し母親に殴られた子供を父親がなだめすかしている傾向がある。この傾向を昔に戻すのだ。父親が殴り、二発目が来たら母は身体を張ってその間に割り込み子供を守るのだ。またよく昔の刑事ドラマで見られるように被疑者を取調べるデカさんの役割分担を活用することだ。要するに今の警察社会では皆無になっているようだが極悪非道な筋金入りのヤクザも対面した瞬間にびびってしまう顔をした刑事が取調べの際、否認し続ける被疑者を長時間に渡って怒鳴りつけ、殴る、蹴る等の暴力を振るってボコボコにして後、自白しない被疑者に捨て台詞を吐き退室する。その直後、もう一人の柔和な顔をした少々太り気味の「仏の長さん」と呼ばれている刑事が入室、何も言わず椅子に座る。そして、おもむろに被疑者の前にタバコを差し出し、ライターの火を点け、それをゆつくりとした動作で被疑者が口にくわえてタバコの方に移動させる。やがて被疑者が肺の奥深くまで発

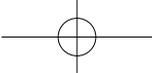


九、子供が本当に悪いことをした時は殴れ！

「癌性有害物質を含んだ煙を浸透させ終わったら「仏の長さん」は無言のまま二本目を差し出す。それから留置場の官弁の味に嫌気をさしている被疑者にふたを開けた瞬間、玉ねぎと卵、それに揚げたてのトンカツの匂いが取調室に充満する出前のカツ丼を食べさせる。

ガツガツと音を立てながら勢いよく胃の中に熱々のカツ丼を流し込んでいる側で「仏の長さん」は自分の子供を見るような優しい、温和な顔で渋いお茶を入れる。そして、食後の一服。しばらくしてから少しずつ事件とはまったく関係のない世間話を始める。やがて、被疑者の田舎や小さい時の思い出、特に母親の話を引き出し、味のある朴訥な言葉で自供に追い込む名物デカさんが昔は各署にいたものだ。その手法を参考することも大切である。このように余りにも芝居がかかる必要はないがけっして、両親二人一緒になつて怒るなかれ。殴るなかれ。親はそれぞれの役割を分担し、子供の教育をする事が大切である。

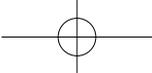
また殴る際にしても、子供が後々まで不快な感情をいだく人格を否定するような言葉を発しないことだ。言葉だけでなくヤクザにはヤクザのイントネーション等があるように、それぞれの社会でその社会特有の隠語や話す際一種独特の抑揚がある。親が子供を殴る時、チンピラが使用する荒々しい口調の言葉を使えばそれなりに子供も荒々しく反応し、かえって反発し粗野な心が形成され、顔までも変形してくるので注意することだ。



さらに親は子供に対して、上からの目線で言葉を発しがちであるが、小さいときからその場その場に応じた言葉を使用することは大切だ。基本的には子供に対する言葉遣いにはくれぐれも注意し、決して語気を極端に強める命令口調の言葉を使用せず、怒る時でも、殴る時でも親としての威厳があり、品性のある柔らかい言葉で接すれば子供を素直に育てる秘訣のひとつである。

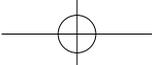
親は極力感情を抑え、怒り、殴りの中にも優しい思いやりの言葉を使用すれば子供も率直に反省しそれなりの優しい品性のある心、顔、しぐさが形成されるのは当たり前のことである。要は後々、数週間後、数カ月後、数十年後に子供が親に叱られたことを思い出したとき、長期間に渡り遺恨を持つような叱り方をしないことだ。最後は子供の行った行為、行動が本当に間違っていたことを自ら認識、反省させ、再び過ちを繰り返すことのない強い意志を持たせる言葉で締めくくることがだ。そして、例えば子供がどんな悪いことをしたとしても親は子供を守ることを心から伝えることが必要である。この最後の言葉いかんで子供が本当に猛省し、過ちに終止符を打つか、それとも同じ行為を繰り返し、より悪い行動をするかにかかってくる。

ともかく、殴るべき時は殴れ！ 本当に子供が悪いことをしたら殴れ！



九、子供が本当に悪いことをした時は殴れ！

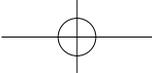
悪い事をした子供を本気で殴れない親になるな！そして、忘れてはならないのは親が常に正しいとは限らない。子供の言い分が正しく、親が間違っている場合もありうる。その場合は素直に子供に表面上の言葉だけでなく身体全体で謝る事を忘れるな。



十、泥んこ論

子供が初めて悪いことをした時はその場のあいまいな言葉で簡単に片付けなくてその最初の時点で厳格に叱ることが大切である。そして、その悪い行為次第で殴る事が値する場合は大怪我にならない程度の力で思い切り殴る事が大切である。

一度目の過ちでしっかりと厳しく怒らない、殴らないと、子供は二度目、三度目と同じ間違いを起こす可能性がある。思慮分別が出来ない子供に親が一度目でガツンと強い態度を示し間違った行為を直させる事だ。たった一回だけなら、たった一本だけならいいだろうという安易な考え方を完全に最初の時点で捨てさせることだ。喫煙にしても一本吸ったら次の二本目、そして三本目と拡大し数を増やしていく傾向がある。そのうち、中毒となり吸わないと震えが来て、身も心もボロボロになり一生ニコチン中毒の悪魔から逃げ出せなくなる。何事も最初の一回目の過ちで悔い改めることに失敗したら、二度目、三度目と



十、泥んこ論

簡単に失敗を繰り返すようになる。特に中毒性物質を含んだものに多い。

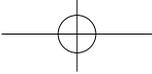
この思考過程は子供が新しい服を着て泥んこ遊びをやったときと同じ現象に見られることから泥んこ理論と名づける事が出来る。最初はちよつとした泥でも跳ねないように慎重に遊ぶ。そして、しばらくして最初の泥が付着した時、次の泥が着くのを恐れ、もう遊ぶのをやめようかと考える。しかし、遊びが面白いと継続して遊ぶ。そして、二つ目の泥が衣服に着く。そして、三つ目、四つ目……と泥が付着するに従って泥がいくら大量に付着してももうどうなつても良いという考えに移行していく。この泥んこ理論はすべての分野に当てはまる。たつた一つの泥んこがやがて数え切れない泥んこになり、取り返しのつかない状態になる！

子供が小学生、中学生の時に学校でタバコを吸って担任から連絡を受けた場合や家でタバコを吸っているのを見つけた時はタバコがいかに身体に有害であり、いかに癌にかかる確率が高く、寿命を縮めるかを具体的な数字を挙げ、タバコのもたらす害の衝撃的な写真や、ビデオを見せることも必要だ。また喫煙者の一部にはところかまわずの歩きながら煙草を吸い空気を勝手に汚染し、吸わない人たちの健康も害し、吸殻を捨てている。また平気で走行中の車からのポイ捨てはするし、とかく社会的迷惑行為を繰り返す身勝手な人間



に多いという事を子供に話し、自分の子供がそのような人間になって欲しくないなら最初の段階できつく叱り、思い切り殴る事だ。また自分の子供にタバコを吸って欲しくないのなら、もし、今まで親もタバコを吸っていたとしたらその時点できっぱり禁煙する覚悟が必要である。さらにこのタバコの件と同様に今、若者の間に大麻や覚せい剤が忍び寄っている。この状態ではいつ高校生、中学生に浸透してくるかわからない。ちよつといたずら程度の一回だけ経験してみようなどという考えを持たせないように親は常に子供にタバコ、覚せい剤等の使用、所持がいかに重大な犯罪であるかを徹底的に教えることだ。

子供の成長期にこの泥んこ理論に当てはまることのないように、親は最初の泥んこが着いた時に二つ目が付着しないように子供を諭し、理解させることが大切なのだ。

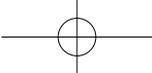


十一、比較三原則

十一、比較三原則

「お兄ちゃんは中学校の時、部活でもキャプテンでテストもいつもずば抜けてよかった」
「従妹の花子ちゃんは夜遅くまで勉強で、たくたになつて帰つてきてもくだらないテレビ番組などに全く関心なく夜遅くまで勉強し、成績も良いそうよ。それに比べあなたは何で勉強しないの？」
「あなたの同級生の太郎君はどこか抜けたあんな顔をしているけれど成績は学年でトップだつて！ あなたは太郎君よりよほどましな顔をしているにもかかわらずどうしていつも下から数えたらトップなの？」
などとは兄弟・姉妹、親戚、同級生と三つの事と比較した言葉を親は決して言わないことだ。これを比較三原則の禁止と名づけておこう。

兄弟・姉妹がいる場合、上から順に成績が良い場合はさほど問題はないが、その逆で弟、妹のほうが成績の良い場合も考えられる。この場合は特により一層の配慮が必要である。兄、姉としてのプライドがあり決して親は兄や、姉のプライドを弟、妹の前で平気で傷つ



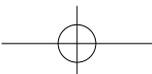
けるような言動のないように特に気をつけなければいけない。

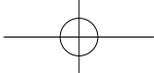
さらに学習や運動面での成績もさることながら、容姿端麗、身体的な欠点に関することを兄弟間、姉妹間、親戚、同級生と比較し、例えばふざけのつもりでも軽々しく口にしなないことだ。特に思春期に入った子供や女の子には絶対に姉妹間だけでなく、他の人と比較しないことだ。

女子は男子以上に自分の容姿を気にしている傾向があるので例えば自分の娘は決してそんなことを気にはしないだろうと思われることに關しても、姉妹と比較し、蔑視、差別、卑下、否定、身体的、能力的欠点につながるような言葉は絶対に使用しないことだ。

親がなんとも思っていない言葉でも子供にとって非常に敏感なものであり不愉快極まりない言葉になりうる。たった一度だけの他との比較した言葉が子供を生涯傷つける結果になることを親は常に認識すべきである。

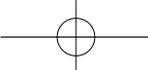
また親は言葉に限らず、表情、態度にも特段の注意を払う必要がある。特に自分の子供が学業面でも、運動面でも特別支援が必要とされる場合や、容姿端麗で異常なほど気にしている面がある場合は親自身、子供が落ち込むような言動や態度は絶対にとらないように常に配慮することである。さらに子供の友人とか他人に対しての親の言動、行動に子供は





十一、比較三原則

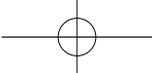
敏感に反応し精神的に苦痛になるケースもあるので親は十分にその点を考慮し、行動を取るべきである。えてして、自分の子供が他のものよりも劣っていると自己解釈し他人に対し、卑屈な言動、行動をとる親が見受けられる。親自身、自分の子供にも自分にも誇りを持つて他の人への接し方も自然体で振舞うべきである。それとは逆に自分の子供がずばぬけて優秀な場合も考えられる。子供の成績が良いと、親自身も偉くなったような錯覚に陥り、その結果他人に対する接し方が上からの目線で見ると傾向が高くなる。傍から見ていると実に見苦しい。やはり他とは比較することなく自然体が望ましいことを親は肝に銘ずるべきである。



十一' Study first, fuck later policy

親は子供に思春期になる前から、子供はどのようにして生まれるのか、子供を作ること、子供を育てることとはどういうことであるのか等の性教育を教えるべきである。確かに学校でも性教育の指導をしているが、各家庭においても独自に母親は女の子に父親は男の子に生命の誕生の仕組みをそれぞれの立場から性教育をする事が大切である。

今、社会はインターネットを初めとする情報産業等の媒介によつて性に関する情報で溢れている。その結果人間の本来の性衝動をより高揚させ、当然の事ながら小、中、高中生に多大な影響を与え、性関係に異常なほどまで興味を持たせている傾向になっている。親は自分たちが子供であつた時の社会と現代とでは性に関する概念、考え方が異なっている点を考慮し、自分の子供が性に芽生えた時期になつたら早めに今の時代に即した性観念で対処する必要がある。その際、確かに時代の推移と共に貞操観念の概念も多少なりとも変



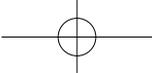
十二、Study first, fuck later policy

化しているがその根本はそう簡単に変わっているものではない。特にその変化していない基本概念を早い段階から子供に教えるべきだ。要するに、小さいときから最低限、ある一線を超えないように浅く、広く異性との付き合い方を教えることだ。人間、ある時期が来たら恋をすることは当たり前であり、それを覆い隠し、話題にしないようにするより家庭内で公に話し合える雰囲気を作ることが健全である。そして、何に関しても物事には順序があり、その順序を間違わないことが大切であることを親は子供に小さいときから教えることが大切である。どの親も子供に「うんこをしたくなかった時は、トイレのドアの前でズボンをはいたまま最初のうんこをし、それからドアを開け、ズボンを脱がずに便座に座り、それから残ったうんこをし、そのままトイレから出てくる。そして、ズボンを脱いでトイレトーパーでお尻を拭き、半分うんこを付けたままのズボンを上げる」とは言わないだろう。何事にも順序がある。何事も順序が間違うと大変なことになる。ということで **【Don't fuck first, study first!】** の標語が実に大切なのだ。

人生の成功の鍵は性交を最初にし、それから勉強するか、それとも勉強を最初にし、それから性交するかである。要するに勉強を最初にして、いかに性交する時期を遅らせるかである。性交を早くし、勉強をあとにすればするほど人生の成功から遠ざかる確率が高



い。要するに単純に考えても小学生、中学生若しくは高校生の時期に性に関する時間、性交に費やす時間が増えれば増えるほどそれだけ勉強に費やす時間が少なくなる。一時的な肉体的快楽におぼれ本来学問に集中しなければならぬ時期に性にその大部分を費やすことはそれだけ勉強する時間から遠ざかることを意味する。一瞬のエロスを求め、本来あるべき人生を棒に振ることはない。それよりも、学生時代はたまたまエロ本を読む程度にし、勉強、運動そして自然との対話に大半の時間を割き、それらに精力を注いだほうが異性に精力を注ぐよりも将来のためになることは必然的である。学生時代はエロスではなくエロ本だ。エロ本よりも日本文学全集だ。特に女の子の場合は絶対に小、中、高生の時に子供を作る行為だけはしないように親は性教育を小さいときから徹底的に教えることが必要である。子供が子供を産み、育てていく事はどれ程大変な事であるか口うるさく説得させることだ。といつても性行為に走る小中高はいるが、絶対に子供だけは生んではいけないことを理解させなければならぬことだ。学校での性教育だけでは十分ではない。自分の子供が本当にかわいいと思うなら家庭での性教育を早い時期から行うべきである。小学生、中学生から性交を繰り返かえし、中絶をして身体だけでなく、精神的な打撃を受けないように親は絶えず自分の子供に注意を払うべきである。中学、高校の学業半ばにして子供が出

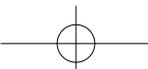


十二、Study first, fuck later policy

来、その赤ん坊を育てていくということにどれほど大変であり、どれほど周囲の人たち全てに負担がかかってくるのか、それ以上に自分がやりたかったことを諦めそれをも犠牲にしなければ子供を育てていくことが困難になるという現実の姿を小さい時から教える必要がある。人生は一度限りの勝負だ。結婚し、子供を作り、育てることにあせることは無い。それよりも自分で本当に将来就きたい職業があればそれに向かって勉強をしたほうが得策である。次のステップに進む順序をくれぐれも間違わないようにすることが大切である。あくまでも勉強が先であり、自分の目標を決定するまでそれまで軽々しく性交渉を持つべきではないことを親は丁寧に思春期に入る前から自分の子供に教える事である。一時の快樂の為に、一生を棒に振ることは無い。このことは上級学校に進んだ後も同様である。自分が小さい時から求め続けてきた仕事かもしれないとしたらそこに到達するまで一時の欲求に溺れ、途中で断念するような事がないように親は順序を逆にしてはならないことを子供に言い続ける事だ。数列的に正しい順序に異常をきたせば自分ばかりでなく、家族の者全ての人生にも多大な弊害を与える事になる。従って、くれぐれも理性を持って行動するように子供を厳しくしつける事が大切である。しかし、時代は変わった。昔に比べ貞操観念が欠如し、結婚まで純潔、童貞を守り続けるなどという人は人間国宝に指定され、国か



ら報奨金が支給されても不思議でない現代社会になってしまった。再び昔に戻り道徳教育の一環として古い性教育概念の必要性を考え直すべきであると主張してもどれほど多くの人々が耳を傾けてくれようか。純粹で清らかな関係が失ってしまった今でこそこの【Don't fuck first, study first! and fuck later】のスローガンを子供の机の前に大きく掲げ、毎日唱和させることが大切である。これを【最初に性交をするな！ 勉強が最初、そして性交はそのあとに！】と日本語で大声を出して言うとなぜか卑猥で違和感が生じるのでこれを英語で【Don't fuck first, study first and fuck later】言うとりズミカルで子供にも案外すんなりと受け入れられる標語であり、全国にこの標語を広める啓蒙活動を始めることもいずれ必要となってくるだろう。同様に「あなたは最初に選ぶのはどちらの単語？ 性交、それとも成功？」と日本語で尋ねるより、Which word would you choose first, fuck or success?と英語のほうがリズムミカルな響きがある。あなたは自分の子供にどちらの単語を選択して欲しいか？ 聡明な親なら答はわかりきっていることである。

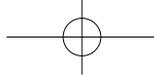




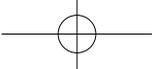
十三、子供に小さい時から家庭の味を教えろ！

十三、子供に小さい時から家庭の味を教えろ！

小さいときから家族全員で家庭料理を一緒に作る機会を設けることが必要である。出来れば最低一週間か二週間に一度はみんなで餃子とか、ハンバーグとか何かを作ることを推奨する。家族がわいわいと会話をし、仲良く協力しながら料理を作ることが大切である。特に父親と母親が本心から睦まじい姿を子供の前で表現することは子供に安心感を与え子供の健全な成長に欠かせないものである。両親が顔をあわせれば直ぐ喧嘩をしたり、罵り合ったり、一言も口も聞かない家庭は子供の心に暗い影を落とし、子供の将来の希望をも閉ざしてしまう恐れがある。小さい時に家族全員で作った家庭料理の味、その時の家族の雰囲気は大きくなっても忘れないものである。子供と一緒に過ごす時間などほんのわずかである。中学に入学したら子供は部活に、試合に、塾にと二分の時間をも惜しみ走り回り、ほとんど親と顔を合わせる時間など無くなる。本当に子供と一緒に笑う、一緒になっ



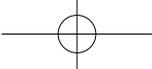
て料理をする、一緒になって語り合う、一緒になってはしゃぎながら過ごせる時間など限られており、人生の中の一瞬である。その貴重な限定された時間を有効に使うことが必要なのだ。特に母親は女の子にだけでなく、男の子にも時間の許す限り自分が母親から受け継いだ料理方法を教えておくことだ。包丁の持ち方、それぞれの食材に応じた多様な切り方、米の磨ぎ方ばかりでなく、煮物、揚げ物、炒め物などの料理方法、さらに、食材を無駄なく食べつくすにはいかに工夫し料理するかを親は自ら子供の前で手本を示すのだ。子供に積極的に包丁を持たせ、料理させる事である。時には、まな板の上で誤って自分の指を切って血を流しても勉強だ。時には間違って切った自分の爪が食べ物の中に入っていたとしても勉強ではないか。そして、父親は包丁の研ぎ方も伝授する事だ。将来子供が自立した時、どんな状況になったとしても食べる事が基本であり、自分で料理をして食べられるように小さいときから教えておく事が必要である。人生において基本はおばあちゃん、おじいちゃん、母親が作った家庭の味、遠足のとき、母親が突然病氣し、変わって父親が朝早く起きて作ってくれた、不恰好でも大きな本当に美味しかったあの心を込めた優しい父親の温もりが感じられたおにぎりの味をいかに子供達が一生持ち続け、そして、いずれ子供たちが結婚した後その味を継承させていくかである。自分の家庭独自の味を知らない



十三、子供に小さい時から家庭の味を教えろ！

子供は往々にして感性が欠如しているように見受けられる。さらにその時の台所一杯に満ちていた家族の暖かい、ほのかな雰囲気、感情はいくつになっても忘れるものではない。家族が助け合い、笑いあい、冗談を言い合い、ふざけあい、失敗しながら作った家庭の味は歳をいくつとつてもいつでも食べたい物であり、家族の宝として継続していききたいと思うものである。

さらに、小さい時から子供に食材に対して好き嫌い、偏食をさせないようにし、それぞれの食べ物に栄養素があり、それらが身体の骨格、各組織の根幹を成す基礎であり、脳の発育に欠くことのできないものであることを子供に言い聞かせる事だ。同時に料理をする時にはそれぞれの食材の大切さを教え、いかにしてそれらの食材が栽培され、家庭までの経過に携わった多くの人々に感謝する心を持つ大切さを教えることである。そして、それらの食材を創意工夫して作った独自の家庭の味を持つことも重要であろう。その際、極力季節に応じた食材を使用するようにすることも大切である。現代社会はどんな食材もいつでも食べられるようになり、便利ではあるが、逆に人間の感性を劣化させている。そんなに遠い過去の話ではなく、人々はその食材そのものの表すその季節独特の色彩や外観だけでなく、それを食することによって季節の変化をも敏感に味わうことが出来た。素材を十分



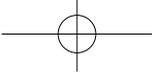
に活用した季節に応じた香り、季節に応じた感触、季節の応じた食感、季節に応じた色彩、季節に応じた風の流れを受けながら、人間は移り行く季節の色、形、自然と対比することによって感性が刺激された。近年その失われつつある感性を四季に応じた季節の風味をふんだんに取り入れた家族独自の味を全員で確立し、小さい時から子供の味覚中枢に忘れることの出来ない味として貯蔵させることが大切だ。そのようにして家族みんなで作った料理を、やがて自分が一人で生活し始め、自炊しなければならぬ状況になった必ずや役に立つ。小さいときから手伝いもせず、自ら包丁を握り、料理も作った事もなく、ただ親が作った物を食べる事だけに専念した子供の将来は悲惨である。親は自分の子供が本当にかわいいと思うならば将来のことを考え、子供には男の子であろうが女の子であろうが調理方法を小さいときから少しずつながらも教えるべきである。

さらに、家族に余分な時間と土地があるならば、家庭菜園で、親子一緒になって畑を耕し、土壌に肥料をやり、自分たちで芋や野菜の苗を植える楽しみを味わうべきである。手間と時間をかけ収穫までの一連の厳しい作業を行い、最後に完成品をみんなで料理し、食べる楽しみを共有する事は子供の情操教育にも寄与し、子供の感性の更なる発達、磨きにも著しい効果を上げるだろう。



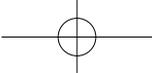
十三、子供に小さい時から家庭の味を教えろ！

そして、生涯忘れず、次の世代にもその家庭独自の味として引き継ぐ事の出来ることにもなるであろう。自分の子供が大きくなったら社会に通用する人間になるのか、ならないのかを決定する要因の一つがそれぞれの家庭独自の味を有しているか、有していないかにかかってくる。限りなく最大限の時間を家族全員で過ごすようにしたほうが良い。人間の一生は短く、親が子供と一緒に過ごす時間は限られており、さらに短い。



十四、喧嘩の薦め

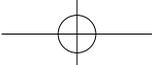
少子化で子供の数が減少している現在、ましてや一人っ子の家庭も多いので、今や兄弟喧嘩も出来ない状況下にある。さらに近所にも子供の数が少なく友達も出来にくい。従って、公園デビューの機会も極端に少なく、おもちゃの奪い合いにより友達と喧嘩する機会もなくなってきた。子供は兄弟喧嘩、友達と喧嘩をすることによって、その時々状況に応じた空気を読み取り、行動、言動、力を加減すると同時にいたり、協調性を学び成長していくものである。特に男の子は小さいときは喧嘩をすることをためらってはならない。子供は殴り合いの喧嘩をする事によってどの程度の痛みが伴う怪我になるのか小さいときに知るべきである。大人になっても対人関係の基礎となるのがこの幼児期の喧嘩にある。喧嘩を通して、葛藤、躊躇、決断等の思考を繰り返し、脳を活性化し子供は成長していく。どうすれば兄弟、友達と食べ物や、おもちゃを共有し合えるか。



十四、喧嘩の薦め

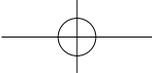
どうすれば友達になれるのか？ どうすれば喧嘩をした後、どの言葉やどのような態度、動作で仲直りをするのが出来るのか？ そのような様々な事を相手から、その場の状況から、そして他の友人、周囲の反応から学ぶのだ。

従って、親は子供の喧嘩は一概に悪いものとして捉えるのではなく、子供の成長に必要な不可欠なものとしてむしろ争い、喧嘩をする事を歓迎するぐらいの気持ちで対処することが大切である。特に近年、草食系男子の増加は日本という国家そのものの存亡に係わる重大事である。体力的にも精神的にも強い男子を維持できない状態が長期に渡り続けば国は滅びていくのは必然である。男子よ立て！ そして、喧嘩せよ！ ただし、自分の子供が明らかに悪いのにいきなり相手を殴ったり、集団で弱い相手に喧嘩を仕掛けたりして得意満面に意気揚々として帰ってきた時は、親は激怒し、思い切り子供を殴れ！ 反面、子供の主張が誰から見ても正しく、相手から先に手を出したときや、強い相手や、数人の年上の者に一人で立ち向かって負けて泣きながら帰ってきたときは思い切り強く抱きしめ、何度も何度も褒める事だ。そして、今度はそういう卑怯な輩には絶対に負けないように喧嘩の仕方を親は子に伝授し、仕返し、今度は勝ってくるように促すのだ。少しぐらい警察沙汰になつて、学校や警察から何か言われても親は自分の子供が正しい事を行動に移したな



らば堂々と最後まで子供をかばってやればよいのだ。

喧嘩は極力しないことに越したことはないが、特に男の子は時としてしなければならぬ状況のときは素手で殴り合いの喧嘩をした方がむしろしないよりも良い。少々の喧嘩は大人になる過程で必要不可欠なものではないだろうか。必要な喧嘩をする事によって人間は成長していく。小さいときから一度も素手による殴り合いの喧嘩の経験をしたことのない子供に育てたいのか、それとも一度ぐらいは身体を張った素手の殴り合いを自分の子供にさせたほうが良いのか、あなたはどちらを選ぶか？ 日本絶滅の危機に直面している現在、へなちょこになってしまった日本男子よ、大いに喧嘩をして、立て！

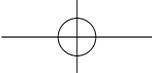


十五、小さい時から自然と接触させ、外に目を向かせよ！

十五、小さい時から自然と接触させ、外に目を向かせよ！

子供はあつという間に成長する。親は極力小さい時から子供を外で遊ばせることに努めるべきである。勿論、昨今の頻発する犯罪傾向からして、そうすることは非常に危険性と伴うものであるが、親は時間の許す限り子供と一緒に外で遊ぶことだ。兄弟、姉妹のいない一人つ子が家の中で一人自分の部屋に閉じこもりテレビゲームや、インターネット等をするよりも身体をふんだんに動かし、体力をつけさせることが必要である。さらに高校、若しくは大学入学までは時間と金を惜しまず、機会があれば家族と一緒に旅行、展覧会、美術館、博物館などさまざまな場所に連れて行くことが大切だ。

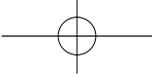
全ての人に与えられている一日二十四時間、一年365日を何もせずただ家の中で何となく過ごし、季節の推移、外の変化に何の関心も示さず、感情、感性の乏しい人間には進歩も発展もない。



特に父親は自分の仕事関係での週末ゴルフなどの遊び、レクレーションを極力避け、子供が小さい時から毎日の生活をだらだらと過ごし、何の変化もないものにさせないために節目、節目に応じた四季折々の地域における伝統文化に関する行事や長年に渡り継承されてきている風習などに、自ら率先して子供と積極的に参加することだ。

その様々な行事の背景を彩る四季折々の咲き乱れる植物の花の匂いからも子供は敏感に季節の風の変化を感じることが出来る。一面の菜の花、桜、アゼリア、スイセン、コスモス、ラベンダーなどに加え、季節ごとに果実をつける木々の花、サクランボ、りんご、梨と色とりどり色彩が日本の伝統文化と絡み合い記憶貯蔵過程に相乗効果を成していく。子供は季節の色、季節の香り、季節の風を感じ、それらに反応、それらと対話する事によって脳細胞が最大限に刺激されるのだ。そして、社会集団の中の一員としての自分が他人と積極的会話をし、対比する事によって他人を尊重し、意見をしっかりと聞く事、間の取り方などを学んでいく事が出来る。小さいときから自ら進んで物怖じせず他の人々と対話をする事、様々な活動に参加する事が自らの人生を切り開いていく。

家族全員で栗拾いやキャンプをし、野外炊飯をし、夜はテントの側で家族一緒に毛布に包まりながら満天の星空を見るのも子供の成長にプラスになることは間違いない。子供の

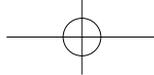


十五、小さい時から自然と接触させ、外に目を向かせよ！

興味、関心、想像が無限に広がる時はほんの一瞬である。子供の天性を伸ばす期間は限られている。その貴重な瞬間を見逃す事なかれ！ 子供の年齢に応じたその時々の方力の開花に合致したその瞬間を捉え子供の成長の一つ一つの節目として強固なものに仕上げているのに手助けする事が親の務めだ。

しなやかに天空に突き刺す勢いで頑強に長く伸びたその姿が人々を魅了する竹はなぜ折れないのか。答えは誰しも知っている。節目の一つ一つがその竹を補強しその役割を果たし雄姿を支えているからだ。子供の脳を活発化させるためには節目のない竹は何の意味が成さないように単調な生活を送るのではなく、絶えず毎日の中にも変化を、月ごとの中にも変化を、そして、一年を通して変化を持たせ、竹の節を出来るだけ多種多様な要素で作る、さらに強固で感受性のある繊細な神経を増やしていく事が大切なのだ。

親はその時期を逃さず、有効的に活用すべきである。父親は土曜、日曜と朝早くから一日中パチンコをやっている遊戯時間などまったくくないのだ。どうせ終局的には負けるように巧妙に仕組まれている謀略ギャンブルに無駄金を使うのなら、その損失に見合う額を子供の成長に欠くことのできないそれらの節目を求めて日本の各地を旅するとか、又は、外国へ子供を連れて行き、日本とは異なった文化、習慣等を持つ異国で貴重な体験をさせた

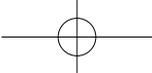


ほうが余程プラスになるだろう。物心がつく歳になったら、豊富な日本の歴史や伝統文化に触れる旅をする事も必ずやプラスになるであろう。またナイアガラ瀑布に川から近づくボートに乗せ日本では想像も出来ない壮大さを体感させることやグランドキャニオンの果てしなく繰り広がる神秘的な自然の雄大な光景を上空から見せることも何らかの子供の感性を最大限に引き出すことになるであろう。また気象状況が刻一刻と変化する冬登山の厳しさにどう対応していく事が出来るかを子供に体験させ、子供の脳を刺激させ、脳神経の触手を伸ばさせ、発達させる手助けも必要であろう。

人間の力では太刀打ちできない嵐、台風、雪等の自然の恐ろしさも小さいときから実感させ、所詮、人間は自然には勝てず、人間の存在などというものはいかに自然と対比したる小さなものであり、人間は自然と共生、共存していかなければならないことを教えることも子供の感性、感動する心を育てるために欠くことのできないものであろう。

また自らが生き延び、子孫を繁栄、継続させるために過酷な自然の中で懸命にえさを探し生きようとしている多くの生物の生態や、それら動物の死骸をも小さいときから直面させ、人間も動物の一種であることを認識させ、やがて確実にやってくる人間の死とは何であるのかも考えさせることも子供にとって感受性、感性等の情緒的思考育成にプラスの影響

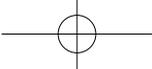




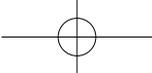
十五、小さい時から自然と接触させ、外に目を向かせよ！

響を与えることは間違いないであろう。

さらに、特に男の子の場合は小さいときから一人で冒険をさせることも必要である。ヒッチハイク、自転車旅行など危険性をはらんでいるが自分の子供を信頼し、多少無謀と思われる旅でも後々の人格形成に役に立つことだろう。さらに、もし外国に行きたいと言いついたら「自分で稼いで金を貯め、世界のどこでもいいから現実の外の世界を思う存分見て来い」と言う親になつて欲しい。若いときに外国に行き、世界には数多くの民族、文化、宗教等があることを自分の目で見ればものの見方も変わってくる。世界のそれぞれの違つた国で、違つた建物に住み、違つた物を着、違つた食べ物を食べ、違つた言語を話す生活を体験させることは長い人生において必ずや役に立つに違いない。井の中の蛙大海を知らず、日本の中にいて日本を見るのと外国から日本を見るのでは大きな開きがあることは明白である。自分の子供が日本を外から客観的に冷静に見られる人間に成長して欲しいと思うなら、子供の限らない可能性を開花させたいと願うなら親は間違つてもパチンコのチューリップを開花させることやスポーツの範疇にも入らないレクリエーション若しくは遊びであるゴルフに貴重な時間を費やすことはせず、子供と一緒になつて自然と接する時間を設けるであろう。子どもと過ごせる時間は本当に一瞬である。自分の子供のことを真



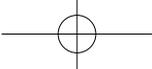
剣に考えている賢明な親はどっちを選択するだろうか。パチンコと過ごす時間、それとも子供と過ごす時間？ その答は明白な事は誰しも知っている。



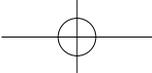
十六、子供の前では口を滑らすな！ ただし、時には……。

十六、子供の前では口を滑らすな！ ただし、時には……。

親は子供の前で決して愚痴をこぼすべきではない。家庭の経済状態が芳しくなく毎日の生活が苦しい場合でも子供の前では絶対に惨めになる言葉を発しないことだ。例えば、父親の給料が低く、又はリストラで仕事を失っているため家庭が極度に貧窮しているとしても母親は子供の前で父親を卑下、軽蔑するような言葉を口にしないことだ。特に子供は大人の数千倍も数万倍も感受性が鋭く、思春期の子供は親の会話に敏感に反応し、悩み、苦しむ。ただし、子供の前で大々的に夫婦喧嘩をする必要はないが半面教育としてあえてわざとすることも考えられる。現実には今日、明日の食べ物を買うように買えない家庭状況であるという事は、その根本の要因は家に金が無いということであり、まざまざとその悲惨さを子供の前で示すことも時として必要であるかもしれない。家庭に金がないということはいかに全ての事に影響を与え、惨めな思いをしなければならぬことを小さい時から子供



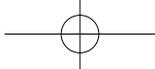
に教えることも大切であるかもしれない。学校での教師、若しくは金がある偽善者である多くの評論家たちは「金が全てではない。金で買えない大切なものがある」と教えるかもしれないが、金があればほとんどのものが買えるという現実を親は自らの貧乏生活を通して自分の子供に教えることも時として必要である。世の中、口先だけの奇麗事だけでは生きていけない。何をするにしても、何を買うにしても、どこに行くにも、この世は全て金で決定されることも教えることだ。親のような貧困生活から脱却し、貧乏生活を一生送りたいくないのならはどうすればよいのかを子供は目の前の現実を通して学ぶことが出来る。その状況から脱却するには人としての道徳に反して、法律を犯してお金を得るのではなく、何はともあれとにかく勉強をしなければならないことを賢い子供なら痛感するはずだ。また親の中には子供の前で過去のこと、ああすればよかったとか、こうすれば良かったなどと過去のことを今となって愚痴をこぼす親もいる。過去は百パーセント絶対に戻ってこない。過ぎ去ってしまった自分の過去を振り返り、嘆き、悲観主義になつて愚痴つても全て子供に悪影響を及ぼすだけで何の助けにも立たない。自分の過去のことを反省し、いたらないさを改善し、これからの将来の何をなすべきか熟慮することは大切であるが、確実に戻らない過去を未練がましく振り返つても時間の無駄だけである。そんな愚痴をこぼす時



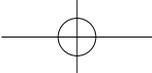
十六、子供の前では口を滑らすな！ ただし、時には……。

間があつたらなんでも良いから仕事に就き、金を稼いで自分の子供にひもじい思いをさせないようにしろ！

さらに子供の前で平然と教師、学校批判や他の人の悪口、「あの家の親が悪いので付き合い合ふな」「あそここの家の子供と付き合え」などとは決して話すべきではない。教師、学校に言いたいことがあるのなら子供の前ではなく、直接学校に言って教師の前で話せ。それができないのなら言わない方が得策だ。子供の友達関係は自分で判断させるべきであつて、決して親が口を挟むべきものではない。親の職場や外出した先々でも同じである。壁に耳あり、障子に目あり。子供の耳と世間の耳は数十万倍も、数百万倍鋭い。ましてや現在の世の中、メール、インターネットであつという間に誰が何を話したかがすぐに世界中に配信させる可能性があるがあるので批判、中傷めいた発言は慎むべきである。親が頻繁に愚痴をこぼし、他人の悪口を言っていると、親の行動が子供に引き継ぎ、子供も親と同じ言動し、親と同じ道を進む傾向が強い。親が真に子供を一人前の大人として成長して欲しいと願うのなら全てに関し否定的思考、行動を慎むことである。物事をネガティブに捉え、相手の欠点を指摘するよりも絶えず相手の良い点を捜し、褒める人間になることが大切である。ことのほか子供の前では元気で、明るく、楽しく、明朗に、快活に振舞い愚痴をこぼさず



リセットのきかない一度きりの人生を有意義に過ごしたほうが子供の健やかな成長の助けになるばかりか、親自身のためにもなる。子供の前では愚痴ることなかれ！ 口を軽々しく開くな！ 親は言葉の重みを知り、言葉とは責任を伴うものである事を肝に銘ずることを忘れるなかれ。

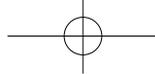


十七、子供部屋は家族の人が一日で一番長い時間いる場所の隣に作れ！

十七、子供部屋は

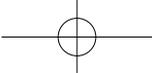
家族の人が一日で一番長い時間いる場所の隣に作れ！

子供が小学生になり子供部屋が必要であると言われた時、又は新たに子供部屋を作るときは玄関口から家族が一日の多くの時間を費やしている部屋を通らずして直接部屋に入ることができる場所に作らないことだ。また入り口のドアから部屋を見た場合、部屋全体が複雑で内部が死角にならない構造にすることが必要である。このことは子供を常に監視し、信頼していかないという観点ではなく、親は子供が最低限高校卒業までは常に子供は何をしているのか大まかには把握する義務があり、それに伴う責任を負っているという観点にある。特に、子供は中学生になったら、部活動などでほとんど時間がなくなり、学校から帰ってきたら出来るだけ親の目が一番行き届くところ、家族の人達と一緒にいられる時間が一番長い場所を考慮することだ。そのような場所の隣に子供部屋を作ることだ。例えば、台所の隣、母親が夕飯の支度をしている時は台所で宿題や読書などをさせ、子供の話を聴いて



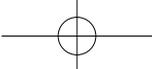
あげ、相談に乗り、何かよい点に気づいたら褒めてあげることが大切である。またおじいちゃん、おばあちゃんがいる家庭ではその部屋の隣に作ることも望ましい。同時に子供が自分の部屋にテレビやインターネットが欲しいと言いつ出した場合、即座にノーの返事をすべきである。テレビは家族と共に居間で、若しくはおじいちゃん、おばあちゃんの部屋と一緒に観るもの、インターネットの接続は親の許可得て親がいるときに使用すべきである事を小さいときから徹底する事である。

子供に自分の部屋を与えたということは子供を信頼し、責任を与えたということではあるが決して治外法権を有しているものではない。親は子供部屋がどのような状態になっているか時折見る権利がある。一度言えば親の意図していることを理解でき、きちんとそれに対処できる子供なら何も言う必要はないが、それが出来ない子供には部屋を与えた時点で掃除等をする習慣を付けさせる事だ。部屋片づけが出来ない、部屋の中ばかりでなく、机、衣服等の整理、整頓が出来ない子供は判断力、集中力に欠け、学業、スポーツなどにも影響し、何をやっても中途半端に終わり、社会に出ても通用しない傾向がある。このことは学校のかばん、机の中の乱雑さ、各教科のまとめ方へと繋がる。要するに頭の中の整理、整頓が出来ない子供は学業成績と密接な比例関係に陥るばかりか対人間関係の整理、

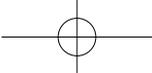


十七、子供部屋は家族の人が一日で一番長い時間いる場所の隣に作れ！

整頓も出来ず社会の一員としての確なる対応性、適応性に欠く可能性が大である。自分の子供が将来一人前に成長して欲しいと願うのなら、余りにも神経質になり口うるさく掃除を頻繁にさせる必要性はないが、最低限度の部屋の整理、整頓を子供にさせなければならぬので、時々部屋の中に入り、部屋の状況がどうなっているのか見るべきである。ただし、親の興味本位で子供の机の引き出し等の中に何かがあるか調べないことだ。親だつて子供だつた時に親に見られたくないものを持っていったように子供だつて親にみられたくないものを持っているかも知れないのだ。特に母親は子供が何を所持しているかを知りたい願望が強い。親は自分が子供だつたときのことをもう一度振り返ることだ。自分だつて学校に行っている間、親が勝手に自分の部屋の机の引き出しを開けたりしなくとも部屋の中に入つたという事実を知つただけで怒つたはずだ。自分の子供を信頼し、男の子だつたら少しぐらいのエロ本を引き出しに入れていても良いではないか。むしろ大人へと成長していることを喜ぶことが大切である。しかしながら、極端に子供の行動、言動、顔色等に変化がある場合は、タバコ、覚せい剤使用、避妊用具の携帯等も考えられるのでその時は、両親が相談し、早急に強制的な対処方法をも含め、子供と直接話をし、解決策を見出すべきである。それだけでなくとも子供が思春期に入ると、一人部屋に閉じこもり、家族の人と会話



をしなくなる傾向が強い。子供と一緒にいられる時期は本当にほんのわずかである。出来る限り、家族の人が子供と顔を合わせ、会話をする機会を多くするためにも子供部屋は家の中で一番長い時間いる人の隣に作る事が理想である。



十八、特に三歳までのしつけをしっかりとしろ！

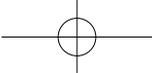
十八、特に三歳までのしつけをしっかりとしろ！
小さいときの甘やかしは子供の人生を破局に導く。

spoilという英単語がある。(子供を)甘やかすという意味である。同時に(物を)腐らす、だめにするという意味もある。要するに子供を甘やかすとその結果は腐れ、だめになってしまう、将来社会にでも通用せず、人間的にも失格になるということだ。例えば小さいときから欲しいものを何でも与えられた子供は駄目になる可能性が高いと同時に欲しい物を何でも子供に与えた親は親としての資格がなく、親自分自身にも欠陥があると言わざるを得ない。親自身もさることながら甘やかされた子供は余計に駄目になってしまう。子供が欲しいものを手に入れるまで、いくら大きな声を出し、泣き叫んでも駄目なものは駄目であり、欲しくとも我慢するという基本を小さい時から教えることが肝心だ。かといってまったく買い与えないことにも問題があるが何事も「程々」が大切だ。その「程々」は時代環境の変化やそれぞれの家庭状況の差異によって異なるのは当然なことであるが、現代



の世の中、子供が欲しいものは何でもかんでも直ぐ買い与える親が実に多くなった。いやそれ以上に祖父、祖母は孫がかわいいという理由から親が反対しているのかかわらず親に内緒で買い与えている場合も多い。このような祖父祖母の行動は自分たちが今のよう
物で溢れかえり、何でも手に入れることの出来る時代に育っていなかったせい
か自分の孫には欲しいものを与えようとする行為は理解出来ないことはないが、長期的に見た場合、
孫にとってマイナスとなり、孫を愚かにし、孫の人生を間違つたものにさせる場合が多い
にある。過去の時代とは比較にならないほど今、人々が必要としている以上の物が生産さ
れ、それに反比例するかのように精神文化は退廃してしまった。社会の秩序が乱れている
原因のひとつはやたらと子供や孫に物を買ひ与え、甘やかした結果である言つても過言で
はない。

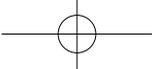
欲しいものを手に入れるということはどれ程厳しい仕事をし、どれ程の報酬を得なければ
ならず、どんなに難しいことであるかを小さいときから説明し、教え、説得させること
が必要だ。もし、子供に理解力がなく、手に入れるまで泣き叫び、わめいたらそのまま泣
かせ続ける。欲しいものは自分の思い通りにならず、我慢し、それに耐え、諦めることが
必要であることを小さいときからしつけることだ。



十八、特に三歳までのしつけをしっかりと！

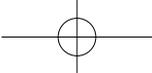
また何でも買い与えるという甘やかしの他に多くの甘やかしがある。学校への送り迎えもわかりである。近年、犯罪事情が変化し昔のように夜一人でも安心して歩くことも出来ず、安全神話はもろくも崩れ去り、日本社会はもはや安全でなくなつたことは事実であるが、単なる甘やかしのための車での学校への送迎はしないことだ。吹雪の日でも嵐の日でも送り迎えはするな。歩くなり自転車なり自分の足で学校へ通わせることだ。朝の忙しい時間の中、子供がいかにもその貴重な時間をやりくりし、最大限の効率よい行動をとるかの判断力の育成や、どんな悪天候のときでも自分の足で歩くと精神的にも体力的にも向上する。そうする事によつて社会人になつても困難に直面したとき、楽な方、楽な方へという解決策や、他人に頼る方法を見出そうとする傾向よりも自力で何らかの方法を見出し解決しようとする強い意志が育成される。従つて、夜遅くとか危険性が予想されるとき以外は子供を送迎するな。

さらにしつけは学校の教師に任せ、自分の子供が何か問題行動をしたら学校に責任を擦り付ける親がいるが、しつけは家庭でやるものだ。学校に任せるな。親の責任だ。しつけは何も大げさに考えることなどまつたくない。日常生活の一環として小さい時からごく自然に当たり前のことを子供が小さいときから教えていけばよいのだ。



小さい時から「おはようございます」「ありがとうございます」「すみませんでした」など基本的な挨拶はもとより、自分から声を出すことを心がけるように教えるべきだ。相手から親切な行為を受けるとき、「ありがとうございます」、間違つた行為をしたとき「すみませんでした」と素直に謝る言葉を直ぐに表現できる子供にするためこれらの基礎を小さいときから教えることだ。このことは少なくとも三歳までには確立すべきことである。

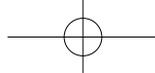
さらに食事の時の箸の持ち方、食べ方、座り方などいずれ社会人としての礼儀作法を身体でもつて小さい時から根気強く習得させることだ。例えば大人になつても場所もわきまえず平気で得意げに鉛筆回しをしている利己的な人間も近年多く見受けられる。鉛筆を回す行為で他人が自分をどう思っているか、他人にどんな不快感を与えているかなどを考えさせることも必要な事である。現在社会において、自分さえ良いと思えばどんな事しても許されるべきであるという考えが世に横行している。勿論個人の人権、権利は守られるべきではあるが、社会の一員として最低限度の規範を守つた上での事である。小さな日本社会だけでなく、世界に通用する人格、品格を兼ね備えた子供に育てるために親は社会人としてのそれぞれの道を自分の子供に小さいときから教える事が必要である。柔道、剣道、空手道等のスポーツも道ばかりでなく、他の文化面の道にもそれぞれの形というものがあ



十八、特に三歳までのしつけをしっかりと！

る。その形に心が付随する事によりその道は生きてくるといふことを小さいときからしっかりと子供に教える事が大切である。さらに、自分の家、他人の家に関わらずドアの閉め方、履物はきちんと揃える、図書館から借りた本の返済、宿題、提出物の期限、人との約束時間厳守、五分前行動など社会生活を営む上に不可欠で基本的なことを小さい時から褒めながら子供に教えることが必要である。

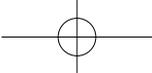
また対話のときは相手の目をきちんと見て話すことも小さいときからしつけることは子供に決して不利益にはならない。特に話をしているとき相手の目から視線をそらすということは、子供を自信のない、消極的な人間に育てる結果になる可能性が高い。人間誰しも後ろめたいこと、隠し事があると物怖じをし、相手の目から逸らして話す傾向がある。子供に自信を持たせ、何事も悪い事が生じると他人のせい、社会のせいにならず清廉潔白な人間に育てるには相手の視線から目をそらさずしっかりと相手の目を見て堂々と自分の意見を論理的に筋道立てて順序良く話すことを教えることだ。社会的に活躍している人のほとんどは相手の目をしっかりと見て理路整然と話し、逆に犯罪者の多くは取調べの時、事件に関連する話になると刑事の目を直視しないでちぐはぐな返答しか出来ないと言われている。



犯罪者の多くは結論がどうなるかなど考えずに一連の流れの論理思考が出来ず、現実
今欲しいものは手っ取り早く、手に入れようとし、窃盗、強盗、さらに殺人までも犯す。

また自分の性的欲求を満たすだけで相手の人権、権利などまったく無視し女性を強姦する。
犯罪者は小さいときに我慢するということ、耐えること、考える事ということが欠如し
てきた人間が多いと言われている。我慢、耐える、考えるということが小さいときにしつ
かりと厳しく親からしつけられ、社会のルールに従わなければならないという基本的道徳
観念が確立されていけばそういった犯罪へ走る人間の増加の抑止力になりうる。

人間は動物の一種であることを忘れてはならない。例えば子犬を家庭で飼う場合、なぜ
事前に家に連れてくる前の一定期間調教が必要かを考えれば明白である。人間社会で犬が
人間と共存するには人間社会の規則に従わなければならないことを犬が学ぶ必要であるか
らだ。その大事な調教、要するにしつけによつて、人間社会の一員としてルールに従った
名犬となるか、人を見れば嘸み付き、欲しいものがあれば何が何であろうと奪い取る狂暴
犬となるかは小犬の時のしつけが決めてであることは誰もが承知である。その狂暴犬とな
らないようにするためには時にはしつけと称し、犬を叩く事も必要であり、同時に良いこ
とをしたときは思い切り褒めることも大切であるということだ。自分の子供を狂暴犬にし



十八、特に三歳までのしつけをしっかりとしろ！

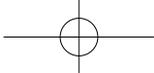
たくなかったら小さい時から親自身がしつけの一環として状況に応じて子供を叩くことも必要であるということだ。これが親としての義務であり責務でもある。

とにかく小さいときから何事にも責任を持たせ、決められた約束事をきちんと守り、自らの身体で持つて習得させることだ。その事が必ず子供が大人になったときに役に立つのだという確信を持ち、子供をしつけることだ。しつけは三歳までにしっかりと教える事である。三歳までに親の手でしっかりとしつけをした方が良い事は誰しもがわかっている。可能な限り自分の子供の将来を考えたら、少なくとも子供が小学校に行くまでは母親は仕事の為に外に出ない方が理想的である。それまでもどこにも預けないで親が養育、教育をする事が望ましい。子供の将来を考えた場合、小学校に入学してからでも、子供が学校から帰ってくる時間には母親は家に居た方が子供の教育には良いに決まっている。しかしながら、現実はそのような甘いことを言っている場合などなく経済的な理由でどうしても親が共働きをしなければならぬために子供を託児所や幼稚園に小さいときから預けなければならぬ状況が生ずる場合がある。幼児のときから他人に預け、小学生になっても学校から子供が帰ってきて家にも誰もない状態にすることは子供の将来に暗い影を残すだけである。子供が学校から疲れて帰ってきて暖かいおやつを出してくれる親もいない、飲み物



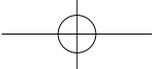
を持つてきてくれる親がいらないということほど程子供が悲しい思いをするだろうか。鍵っ子の子供が学校から帰ってきてきてすることは親が置いていったコンビニから買ってきた冷たいスナック菓子と飲み物を側に置いてテレビゲームをして親が帰ってくるまで一人で時間を潰す事だけである。勿論学校の宿題をする気にもならないのは当然である。小さいときからそのような状況で育つた子供は何らかの形でマイナスな面が生じる確率が高い。子供がそうならないためにも親はもつと長期的な視野に立つて子供の教育を考えるべきである。反面、母親は働きも出ず家に一日中いて子供の教育に力をいれ、しつてもきちんとしてきたつもりでも子供の教育に失敗する可能性はある。子供の成長は一瞬である。子供と一緒にその時期に居られただけでも幸せであると考えた方がいい。もしも、そう親が思うのなら今から直ぐにでも、目先の経済的理由のために働きに出ているのなら、もう一度子供の教育を重要視したほうが良い。子供がもう例え中学生になってしまったので、手遅れだと断念するのではなく、今からでも思った事は即実行した方がしないよりも良いに決まっている。

その際、子供も生まれながらして備わっている能力にしても様々であり、親がしつげようとする事がどうしても理解できない、表現できない、どうしても行動が出来ない場合で



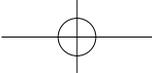
十八、特に三歳までのしつけをしっかりとしろ！

も辛抱強く褒めながら、納得させながら教えることが大切である。親の言うことを聞かない、親が何度教えても出来ない場合でも、即、強制的、強圧的態度に出ることを絶対に慎むことだ。親はいかにして自分の子供が一人前の人間として成長するかは親の教え方、親の力量にかかっている。しつけには根気がある。しつけには辛抱がある。しつけには忍耐がある。そして、しつけには愛情があるのだ。しつけとは子供に根気、辛抱、忍耐をいかにして本気で愛情を添えながら教える事ができるか、と同時に親自身がいかに、どこまで根気、辛抱、忍耐できるかでもある。



十九、パンツの紐論

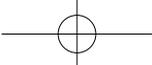
どの家庭の親でも自分の子供は勉強が出来、試験の成績が良いことを願っている。親として当たり前の事である。その結果、親は子供が小さい時から「勉強」、「勉強」と駆り立てる傾向がある。その「勉強」、「勉強」と口うるさく言う親は、往々にして自分が子供の時余り勉強をしなかった親、勉強しても成績が悪かった親と、その逆に勉強し、ずば抜けて成績が良かった親ほど子供に圧力をかけがちである。前者の親は現在の自分の置かれている社会的地位は勉強をしなかった報いとして反省し、自分の子供には一生懸命に勉強してもらい親のような惨めな思いをして欲しくないという改悛の情から、後者は今日の地位は小さい時から、友達と遊ぶことも惜しみ、観たいテレビ番組も観ず、友達のひとつがやっていたテレビゲームもせず、とにかく時間が許す限り勉強をしてきた結果、今の地位を確立しているので自分の子供も同じ地位を維持するためには勉強が優先したほうが子供



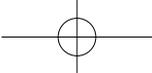
十九、パンツの紐論

の将来にプラスになるのだという強い信念で子供に圧力を掛ける。

その結果、両者の親、特に母親は子供が小さいときから「ぎぎぎ」と「能力」という名のパンツの紐を子供の顔を見るたびに「勉強、勉強」と口うるさく大声を出しながら全力で「これでもかー、これでもかー」と引つ張りすぎる癖がある。生まれつき零れ落ちるほどの豊富な才能と共にこの世に出現した子供ならいざ知らず、ほとんどの子供は平均的能力で生まれてくる。ましてやさほど豊富な量でもない「能力」を保有している子供に対して「勉強、勉強」とオームのごとく「ぎぎぎ」とパンツの紐を引つ張りすぎると元々ある「能力」や「潜在能力」までもはや弾力性のまったくない伸びきったパンツの紐となり何の役にも立たなくしてしまう。あまりにもパンツの紐を引つ張りすぎると子供が興味あるほかの分野を伸ばす潜在能力をも駄目にし、子供の感性を狂わしてしまう結果になる確立が高くなるばかりである。パンツの紐を引つ張りすぎて子供の能力を潰してしまうよりも口うるさく言わず、ある基本的な指針を示し、基盤となるルールを親が設定し、後は子供の自主性に任せ、子供を全面的に信頼することだ。そして、小さい時から極力子供と一緒にいて時間を設け、パンツの紐を最大限に引つ張らないほうが良い。パンツの紐を引つ張る時間があるならば、その時間子供に本を読んで聞かせることだ。パンツの紐を引つ



張り、自分の筋力トレーニングをする時間があるならば小さい時から愛情をたっぷり込めて優しい慈しみのある言葉で子供に語りかける時間を作る事だ。パンツの紐を引つ張りすぎるとなんの役に立たなくなるのは当たり前だ。紐の機能を成さないパンツを穿いてみればどんな感じをするか明らかである。身体的にも精神的にも締まりがなく間抜けな人間になってしまう。パンツの紐の引つ張りより美しいメロデーを伴う程よいリズムに乗った物語を子供に読み聞かせ、子供の感性を引つ張った方が良いのは当たり前だ。パンツの紐を全く引つ張らない事も問題であるが要は、必要時には程よい引張りをし、子供の潜在能力に程よい刺激を与え、眠っている更なる能力の引き出しを図る事も大切である。より重要な事は引つ張り過ぎて、その結果、全く紐の機能を成さなくなるような事態になる事を避けるべきである。



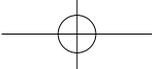
二〇、塾には通わせるな！ 教材は買うな！

二〇、塾には通わせるな！ 教材は買うな！

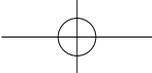
質問は学校の先生にしろ！ 大学からは自分で稼いで行け！

子供の顔を見るたびに「勉強しろ！」「勉強しろ！」と言う親が世の中に多い。親は自分が子供のときのことを考えよ。ほとんどの親は自分が学生の時そんなに勉強をしなかったはずだ。それにほとんどの親は一部を除き何のテストでも平均かそこらでそんなに頑張らなくて成績が優秀ではなかったであろう。親は自分が出来なかったことを子供に期待するな。親がまともに勉強をしなかったくせにして子供には「勉強しろ！」「勉強しろ！」と言うな。もし、自分がそのように「勉強しろ！」と言っている親であつたら、もう一度自分の小さいときはどうだったかを思い出した後子供に何を言うのかを考えろ。

また親が自分の子供の成績を伸ばすために子供の意向も聞かず強制的に塾に通わせようとすることは愚の骨頂である。親の中には自分が子供の時、塾に行けなかったという理由で、毎日、子供を違った塾、月曜は習字、火曜は英語、数学、水曜日はスイミング、木曜



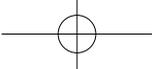
日はピアノ等と週七日間毎日何らかの違った塾に通わせている親もいる。結論は全てがだめになる確率が極めて高い。親として理想なのは塾には頑固として行かせないことだ。もしどうしてもというのなら習字の塾だけにしたほうが親としても聡明である。日本人として書に親しみ、日本語を筆できちんと書く事ができることは将来何をするにしても役に立つ。しかしながら、近年その意向とは逆行するかのように幼児期から習字ではなく英語を習わせようとする親が多い。もし、どうしても英語を学習させたいのなら母国語である日本語をしっかりと勉強させてから、そのあとで外国語としても英語を習わせることだ。日本語もろくろく話せない、理解できない、書けない子供がどうして英語が理解できるのかを考えただけでもこの答は分かりそうなものである。それよりも子供が小さい時から親が日本語で感性豊かな道徳をも含んでいる民話、昔話などを子供に読み聞かせたり、子供に大きな声で日本語を読ませたりしてほうが賢明である。英語のみならず他の科目にしても本人に勉強をやる気さえあれば塾に通わせず学校の勉強だけで十分だ。猫も杓子も塾に通うためにこの狭い日本に多くの塾が乱立している。良識ある人々がこの現状に疑問を持ち、なぜ塾壊滅運動を展開しないのか摩訶不思議である。子供は塾で勉強し、塾の先生に質問をするのではなく、学校で勉強し、学校の教室で、職員室で学校の先生に質問をすること



二〇、塾には通わせるな！ 教材は買うな！

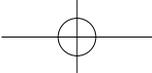
だ。そして先生に問題を出していただき、毎日添削をお願いすることだ。そうすれば塾のような高額な月謝を払う必要もなく全く金がかからないのだ。先生もそのような積極的な質問をする生徒、毎日添削を依頼しに職員室に来る生徒を好み、優遇する。教師だって人間だ。教師はそのような生徒がいると自分の選択した教師という職業を聖職であると確信し、より張り合いと生きがいを感じ、更なる情熱を込め、教える事に熱中するのだ。生徒はもつと教師の生きがいをさらに全うさせるために教師を徹底的に質問攻め、添削攻めにするべきである。

もし、どうしても子供が性格上学校の先生に質問をしに行くことが出来ないのなら、親が自ら子供に教えることだ。親がもう一度勉強し直すことも必要だ。全ての科目の勉強をし、子供に教えろと言っているのではない。せめて親が昔得意教科だった一科目でも子供よりも学力のあるところを見せ付け、親の権威をまざまざと子供の目の前で示せ。さらに、やたらと参考書、問題集を子供に買い与える親が多い。参考書は極力買い与えない。この経済不況の中、出来るだけ金は使わないようにすることだ。ただし、どうしても必要な場合は一冊だけにとすることだ。今も昔も相変わらず一部のあこぎな教材屋の言葉巧みな口車に乗せられあたかもその教材を買うとすぐにでも英語がペラペラと話せるようになるとか、



難解な数学の問題をいとも簡単に解けるようになるとかの詐欺商法に騙され高額な教材、CDを買う親があとを絶たない。結果は何年か後に、ほとんど使用された形跡のない新品同様のそれらの教材がゴミ回収日のゴミ箱の側にうずたかく重ねられ捨てられている光景である。要は子供が勉強をやる気がなかつたら強制的に勉強をさせる必要はないということだ。ただし、勉強の必要性を小さい時から時間をかけて説得、納得させることだ。その際、口うるさく、しつこく言うことだけは避けることだ。それでも、勉強をしなかつたら、自ら進んでやるまで気長に待つことだ。ただじつと待つだけだ。子供の自主性に任せるほかないのだ。

また親の中には何番になつたらとか何番以内に入つたら何々を買ってあげるなどという親がいる。飴とムチは時として必要ではあるが極力この言葉は使わない事だ。ただし、子供が何も要求もせず、成績も伸び悩み、停滞気味の状態でも、常日頃一生懸命勉強しているならば、親は子供が欲しいものを察し、与えることも必要である。テスト成績の結果も確かに大切ではなるが、重要なのは、取り組もうとしている姿勢であり、その過程である。終わりが良ければ全てよしとする考えではなく、子供がいかに真剣に集中し何のために勉強し、どの方向に向かおうとしているかを親は見守るべきである。そこにはまず、子供が



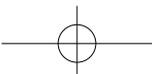
二〇、塾には通わせるな！ 教材は買うな！

勉強しようとする意志を持たせるのが親の手腕だ。親は子供に次のことを教えるべきだ。すなわち、勉強とはやる気、本気、熱気、根気、長期、暗記、歓喜、元気だ。まず本人が勉強のやる気がまったくなければ始まらない。それも半端な気持ちでなく、ある目標を持つて、熱く、根気強く、三日坊主で終わるのではなく、しかも長期に渡って計画を立てていかにして全てを暗記するかだ。一部の文化人、学者と称する者の中には暗記は良くないという者もいるが暗記とは勿論暗記し理解した上での暗記であり物事全てが暗記の範疇に属し学習する過程において極めて重要な要素のうちの一つである。そして、その暗記で得た自分の知識量の上昇に喜びを感じ、更なる歓喜を得るためにさらに勉強、暗記、解釈、勉強をする。勉強はまさにこの繰り返しなのだ。

小さい時からそれらの要素を定着させる為に親は子供をいかに根気よくしつけるかに親の力量がかかっている。

さらに勉強は自分の力でするもので多くの人たちの助けを必要としているが誰をも頼りにしてはいけないことを教えるべきだ。

従って、親は入試に際しても学校から推薦してもらい、一般の学力試験を受けることな
く入学しようとする考えを子供に持たせないことだ。勿論親自ら決してそのような考えを





持つべきではないばかりか最初からコネ、カネを使い裏口から自分の子供を入学させようとしたりする事は断じてしてはいけないことだ。

小さいときからコネを使った人間はどうなるかはわかりきっているが、日本社会の一部には未だにこの理不尽なコネ、カネが通用していることは事実であるのが現実である。しかしながら、自分の子供が本当にかわいいのなら決してそれらを使うべきではない。あくまでも本人のやる気に頼るしかないことを親は十分に知るべきであり、自分の実力以外で行く道は何も無い事を小さいときから親は子供に徹底的に教えるべきである。さらに、大学に行きたいと言いついたら、「高校までは親が学費を払うが、大学からは自分で学費を稼いで行け」と言う親になつて欲しい。それがどうしても出来ない状況のときは卒業後就職をしたら大学でかかった学費を親に返還させることだ。日本の親達の余りにも子供を甘やかしている現状がひ弱な自立心の無い子供を作り上げてしまった。それに加え、塾に依存する親の未熟さが甘えの構造をさらに助長し、塾産業の攻勢をもたらしてきた。この甘やかしの累積が今日の日本社会のいたるところに顕著に現れ、今や日本社会そのものが困難な状況に陥り、崩壊の危機にさらされている。各界、各階層に幅広く、深く、複雑に浸潤した甘えの構造の当然の末路である。正常な日本を確立するには、とにかく子供を塾に



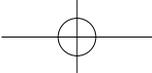
二〇、塾には通わせるな！ 教材は買うな！

は通わせるな！
子供を甘やかすことなかれ、
子供を自立させよ！



二一、踏ん張り体操と座禅の勧め

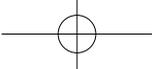
子供に「頑張れ！ がんばれ！」と言うことを控えたほうがよい。ほとんどの子供は毎日、自分の能力に応じて最大限にがんばっているのだ。中学生を例にとつて見ると、学校に行けば各教科別の先生たちから「頑張れ！ がんばれ！」とガンガン言われ、授業が終わり、一息ついてもうすぐに今度は部活で顧問の先生から「頑張れ！ がんばれ！」としごかれ、へとへとになって家に帰ったら、さらに親から「勉強、頑張れ、がんばれ！」と檄が飛ぶ。休む暇も無くがんばっている子供に「頑張れ！ がんばれ！」を言う代わりにこれからは「踏ん張れ！ ふんばれ！」と言つて、少なくとも今維持している状態から後退しないように踏ん張る事を促す事が必要だ。疲れ切つている子供をさらに前に進ませるのではなく、少し休憩してでも後ずさりだけはしないように現状で踏ん張ることを教える事だ。そこで「踏ん張り体操」を小さいときからやらせるのが良い。現代の子供にはこの「踏



二一、踏ん張り体操と座禅の勧め

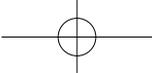
「踏ん張り体操」が必要なのだ。では、その「踏ん張り体操」とは何か？

近年、日本の下水道の完備が進み水洗トイレの設置率の向上で衛生面において著しい進歩が見られることは非常に良いことではあるが、その結果、人々の足腰の顕著な弱体化が見られる。昔のポツチャン式トイレの時は、用を足すとき人々は便器の上で両足をまたぎ、全体重を両足にかけ体形を保つために踏ん張らなければならなかった。踏ん張りという言葉は糞張りから来たのかは定かではないがこの糞張りで昔の人は足腰が強く、身体的だけではなく、精神的にも踏ん張りが利き、強かった。幼少の頃から西洋式のトイレを使用してきたと思われる糞張りの無い愚かな指導者によって引き起こされた太平洋戦争に日本は負けてしまったが敗戦後は糞張りのある一般国民によつての経済の発展へと繋がったといつても過言ではない。それが近年の一般国民への洋式トイレへの変換で用便は著しく楽にはなったが反比例的に足腰の弱さを生み出し、人々は以前の強靱な踏ん張りが無くなり、精神的に極度にもろくなり、多くの分野は衰退し、終局的には人口減少の道を歩んでいる。それを解消し、昔の強さを復活させるために昔のあのポツチャン式トイレを使用した時のポーズを復活させ、子供に踏ん張り体操の一連の運動を毎日欠かさずやらせることだ。先ず、便器をまたぐ姿勢の屈伸運動をし、その後は相撲のしこを踏む動作に移る。し



こは身体全体運動を実にバランス良く考えた方法である。できるだけ足を高く上げ、しこを踏むことだ。さらに、その後相撲の股割りの動作に移行する。そして、終わりに少なくとも五分の座禅の時間を設けることだ。踏ん張り屈伸運動、しこ、股割りと座禅によるこの心技体の精神統一体操は互いに相乗効果を生み出し極めて健康に良い。勿論、親も子供と一緒にやることだ。就寝前家族全員で踏ん張り体操の締めくくりで座禅を組み、瞑想し謙虚に一日の自分を振り返り、見つめることによって明日への活力につなげるのだ。

とりあえず今の時点を踏ん張れ。そして、余力が出来たら一段上の段位に進んで、また踏ん張れ！そして、又一段、一段と踏ん張って前に進め。数センチでもいい、前だ。前に進むのだ。この「踏ん張り体操」を日課とすれば、子供だけでなく家族全員身体が丈夫になり、明るい家族を形成し、全ての面が良くなることは間違いない。「踏ん張れ！ふんばれ！」

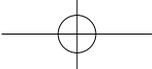


二二、子供の部活に子供以上に親が熱心になる傾向がある。

二二、子供の部活に子供以上に親が熱心になる傾向がある。
親は部活に首を突っ込みすぎるな！

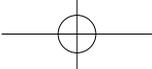
自分の子供がスポーツに関して優れた素質があり、数々の大会で優勝し、将来オリンピックに出場するのではないかと太鼓判を押されているとしても親は子供の進路を良く考える必要がある。

県レベル、全国レベル、世界的レベルで考え、本当にその可能性があるのかどうか見極めることだ。狭い地区で優秀な選手は全世界でたくさんいる。過去の例を見てもわかるように将来プロでの活躍が期待された多くの選手はいつの間にかマスコミからも巷の話題からも消滅してきた。実力からしてもプロになるはず抜けた素質もあるならば文武両道が理想ではあるがどうしても学業に興味を示さなければ勉強は二の次にし、徹底的にその運動に専念し、果敢にプロになるために挑戦させることが大切だ。極端に言えば勉強する時間



があるならばプロになる特訓を毎日させることだ。ただし、子供よりも親のほうがその可能性を信じ、子供の圧力をかけすぎ、潰してしまうこともあるので注意することだ。

プロになりそれで飯が食べられる者はほんの一握りの人たちだけであり、そこまで到達する道のりは厳しくほとんどはプロになれず途中で断念せざるを得ないことを認識させることも必要である。プロになる素質が無いとわかったら部活とは勝つことよりも体力作り、仲間との連帯を深めることであると早い段階で位置づけ子供に思い切り青春を謳歌させたほうがいい。確かに部活を通し、部員間との信頼関係、先輩、後輩、監督、コーチとの服従関係や絆は将来、社会生活を送るために貴重な糧になることは間違いない事実である。中学、高校の一時期部活に熱中し、集中し、有り余る若さというエネルギーを仲間と共に燃焼することは大切である。その点において、個人競技よりも団体競技に所属することは自分だけでなく全体を考え、人間関係の基礎を築く意味においても勉強になる。しかし、特に運動部の場合には余りにも熱中しすぎ、勉強がおろそかになる傾向が高い。上位を狙う部活の多くは学校の部活が終わったら、家族の送迎の車中でおにぎりをむさぼり、休む暇もなく夜連、すなわち夜の練習に向かう日々明け暮れている。さらに、大きな大会の前には強豪チームとの遠征試合で県内ばかりでなく他府県へと方々に飛び回っているのが実

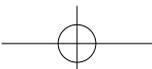


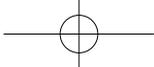
二二、子供の部活に子供以上に親が熱心になる傾向がある。

情だ。勉強に費やす時間などまったくといって良いほどないのだ。そんなに一生懸命部活に情熱を傾けても将来その道で生計を立てていくのであるならば問題はないが、ほとんどの者はその部活とは関連がない仕事に就く。従って、部活も大切であるがそれよりも自分の将来の仕事について真剣に考え、勉強に集中したほうが賢く、利口であることを早い時期に説得させることだ。

また時として、親が子供以上に部活にのめり込み、大会やその後の保護者の飲み会に随時顔を出し、遠征試合のときは家族旅行気分に応援し全員で楽しむことはある意味においてよいことではあるが、子供の部活に余り親が顔を出すことには本来の学校の部活の趣旨から見れば問題点があると言わざるを得ない。親や自分が出来なかつたことを子供に託すことには理解をするが昔の親が部活に関し保護者会などというものを結成していなかつた時代に戻すべきだ。あくまでも子供の部活は学校教育の一環であつて、親がいちいち首を突つ込むものでない。優勝すればそれに越したことはないが、勝つことだけを至上目的にしているのではないということを子供ばかりでなく、監督、親も熟知すべきである。

ましてや、現代のプロスポーツは将来有望株と見なされた選手個人の周囲には、学校、企業やさまざまな団体からの誘惑の手が絡み合っている状態である。そこには金銭という





土台の上に、中学への越境入学、高校、大学への推薦入学、国体開催県の優勝、政治屋の関与が噂される施設建設にまつわる疑惑が強力な接着剤で結び付けられている。本来のスポーツの趣旨から著しく逸脱した行為が平然として行われているのは無知なる多くの国民だけだ。親はもつとそれらのからくり、事実の究明に目を見けるべきだ。

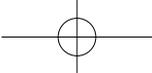
親は自分の子供が運動で飯を食べていけないことを悟った時点でそのからくりの一環として利用されないためにも部活はほどほどにし、勉強をさせたほうが賢明である。親は部活に首を突っ込みすぎるな！それを決定するのは勿論、親が子供を小さい時からどう家庭で教育するかにかかっている。



二三、担任人質論

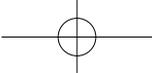
人間誰しも理屈ぬきで食べ物にも好き嫌いがあるように何事にも好き嫌いがある。勿論、学校の教師、特に担任に対しても好みがあるのは当然のことだ。このことは生徒、保護者側にあるように教師側にもある。要するに親が「あの担任の顔を見るのもいやだ」と言うのと同様に教師側にも口にくそ出さないが「あの生徒の顔と、あの生徒の親の顔を見るのもいやだ」と心の中で言う教師もいるということだ。

ここで言う好き嫌いという言葉は相性という言葉で置き換えることも出来る。どの社会にも相性の合う人間と相性の合わない人間がいる。世間では「どうも担任と相性が合わない」「今度の新しい担任とはどうしても相性が合いそうもない」という会話をよく耳にする。しかし、担任と相性が合わないからといって学校に顔も出さないということは是が非でも避けたほうがいい。



人間誰しも心の内部で思っている事を顔に表面化する傾向がある。自分の子供のことを考え絶対に子供に不利益になるような言動、行動を担任に対してすることを慎むことだ。子供が学校にいる時間を考えてみてわかるように子供は学校で教師と接触している時間が多い。

どうしても相性が合わないときでも極限まで我慢するほうが無難である。それでも我慢が出来ない時は、経済的に余裕があれば学校を変えらるることだ。何もその学校にこだわることとは無い。孟母三遷ではないが子供の教育のためには他の場所に移動することだ。しかし、多くの場合はそれが出来ないのが現状だ。その場合はその忍耐の限界に達したとしても最終的にはただじつと時間が経過するのを待つことである。それでの駄目だったら相性の悪い担任と遭遇したのは運命の出会いであるとして諦めることだ。その氷河期間をじつと我慢し、耐えるだけだ。どこの社会にも相性の合わない人はいるものであると自分に言い聞かせることだ。じつと、待つのだ。ほとんどの場合担任は長くとも三年たてば変わる。長い人生の三年など、否定的な行動を起こし、担任と気まずい思いをし、自分の子供に不利益が及ぶ結果となることが予想されることを考えればたいしたことない。じつと我慢するのだ。



二三、担任人質論

映画の人質事件ではないが警察が犯人を逮捕するとき、犯人が人質に対して何をするか予想が出来ないので決して犯人を刺激するような言動、行動をしないことが鉄則である。

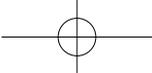
これは自分の子供と担任教師との関係と同じである。自分の子供は人質として、学校、とりわけ担任に捕らわれの身であり、担任の言うことをじっと我慢をして聞くことが大切である。保護者は自分の担任を選ぶ権利がない。教師も人間である以上生徒や保護者との相性があるという教師の立場に立って、自分の側にも何か担任が気に障ることがあるのではと考え直す余裕も必要ではないだろうか。常に自分が正しいと断言するのではなく、もっと広い視野に立った前向きな肯定的思考で対処するべきだ。

確かに高度な見識と幅広い常識が要求される教師の中には利己的で主観をあらわに出し公正、公平な判断が出来ず、ある特定の生徒の自分に対する接し方やテスト成績、友人関係、病歴、家族構成、親の職業、離婚の有無、国籍条項、その他の特記事項等に関する項目が載っている生徒個人に関わる情報から判断し、偏見を持ち、生徒の客観的かつ冷静な評定が出来ず、極端に低く書類に記載する教師もいる。さらにこの書類をチェックした段階で、その公平でない虚偽記載を容認した学年主任、教頭、校長の見識が疑われる行為や高校入試の内申書に「この生徒を落としくください。この生徒だけは絶対に貴高校に入学さ



せないでください」と書いた担任も昔存在したことも事実である。一度記載された書類は一生、生徒ばかりでなく保護者の人生をも左右する。しかし、現在そのような教師に出会う可能性は極めて少ない。ほとんど百パーセント近い教師は自分の生徒が一番かわいいと思いい、生徒のあらゆる観点の良いところを見つけようとし、さらにそれらを伸ばそうとしている。その為スポーツや文化面での入賞結果だけでなく、各種検定の合格やボランティア活動の記載なども多岐に渡り記録しており、各生徒の評定の際は可能な限りよく書いているのだ。

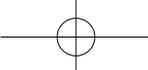
相性が合わないからその教師から逃避するのではなく、むしろ頻繁に顔を出し、極力協力する意思を示し、決して相性があわないかといって否定的な態度を取らないことだ。運悪く相性の悪い教師と遭遇した場合は出来る限りその教師の良いところを見つけ出し、自分から合わせていく心構えが必要である。自分の子供のためなら、少々相性が悪くとも我慢し、耐えることを親は学ぶべきである。親は自分の子供が担任に人質に取られているという観念を捨て、担任は自分の子供を周囲の脅威から常に保護し、守っており、子供の能力を伸ばそうとしているという考えを持つべきである。



二四、家庭内でしょっちゅう笑え！ そして、歌え！

二四、家庭内でしょっちゅう笑え！ そして、歌え！

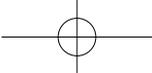
子供が思春期に入ると親の言うことをほとんど聞かなくなるのは当然のことである。親も自分が子供であった時そうであったように朝から晩までいちいち親が口出しをするのを嫌うのは当たり前のことだ。子供が親の言うことを無視し、反発、反論する。その度に、「反抗期だから」と世の親は言うが、決して自分の子どもには「反抗期」という否定的な言葉を使わないほうが良い。むしろ、自分の子供は「成長期」に入ったという言葉を使ったほうが良い。子供はみんなある時期になると自分の考えと反する社会に、大人に、親に反論、反発する傾向がある。むしろ喜ばしいことである。この大人への移行過程がないと人間としての健全な成長を妨げる。親はもつとおおらかな気持ちで子供と接した方が良い。親は自分が反抗期、成長期であった時のことをもう一度思い出し、そのとき親に自分の意見、考えと違ったことを言われた時のいやだった思いを子供にさせない意味においても決して



子供が嫌気をさす言葉を使わないことだ。子供の反抗期はそんな長くは継続しない。あつという間に終わってしまう。じつと見守ってやるのが大切だ。子供は社会の一員になる階段を一段一段と上るたびに社会を批判、正当性の論理を学びながら階段を上っていくのだ。

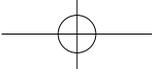
親子間で会話がなくなる時期に入り、子供に何を聞いても「別に！」しか返ってこなくなるこの時こそ、家庭の中を明るくするために絶えず歌声、笑い声が聞こえる家庭に作り上げることが大切なのだ。

人間は笑うとエフェドリンという神経伝達物質が脳内から出、痛みの作用を軽減、リラックさせ免疫力を高め精神的にも、身体的にも良いことが実証されている。常日頃家族が思いつき笑い笑う雰囲気を作ることに心がけることが大切である。笑いの多い家庭から子供が非行に走る可能性は極端に低くなり、子供はおおらかに成長するのは当たり前だ。そのためにも勿論、時と場合によるが小さいときから駄洒落、親父ギャグを連発し、子供にラジコで漫才、落語等の笑いを誘うものに親しませることが大切である。また思いつきり全身で歌うことも大事である。特に、文部省唱歌で代表される四季折々の歌を季節の変遷に応じて日頃家族全員が口ずさむことは子供の感性をより磨くことにも繋がることと考える。



二四、家庭内でしょっちゅう笑え！ そして、歌え！

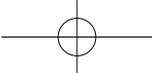
小さいときから家族全員が会話と笑いが絶えない家庭からは非行は生まれない。笑いのある家庭から醜い争いの心は生まれえない。世界の歴史は笑いのない憎しみ、妬みの心から悲劇が生まれた事を証明している。人間は悲劇ではなく喜劇を選択し、たった一度の人生を笑いで大いに楽しんだ方がよいのが理想である事は言うまでもない。



二五、立て！ 親自身身体を鍛えろ！

子供が小学校、中学校に入ると父親は中年になり、若いころある程度は筋肉質で身体が縮まり、がつしりとした体型も中年太りし、全体がぶよぶよ、ふにやふにやな状態になってくる。そして、身体も若い時のように動かさず、俊敏性も下降線を辿り、動作も極端に鈍くなってくる。このような歳になると、元の健全な体型に戻そうとする気概も気力も無くなり、休日ともなると家でごろごろし、テレビで囲碁か将棋番組を観るかパチンコ屋に通いつめるようになり家族の中で厄介者になる傾向が高い。

毎週末、子供が父親のそのような状態を見ていると、そのうち父親の権威、威厳などを完全に見放し、意に閑しなくなる。やがて、父親が子供に何を言っても上の空でしか聞かなくなる。父親は父親で自分よりも体力的に勝ってきている子供をやたらと怒れなくなる。子供に注意するときは体力と自分の常日頃の行動がものをいう。

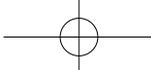


二五、立て！ 親自身身体を鍛えろ！

父親は子供に意見を言うのなら自分自身、身体を鍛え、自分の言動、行動に責任を持つて自ら律すべきである。父親がいくら口ばかり達者で生活形態が伴わないものであるのなら子供は親の言うことを聞かないのは当然だ。ぶよぶよ、ふにやふにやな父親が偉そうなことを言っても子供はシカとするだけだ。パチンコするなら子供とガチンコ勝負するために身体を鍛えろ！

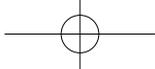
親は自分の行動を振り返り、反省すべき点は自ら襟を正す必要があり、改善すべき点は直していかねばならない。子供は親の背中を見て育つ。休みになるとパチンコ、ゴルフで仕事の帰りにはほとんど毎日酒を飲んで遅く帰宅する父親の姿を見て子供は健全に育つだろうか？ 強い父親像を子供の前でしっかりと見せ付けるためにまず親自身の日常の行動を見直すことだ。そして、精神もさることながら、身体も鍛え直すことだ。ナルシストになることはないが親父の筋骨隆々たる姿を子供にちらつかせ、「家族にもしものことが起こった場合にはこの親父が家族全員を守るのだ」という力のある筋肉質の体型を示すと同時に、子供との意見の相違からの腕力による対決の際は「お前にはいくら歳をとつても体力的にも気力も絶対に負けない」というところを見せ付けておくことも必要だ。

さらに小さい時から子供に、いくら勉強が良く出来、成績が上位であっても身体を悪く



すればもともこもなくなくなるのだ。健康が第一条件だ。身体が弱々しく、いつ病気になるって朽ちるかも知れない状態では前途洋々たる未来はない。健康で元気が一番大切であることを教える事だ。

そのためには時間が許す限り子供と一緒にあって親自身が運動をし、汗を流すことだ。世の父親よ立て！ 社会を安定した状態に維持していくには父親が立たなくなったら終わりだ。立て！ 世の父親たちよ！ 親父の体型ばかりでなくふにやふになつてしまつたこの日本を立て直すために、立て！ ましてや、家庭の全ての権力を妻にがっしりと握られ父親の権威、威厳など何も無くなつた現状であるからこそ立つのだ！ 今こそ、シカとする子供に対して、更年期の予兆が見え始め予期せぬ体調不良で悩まされながらもいつもガミガミ言い続け、こと子供の教育となると俄然熱を帯び父親の意見など全く無視する妻に対して、今こそ立つのだ！ 何の口出しも出来ない悲劇の父親にさよならを言い、従来の父親に課せられた責務を奪還するために世の父親たちよ、闘争せよ！ そして、立て！ 理論的でも、教養的でも、体力でも絶対に親父には勝てないところを子供に、そして妻にまざまざと見せつけよ！ ……といくら叫んでみたところでも正直難しいだろうな？ と弱音を吐く前に親父は自分自身身体を鍛えろ！ ついでも精神をも鍛え直せ。結



二五、立て！ 親自身身体を鍛えろ！

婚する前のあの威厳のある態度をどこに置き忘れてきたのか！ 結婚した直後から女房の尻に敷かれっぱなしの世の中の親父よ！ 以前のあの男らしいすがすがしい言葉はどこに行ってしまったのか？ それらを見つける事が出来なかつたのならもう一度あの当時の状態に自分を戻すために捜しにいってこい！ そして、今こそ、立つときだ！

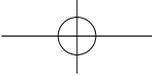


二六、怪我の薦め

親は絶えず子供が小さい時から安全には十分に気をつけることは当たり前であるが、過保護、甘やかしすぎによって子供が何一つ怪我をしないで大人になることはその子供の人生のためにはならない。勿論わざと怪我をさせる必要性はまったくないが生涯において、機能不能、不全とか、後遺症が残らない少々の打ち身、切り傷などを子供が小さいときに体験させたほうが全くさせないより良い。

子供の人生をたくましく有意義なものにするために小さい時に、多少の危険がともなう行動をさせ、失敗し、自らその時の痛みを知り我慢させ、そして、それを克服する一連の経験をさせることも必要である。

親は絶えず予測できない不慮の事故から子供を守るために常に集中し子供から目を離さないことは当然であるが、例えばちよつと子供が転んだだけでも直ぐに手を差し伸べ、抱



二六、怪我の薦め

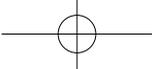
き起こす親がいるがその様な場合は、しばらく子供がどのような様子になるかを手を貸さず自分でどう対処するかの課程を見守る事も大切である。

勿論事の重大さにもよるが、転んで泣きわめいても手を貸すな。じつと、我慢し、耐えることを教えるために泣くのを止め自分の力で立ち上がるまで見守ることだ。

少々血を流したとしても、手を貸すな！ 直ぐに手を差し延べることはかえって子供をひ弱にしてしまう。子供が怪我をし、痛みを感じたのなら、この次は激しい痛みを伴うその怪我から回避するにはどうすればよいのか、今後どのような防護策を講じることが自ら学ぶ。近年、子供が万が一ナイフで指を切るのではないかと心配し、昔ながらのナイフでの鉛筆削りをさせない親がいる。勿論、銃刀法に引つかからない6センチ以下のナイフを使用すべきであるのは当然である。鉛筆はナイフで削るものだ。昔行なっていたように鉛筆を自分で削らせ、時には間違つて指を切つても良いではないか。そうすればこの次からはどのようにしたら指を切らないようにして削るかを学ぶはずだ。また山に連れて行つたときは木に登らせ、そこから落ちて、少々怪我をしても良いではないか。そこで、その木の枝の状態から判断し、どれだけの強度に耐えうるかができるか、上るとき力の加減、木から落ちたとき、どのようにして頭を保護する防御姿勢をとり最小限の怪我に留め



るかなどを学んでいくのだ。自転車の乗り方を練習し始めたときにしてもそうだ。転んで膝小僧を擦りむくことから子供は上達する方法を学んでいくのだ。子供は小さい時にある程度の怪我をしたほうが完全防護の無菌室の中で何の怪我やばい菌からも遮断されて育つたより社会に出たときにたくましく臨機応変に物事に対処することが出来る可能性が高い。従って、重大事故に直結するような状況でない限り子供には少々の怪我をさせたほうが良い。子供は怪我をし、そこから次の段階に進んでいく。自ら怪我をする事によってどれほどの痛みをとまうか、それらの怪我がもし、相手が生じた場合はどれほどの痛みを相手を感じるかを自ら学ぶ事が出来る。ましてや、最近のまったく痛みを伴わないバーチャルでの殺傷ゲームの人気で簡単に相手を殺してしまう感覚を少しでも是正するために自ら痛みを体験する事は非常に有意義のある事である。自ら怪我をする事によって相手の身になって考える事を学ぶ事が出来る。従って子供の時に少々の怪我をした方が相手に対する思いやりの精神が強くなる。

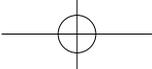


二七、着せ替え人形論

特に母親が注意することは赤ん坊のときから親の好みで子供に着せ替え人形みたいに服とか装飾品を頻繁に子供に買い与え着飾りさせ、親自身が満足しないことだ

そのようにして子供を育てると成長するにつれ子供は物質欲に強く、流行に弱く、流れやすい人間に育ち、周囲の目線を絶えず気にし、見栄えを張り、欲しいものが目に入ると現在自分の置かれている経済状態に盲目になり、周囲の事など何も関係なく次から次へと手にいれようとする人間になる可能性が高い。さらにこのような衝動的人間は新聞、テレビ等のコマーシャルの宣伝に弱く、実体のない詐欺的投資やうさん臭い儲け話などに惑わされやすく、直ぐに飛びつき、大損をするか直ぐに何事にも飽きる傾向がある。

さらに何とかダイエットとか、何々は身体によいなどという番組など何に対しても単純に洗脳されやすい。一般的にテレビコマーシャルは盛んに視聴者の購買心を煽り、まさに



詐欺商法そのものの美辞麗句を並べ視聴者を洗脳するため事前にテレビ局、スポンサー等関係機関と綿密に打ち合わされている。そのからくり、やらせの裏事情を見破り、いとも簡単にそれらの詐欺商法に引つかからないという確固たる信念を持ち、子供にも簡単にその仕掛けや罠に陥らないように教育することが大切である。

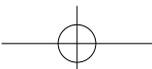
さらにそのように着せ替え人形理論に弱い人はカルト宗教や何の理論的根拠も無い血液型運勢や、その他の詐欺商品による占い等に直ぐに反応を示し様々な影響を受け騙されやすい傾向がある。小さい時から何事にも直ぐ飛びつかず、子供に必要な無いものは購入せず無意味であることを説くことだ。やたらと物を買いはせず、質素、儉約の尊さを教えるべきである。人間はいずれ全て確実に死ぬ。そのとき、世界中のどの国においても形こそ違いがあれおよその長さ1メートル80から95、幅53から55、高さ42センチ前後の棺に納められ人生の終焉を迎える。もはや自らの呼吸による空気の移動もないその棺の中で自分の身体の体積を除いた残りの空間にどれほどの物質と共にあの世に旅たつことが出来ようか。例えば、生前どんなに金持ちであった人でも蓄えた莫大な現金を棺の中に入れて欲しいと遺言状に書き残し、その遺言どおりに現金を棺の中に入れてもらつたとしても限度がある。どんなに高価な衣装や装飾品を身にまといても永遠の旅に出ようとしてもその量には限

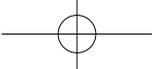


二七、着せ替え人形論

りがある。いずれ、棺の中身全てが火葬、土葬、水葬などにされ無に帰す。人間が必要以外のものを手にし、一時の自己満足に陥ることはいかに無駄であり、虚無感が伴うものであるのかを悟る事である。自分が何を着ようが、何を身につけていようが他人はちつとも何も気にしていないにもかかわらず、人は絶えず他人の目を気にし、必要以上の衣装や装飾品で自分の身を包み、自分の子供にまで着せかえ人形のようにして飾ることの虚しさを自ら知るべきである。企業の意図する本来の目的、すなわち儲け主義第一の虚像物質文化の中でいかにして各企業が判断力に欠けた消費者に次から次へと必要以上の衣服や装飾品を買い変えさせようとし、物を欲しがるようにしているかのからくりを親は子供が小さいときから教えることだ。同時にそれら半ば詐欺商法の罨やマスコミを抱き込んだ偽善的なやらせ文化にまんまと引つかからず、いらぬ物を欲しがらないとする教育を子供の時から教えることが大事だ。

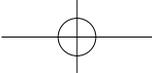
そのような装飾品で自分の身を飾る母親を子供が小さい時から見ているとその子供も母親と同じ道を歩む可能性が高い。親の無意味な見栄は子供を学業とは程遠い中身の空虚な人間にするばかりかあらゆる分野において物事の本題を忘れ必要のない細々とした部分に目が届き、全く駄目な中身の無い人間にしてしまう可能性が高い。





もし、自分の子供がそのような人間になって欲しくないのなら自らそれを反省し、多くの詐欺商法に引つかからず衝動買いを即座に止めるべきだ。親自身がブランド志向に走ることなく、冷静に裏事情を把握する事だ。例えばヨーロッパのある国のブランドと言われているカバンが日本で五〇万から一〇〇万で販売されているがその原価がなんと五〇〇円であるということからして、それを買いたい求め、若しくは誰かから貢いで貰い肩にかけて見栄を張り意気揚々と歩いている哀れな日本人が多く存在しているという事実である。カバンに限らず多くの商品を何かの呪縛にかかった夢遊病者ようにして買いたい求める日本人に対し後ろ指を差しながら嘲笑し、ぼろ儲けをしている外国人の存在を考えるべきである。空虚な物質的見栄の衣で身を包むよりも自ら他の強靱な精神的見栄を完成させ、心を豊かにする方法を選んだほうが得策である。子供は親の背を見て育つ。外側だけの頻繁な着せ替えは実に哀れである。その場の状況に応じた相手の礼儀作法に従った外側の様相は勿論必要であるが、必要以上の装飾は不必要である。それよりもより必要としているものは何なのか。親であるならば自分の子供にその真意を語って教えるべきである。

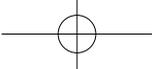




二八、家庭教育のするめ

二八、家庭教育のするめ

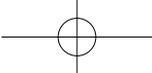
近頃の美男美女の条件として角ばりのない顎で、のっぺりとしたスロープ型の小顔がもてはやされる風潮がある。また顎が頑強に張っている顔を出来る限り小さく見せる化粧品まで販売され、さらに力強く発達した顎を小さくする、または小さく見えるようにするという眉唾物詐欺師的顔面マツサージ師までも登場する始末である。その流行に伴い食品売り場には柔らかい素材で作られた食べものが多く並べられ、人々は以前と比べ歯ごたえのある硬い食料品を好まず、親も赤ん坊の時から子供に出来る限り硬い食べ物を与えないようにしている傾向がある。硬いものを食べないということは噛み砕くために咀嚼運動の活性化に繋がらず、その結果、顎の発育に多大な影響を与え形の良いがつしりとした力強い顎が形成されなくなってしまう。またその顎の発達は頭蓋骨全体の発育とその中に収納されている脳を初めとする他の器官の成長、発達、働きに重大な影響を与えることとなる。



昔から「歯を食いしばれ!」「奥歯を噛み締める!」と言われているように、歯を硬くかみ締めると脳の活動が活発化し、体全体に活力がみなぎり、さらに精神力も集中してくる効果を及ぼしてくるのだ。

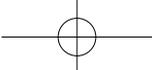
顎が十分に発達せず、関連する機能衰退が子供たちの学力ばかりか忍耐力の極端な減少に密接な関係があるように思われる。硬い食材のものより柔らかい食べ物を好み、顎が発達していない人間は困難に直面すると直ぐ挫折するか、断念するか、逃避するか、若しくは楽な方楽な方へと進む傾向が強いように思われる。そのように顎が発達していないということは人間の脳細胞発達機能の低下を意味し、集中力、知識吸収力、学力等の衰退へと移行し、同時に体力、労働力の衰退へと進む。その結果、国家、世界、人類衰退、そして、終局的には人類消滅へとビシヤスサークルに入り込み、地球の滅亡に繋がっていくという飛躍した推論にまで達する。

この悲哀的結末を阻止するためにはひとつの秘策がある。それは全世界の人々が自分の子供たちに日本産の「するめ」を小さい時から食べさせることだ。それも手間隙を掛けて天然干しにされた何の添加物も使用されていない日本産のするめを食べさせることだ。ただし、その際、外国産であるにもかかわらず日本産と偽って販売している悪徳国内業



二八、家庭教育のするめ

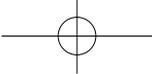
者のするめや、日本産ではあるが最大限の利益を上げるためと長期保存をするため法的基準すれすれまでの添加物をふんだんにまぶして作った偽善生産業者のするめを除外する事である。本当に味の良いするめだけを消費者に食べて欲しいとの願いで儲けを二の次にして作った良心的な業者のするめかを選択する事だ。善良な漁師さんの捕った新鮮なイカを良識ある加工業者が自然環境の完全に整った条件の下で時間をかけ天然干した愛情と豊富な栄養要素をたっぷり含んだするめを噛んで、噛んで、噛み続けて欲しいのだ。このするめを子供が小さい時から食べさせることで人類の滅亡を完全に防ぐと言っても大げさなことではない。時間をかけ丹念にするめを噛むことによつて大脳を刺激し、脳の活動を活性化させ、全ての能力をアップさせることだ。奥歯でしっかりと何度も噛み続けることで顎が強くなり、しっかりとした角ばりのある顎を形作り、必然的に脳をより刺激し、知的教養ばかりでなく、問題点を程よく噛み砕き、咀嚼しながらその解決法を見出していく。するめを何度も何度も噛み、じつと我慢し、怒りや悔しさを奥歯でさらに噛み締め、忍耐強く、踏ん張る力を増大させるのだ。さらに、するめを噛むことを重ねていくに従い微妙に味が変化する瞬間がある。その味を楽しみながら噛み締め続け、さらに噛めば噛むほどその味が微妙にまた違った味に変化していく。その変遷していくするめの味の過程は人間の



歩む道にもあてはまる。人間が日々直面する出来事やそれに対処する自分自身の姿を何度もするめを噛むのと同じように咀嚼運動を重ねる事によって自身の人間形成の糧となり以前よりさらに味のある人間に発展していくことにもなりうるであろう。

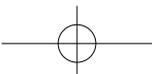
顎が発達している人が力の限り奥歯でするめを噛んでいる姿と口を半開きにした角ばりのない顎の人が上下の奥歯が接触したかしないかぐらいのところでするめを強く噛めないでいる姿を比較したら一目同然である。口をあけている人間は何事にも焦点の合わない目をし、その状態が顔面だけでなく身体全体にも波及し、しまりがなく、物事に集中出来ない。それとは逆に、強健な顎を持つ奥歯でしっかりとするめを噛んでいる人間の表情の答えは明白である。するめを噛むということは単なる顎や能力の発達ばかりなく、人間としての生活姿勢、態度、思考能力等全てに大きな影響を与えるのだ。

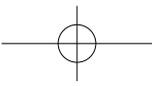
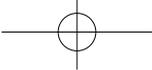
親はこのような視点に立ち、なぜするめを噛むことが大切なのかを徹底的に教え、小さい時から子供に頻繁にするめを噛ませる事だ。家庭教育の一環としてこのするめ運動を世界各国で推進させ子供の身体的、精神的体質改善を行い、迫り来る人類の滅亡を阻止しなければならぬのだ。今後人類は生き延びることが出来るかどうかはこの家庭でのするめ教育にかかっている。するめはそれほど重大なものなのだ。「うちに子供を顎の張つてい

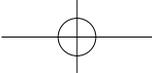


二八、家庭教育のするめ

ない小さな顔の美男女に育てるためにそんな硬いするめを囁むことだけはするめ」などとするめーから駄洒落を言っている時間がないのだ。人類の危機はそこまで来ている。先ずは品質のよいするめを囁んでみる事だ。するめの消費量の増大は脳ミソの発達、学力向上と正比例すると断言しても良い。人生は幼児期からするめをどれほど頻繁に囁んだか否かでその価値が決定される。親は自分の子供の成績が向上して欲しいと願うなら家庭内で子供に時折するめを食べさせてその結果を見てはいかげすうか。親は自分の子供がいずれ社会に出て、常識的なあたり前のことを当たり前のように出来るようになって欲しいのなら先ずするめを食べさせる事だ。そして、親自身も極度に衰え、消滅し始めた脳細胞活性化、ボケ防止のために絶えずするめを囁む事を忘れてはならない。家庭教育はするめで始まり、その後の人生もいかに頻繁にするめをかんでいくかで決定される。「家庭教育のするめ」はまさにするめが全ての原点なのだ。





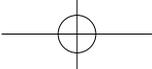


終わりに

以上述べてきた点を親は子供が小さいときから実践してみてはいかがだろうか。

勿論、この「家庭教育のするめ」を親の主観やその場の雰囲気や感情で強制的に子供を頭越しに押さえつけ実行することは禁物である。個々の子供は生まれながらにして全てが異なっている以上、それぞれが持ち合わせている情感、能力等に応じた臨機応変の対応策で対処することが大切であることは言うまでもない。

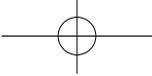
忍耐強く、長期的な視野に立ち、ある時は至近距離から、ある時は遙か後方から絶えず暖かい心で子供を信頼し、見守ることが重要なのだ。例えば親の意図する思惑に子供が即座に納得、反応せず、逆に親に反発したとしても、すぐに感情的になり腕力で押さつける行動を取ることを親は慎むべきである。子供が何らかの事由で親から殴られた時、その親の殴り方が愛情を伴うものであったか、愛情が伴わず憎しみの殴り方であったかを子供は忘



れることなく生涯記憶に留めている。例えば自分の子供が反社会的な行動をし、他人に、若しくは社会に多大な損失を与えたとしても自分の子供であるという事実から逃避することが出来ず、親の責任として子供を守護し、強く抱きしめなければならぬのだ。

親は子供が少なくとも十八歳になるまで親の責務として育てなければならぬ。その間に

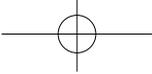
あくまでも理想ではあるがここで記したことを少しでも実践してはいかがだろうか。世界の国々の多くの家庭が大なり小なり何らかの問題を抱え、日々それらと葛藤し、悩み、問題を解決しようと努力しながら生活しているのが実情である。しかし、どうしても親が思うようにいかず全てが満足する解決が出来ない場合は子供と間を置き、干渉せずに遠くから以前と変わらない愛情で見守ることだ。子供は親からの愛情をたっぷり受けて育てられたことを決して忘れない。とにかく親は可能な限り、時間が許す限り子供に小さい時から愛情を降り注ぎ続けることを忘れないことだ。親はいつまでも口うるさく言わず子供が自立するのを後ろから見守って支え、後は子ども自身に自ら社会で生きていくにはどうすればよいのか考えさせればよいことだ。同時に親自身が自分の身の丈を知り、子供に対しても子供の身の丈に応じた対応をし、けっして身の丈以上のことを期待することも、期待



終わりに

をかけてもならないことを肝に銘じ、少なくとも高校を卒業するまでは可能な限り支援し育てていくことだ。親はその見返りとして自分たちが子供をここまで育てたのだから、老後は子供たちが親の面倒見るのが当たり前であるとはけっして思ってはいけないばかりか言ってもいけない。時代は常に移行し、変化しているのだ。昔の考えで子供が親の老後の面倒を見なければ成らないとする考えは捨てたほうが良い。親は老後も自立し、子供に頼らないことだ。親は最後まで子供の負担が限りなくゼロに近いようにすることが大切なのだ。親はどんなに歳をとつても子供の足かせとなつてはいけない。

親として、この混沌とした世の中で生き延びるために子供に必要な道筋を作つてやることが親としての責任、責務であり、その後はいかにして子供の将来の妨げにならないようにするかが親としての義務だ。その責任、義務を最後まで持ち続け、いかにして子供に面倒、迷惑をかけずに死んでいくかである。「老いては子に従え」と昔の人は言ったがもはやその言葉はこの時代に即していない。「老いても子に従わず」が現代版の定説だ。子供が必ず親の面倒を見る代償として、子供の言うことを聞くと時代は終わったのだ。親は子供の言うことを聞かない代わりに親として最後まで強い自覚と信念を持つことだ。親は子供の生活を犠牲にすることなく老後は許される範囲で長年連れ添った夫婦で身体を大切に

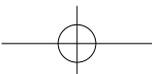


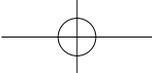
し、最後まで最大限生きる覚悟を持つ事だ。

子供には子供の人生がある。ましてや、子供が結婚し、その連れ合いとの関係もある。そこから派生する複雑多岐にわたる難解な問題に立ち入ることなく子供にも誰にも気兼ねすることなく老後は自由、気ままに生活したほうが良い。老いと共に身体的にも精神的にも限界に達し、行動範囲が狭まり、時間の感覚にも差異が生じ、時の変遷に伴う時代背景の相違で例え親子であったとしても何らかの対立が生じる恐れがある。双方にとつて最後まで自立した生活をするのが理想の姿だ。そして、死の瞬間を待つのだ。

その死を迎えるに当たっても極力、子供に頼らず、負担を最小限にすることだ。

仰々しい金儲け主義の葬儀ビジネスの最後の儀式に惑わされることなく質素で簡単な自分の葬儀に必要な経費と、先祖代々の墓の維持費を子供に残すことを忘れないことだ。しかし、お墓の維持を託された子供も大変である。出来る事ならば子供に墓のことで難儀をかけずに生きている間にこれまでの先祖と共に自分の永代供養を済ませておいたほうが良いだろう。いずれ時代の推移と共にそれほど遠くない将来、宗教そのものの概念が崩壊し、お墓は何の形跡もなくなり無に帰することも考えられる。その意味において、一瞬の生の証として、これまでの既成の慣習、形態にこだわらず燦々と日が輝くとある小高い丘の上

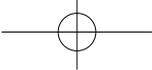




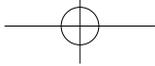
終わりに

に春になると美しく咲く桜の木の下に、若しくは遅咲きの可憐なたくりの群生の片隅に散灰にし、撒き散らしてもらうのもいいだろう。そして、子供たちが親を偲び、家族の年中行事として一年に一度その地が集まるのも風情があるのではないだろうか。そして、自分たちもいずれは親の眠るその自然の地に帰することも良いだろう。死後もそれぞれの個の家族の線の継続を維持したいと願うならば。

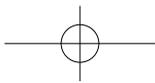
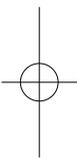
「家庭教育のするめ」は終局的には親が子供に小さいときから当たり前のことを言い、当たり前前のことを教育し、いかにして他人や社会に迷惑をかけず、身の丈の応じた子に育てていくかという事と同時に、その役目を終えた後、親は自分の葬式に関しては最後には子供に面倒を見てもらわなければならないとしても、いかにして「死ぬ直前まで子供の介護に頼らない」という強い意志と覚悟を持つて生きるかでもある。これが親としての最後の努めだ。そのためには親自身が「死の瞬間まで生きるのだ」という強い意志と覚悟を持つて最低限自ら火と包丁を使い料理をし、子供から介助されることなく最後まで自力で食事を作ることだ。そして、筋トレ、腹筋運動等をし、不注意による骨折などの事故防止に努め、最後まで子供から介助されることなく「自力でトイレに行くのだ」という強い意志と覚悟を持つて生き、いかにして子供に最大限世話をかけずに生涯を終えることが出来るか

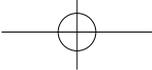


13.5Q15×40W家庭教育.indd 152



団塊親父の逆襲
(ギャグ集)







団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★
1

朝会が始まり5分経過したにもかかわらず熱血教師・矢部先生の姿が職員室に見えなかった。校長が再び時計に目をやったとき、矢部先生は息を切らして戻ってきた。

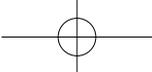
顔を紅潮させた校長は声までも高調させ矢部先生が席に着くなり言った。

「矢部先生！ 朝早く出勤し、勉強に遅れをきたしている生徒たちに朝学習をさせ、指導している熱心さはよいことだが朝会に五分も遅れるとはいかがなものかな。日ごろ、生徒に授業開始三分前着席とうるさく言っている教師自ら時間厳守をしないようではどうする！」

校長は表面上冷静さを装ってはいたが怒り心頭、一瞬にして職員室は静まり返り、重苦しい空気に包まれた。

その時である。校長より六歳も年上で未だ教頭はおろか教務主任にもなれない来年定年を迎える万年平教師の団塊親父がわざとらしく腰の痛さを強調し、後ろをさすりながらゆっくりと立ち上がったのは。

「校長先生の言う通りです。教師は常に自ら率先して生徒の鏡となるような行動をしなけ



ればなりません。一日の始まりの重要な朝会に五分も遅れてくるとは由々しきことです。校長先生！ 今後、朝会に一秒たりとも遅れてくる教師を……朝会免職にはいかがですか？」と言った後、年は若いが情熱溢れる教育を実践し、団塊親父が尊敬し、脱帽している矢部先生をちらりと見て微笑んだ。

職員室のしらせムードが一転して爆笑の渦となった。

★2

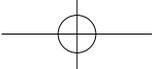
たばこも吸わず、酒も飲まず、パチンコはおろか一切の遊びもせず骨董収集に人生を費やしている来年定年を迎える同期の独身団塊親父がまた何の変哲もない壺を買ってきた。

これまで何度も悪徳骨董屋に騙されている同期に各地の露天風呂巡り以外何の趣味を持たない団塊親父が言った。

「また前と同じように偽物をつかまされたんじゃない？」

「そんなことはない。今度こそ、本物だ！ だいぶ高かったからな」

「どれ、見せてごらん。俺はこう見えてもその道に關して少しは見る目があるからな」といつものせりふを言つてその道の素養などまったくくない団塊親父は例の如く知ったか振り



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

をして真剣な眼差しで目を近づけたり、離したり、角度を変えたり、違った面から鑑定士
気取りでその壺を見入っていた。

そして、その壺を静かに置き、深呼吸をした後、同期の顔を直視して言った。

「お前は本当に人がいいね。誰が見ても……一目瞭然だ。また偽物だ！ いくら払ったか
知らないが、毎回、毎回、こんな偽物を何で買うんだ？ これが本物か？……骨董無稽だ！」

★3

会議中、同僚の団塊親父がもぞもぞと落ち着きのない動きをしていた。

隣に座っていた団塊親父が低い声で尋ねた。

「どうしたの？」

同僚は顔を真っ赤にして団塊親父の耳元で他の人に聞こえないように言った。

「朝から……下……下痢をして……う……うんこをしに行きたいのだが……」

「無理することないよ。早く行ってこい」

それでも同僚は上司の顔をちらちらと伺い、身体をくねらし、席を立つことを渋って
いた。



痺れを切らした団塊親父は大きな声で言った。
「気にしないで早く行ってこい！ はい、立ち上がって！ はい、出発、うんこー！」

★
4

給食時間、団塊親父教師は教室で食事当番の補助をしていた。

今日の献立は野菜のツナ和え、コンソメ味スープパゲッティ、海老カツ、牛乳だった。全員によそった後、少量のスパゲッティのつゆが残った。団塊親父はつゆの少ない生徒がいないか見渡した。

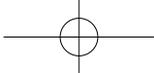
その時、直樹が叫んだ。

「先生、僕につゆをください」

「ちよつと待て、みんなに均等にいきわたっているかどうか見てからだ」と言っただけを確認をした後、「直樹のほかに誰かつゆを欲しい人はいないかな？」と尋ねた。

「先生、私も欲しいです」と3年△組のギャル曾根こと、理佐が手を上げた。
それを見た直樹は言った。

「先生、今日は僕の誕生日なので僕にください」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「そんなの関係ねい！ 誕生日だろうが、なかろうが！」と男子のような口調で理佐が反論した。

「理佐、直樹に譲ったら？ 今日直樹の誕生日なのだから……それともじゃんけんする？」

団塊親父の説得調の言葉に理佐が折れた。

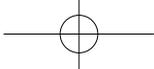
団塊親父は直樹の席に近づきながら言った。

「今日は直樹の誕生日とはつゆ知らず失礼しました。それではみんなで歌おう！ Happy birthday ♪♪、Happy birthday Dear Naoki Happy birthday ♪♪」

「……」

★5

夕方から夜にかけて、「指導」という腕章を付け、団塊親父教師は他の学校の教師たちと一緒に街頭指導に行った。ゲームセンターやスーパーが立ち並ぶショッピングモール付近を巡視していた時、自分の学校の生徒が他校の中学生や見知らぬ高校生に声をかけ、しきりにデートに誘っている光景に遭遇した。



団塊親父教師はすぐにその生徒に近寄り大きな声で叫んだ。

「幸造！ 中学生のくせしてなんぼしちよるか！ 早く家に帰って、勉強せー」

★6

週末にある有名な美術館でボランティアの観光ガイドをしている団塊親父が言った。

「それでは、これから中庭の花壇の下段にあるロダンのスカルプチャーのほうに移ります。

時間はたっぷりありますのでどうぞの数を……どうぞ、ゆつくりご覧になつてくだ

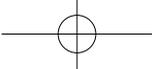
よさ」

「……」

★7

鼻をかんだ後、そのちり紙の先端を棒状にし、鼻の中をぐりぐりときれいに掃除した団塊親父、昔、熱中していたバスケットボールのシュートの格好をし、その鼻紙を回転つけてゴミ箱めがけて放った。案の定、ものの見事、はずれた。

それを見た娘が言った。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「お父さんのへたくそ！ それにしても汚いでしょ！ すぐゴミ箱に入れて！ 自分で拾って！」

団塊親父は言った。

「鼻はだ迷惑をおかけました。ゴミんなさい」

★
8

団塊親父の家族が久々に外食に出かけた。

レストランに入ってテーブルに着き、団塊親父は注文するためにメニューを探したが見当たらなかったので気取った仕草で右手を上げ、近くにいたウェ이터を呼んだ。

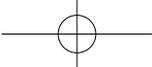
「メニューはどこ？」

団塊親父の少々傲慢な態度にそのウェ이터は冷ややかな目に対応しテーブルの隅を指し、ぶつきらぼうに答えた。

「それでしたら、そこに置いてあります」

団塊親父は声をさらに低音にし、なおも偉そうな口調で答えた。

「あー、そう。ここにあったか。まったくメニュー入らなかった」



★9

チューリップ園で写真撮影会が開催された。

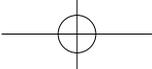
少々鼻の下を長くした団塊親父たちが多数集まった。彼らはモデルの女性にあれこれと注文をつけ、シャッターを押し続けていた。

その中に現代のデジカメ時代に未だに昔のあの「バシャ」という刺激と興奮を伴う大きな音に酔いしれ、もうかれこれ四十年近く使用しているニコン高級一眼レフの望遠、広角そして、標準と三台のカメラを肩から掛け、大げさに動作を変えながら盛んにモデルの変化する表情を追っていた自称セミプロの団塊親父がいた。

「もっと、目線を花のほうに向けて、そう、そう、そして、口をチューリップに近づけて！
そう、そう、もっと近づけて、そう、そう、そして、口をチューリップに近づけて！
だ！」と叫ぶ団塊親父に、モデルの女性はさげすんだ目を送り、とんがらせた口をいやいやながらチューリップに近づけた。

★10

会社の会議を終えた後の昼食会での席上、婚期をとつくの昔に逃した一人の女性社員が



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「甘いものは別腹よ！」と言いながらがつがつと口の周りを汚してデザートケーキをむさぼっていた。

そして、一息ついたあと、口の周りの汚れに気づき、言った。

「誰か、ティッシュ持っていない？」

誰も持っていないので、隣に座っていた団塊親父がポケットティッシュを取り出し、無言で手渡した。

その光景を見てほかの女性が言った。

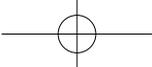
「優しい！まるで旦那さんみたい！」

その言葉に団塊親父は「別腹」女性の方を見向きもせずボソツと言った。

「断っておくけれど、俺はあんたのティッシュではないからな！」

★
11

授業を終え、団塊親父教師が職員室に戻った。いつもひょうきんで教師からばかりでなく生徒からも人気のある業務員の今泉さんが半分笑い、半分神妙な顔つきをしながら床に正座し頭を下げていた。



若手教師の大越先生に頼まれた事を完全に忘れてらしく、いかにもわざとらしく頭を床につけ謝っているではないか。

すぐ側を通った団塊親父教師がすかさず尋ねた。

「今泉さん、土下座ごどしたばってん？」

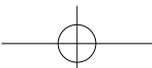
★ 1 2

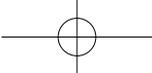
期末試験で理科のテスト監督をしていた団塊親父教師は落ち着きがなく、頭を掻き、鉛筆を回し、辺りをきよろきよろと見渡している道春に言った。

「黒板に書いてある通り、カンニングをしているような疑われる行動はしない！ 特に、今は理科のテストだろう。頭にカリ、カリこず、集中して問題を解け。頭と鉛筆を回さず脳みその思考回路を回せ！ そして、理科に冠正さず！」

★ 1 3

四月末のある晴れわたった朝。団塊親父は未だ真つ白な雪をかぶった鳥海山と月山のあまりにも美しい姿に見とれ、少しでも長い時間その雄大さと優美さを目に焼き付けておこ





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

うと近道の農道を歩くような速度で車を走らせ勤務先に向かった。

道路脇の田んぼの杭に一羽のとんびが止まっていた。すぐ側を通ったにもかかわらず、なんとそのとんび、まったく逃げようともせず、威厳を保ち、団塊親父を威嚇、挑発するかのような目つきで睨みつけてきた。驚いた団塊親父は思わず声を発した。

「オー、マイ、ゴッドウ！ ぶつかってもおかしくないほどのすれすれの間隔に恐れもせず、逆にがんをつけ、とんび立とうとする気配させも見せない！ な、なんと、凜とした、とんび出た度胸のあるとんびだ！」

★14

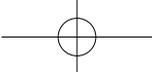
もう夜の12時近く、いつも遅くまでテレビで韓国ドラマを観ている女房が言った。

「ねー。あなたも……何かさっぱりしたものを食べたくない？ 例えは……アイスとか

……ねー、コンビニに行つて買ってきてくれない？ アイスを！」

「こんなに遅く？」会社の仕事を家に持ち帰つて台所のテーブルで書類とにらめっこをしている団塊親父がか細い声で言った。

「いやなら、いいのよ！」団塊親父の疲れた目が瞬きもしないうちに語気の荒い返事が返つ



てきた。

いつも尻に敷かれて、反論の余地などまったくない団塊親父、何か一言でも女房の気に触ることを口にしようものなら長時間、いや何日間にも渡りその数十倍、数百倍は跳ね返ってくるのを察し、そのずしりと重みのある言葉に恐れをなし、間髪を容れず、まだ終りそうもない仕事からすばやく手を離し、心から喜んでいようように上擦った声を出しすかさず言った。

「I see. アイサー」

★15

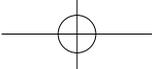
三十数年ぶりに高校の同級生、雄太と会った団塊親父は言った。

「おー、しばらくぶりだな。それにしても、まー、よくも禿げたな。すっかり、髪の毛もなくなつて！ 年取つたな！ ところで、幾つになつた？」

「お前と同じ歳だろ！ 同級生だから！」

「そうか。当たり前だな」

「それにしてもお前はまだ髪がふさふさして、若いなー！ そんなに髪が多くて羨ましい



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

なー！ 同い年で何でそんなに髪の毛があるんだ？」

「教えようか。秘訣を？ 禿から逃れる方法を！ もう、それ以上禿げたくなかったなら……といつてももうほとんどないじゃない？ でも、残っているその少ない髪が抜け落ちないように今日から実践してみろ！」

「なんだい、その秘訣というのは？」

団塊親父は得意げになつて言った。

「毎日、アイスクリームを食べることだ！」

「アイスクリーム？」

「そうだ、アイスクリームだ。それも、どのメーカーのアイスクリームでもいいというわけではないんだ。何だと思う？」

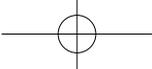
「わかるわけないだろう」

「そうだな、それじゃ、教えよう。脱、禿げ、そうなんだ。ハーゲン・ダッツだ」

「何て言った？」

「ハーゲン・ダッツだずー。ハゲ、脱。ハーゲン・ダッツだ！」

「……」



★16

ある日、団塊親父は言った。

「ねー、お母さん、この前食べたシヤケおいしかったのでもう一度食べたいね」

女房は答えた。

「あれね、高かったのよ、一切れ五〇〇円もしたのよ。でも、今月は支払いが多すぎて余分なお金がないのでもうそんなに高いものは買えません。今日は一山三〇〇円の小ぶりのいわしです」

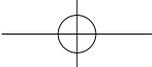
団塊親父は言った。

「あのシヤケは食べられないのかー。おいしかったのに……俺の収入が少ないので……すまんー、それにしても一山三〇〇円のいわしかー。それでは、ここで一言俺に、いわし・てくれ。……な・なんと、な・シヤケねー！」

「……」

★17

今どき父親と買い物など行きたがらない娘が多い時代、団塊親父の高校2年生になる娘



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

は未だに休みの日は父親と一緒にスーパーに買い物に行く。

マヨネーズの棚の前で娘は団塊親父に言った。

「ねー、お父さん、どっちのマヨネーズ買ったらいい、キューピー、それとも味の素？」

「お母さんはどっちと言った？」

「どっちとも言わなかった」

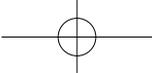
「それならどっちでもいいからマヨネズ買え！」

★18

定年間近にもかかわらず未だに教務主任にもなれない団塊親父教師が2>教室に入った。修学旅行を前にして生徒たちの心が弾み、授業開始の挨拶をしてからも私語がいつこうに止まない。

団塊親父教師は暫くしてから言った。

「修学旅行前で身も心も躍っているのはいいが、はじめをつけることは大切だ。いつになったら私語を止めるのかな？……いつになったら私語を止めるのかな？……ところで、私語は何歳からしていいのかな？……」



返答もないばかりか話を止める気配さえもないのでしびれを切らした団塊親父教師は言った。

「私語をしているのは……二十歳からだ……しご200といつてな……」

「先生、寒い！」中学二年生なのにもうすでに団塊親父の風貌をしている三郎だけが聞いていたらしくすぐに応答した。そして、団塊親父教師に尋ねた。

「それでは、先生はいつから私語をしているのですか？……わからないでしょう。教えましょうか？……先生は死んだ後で……死後」

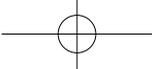
「おい、おい、三郎、クラスの中で一人だけ私の話を聞いてくれたことには感謝するが、私をまだ殺さんでくれ！」

★19

「あー、腹がへった。何か食べるものない？　そういうえば、まだ、この前買ったパン残っていたんじゃない。それ焼いてくれないかな？」

団塊親父は家に帰るなり女房に言った。

パンを焼こうとし、袋を開けた女房は言った。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「あー、もう、食べられないわ。カビが生えてある」
その言葉に、いつも「もつたいない、もつたいない」と言っては、残飯整理をし、食べた後いつも後悔し、高血圧と太りすぎでメタボを心配している団塊親父が言った。
「どれどれ……これぐらいのカビ、大丈夫だ。まだ食べられる。お前は神経カビんだ！」

★20

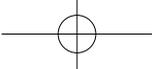
「この前、書写で使った墨、どこに置いたんだろ？ 未だ呆けるのは早いし……」
国語教師の矢部先生はひとりぶつぶつ言いながら辺りの棚を探していた。そばでそれを聞いていた団塊教師は言った。

「そこにあるでしょう」

「どこですか？」

「その棚の墨に……」

「……」



★21

「担当さん、そんなにきつく締めないでくださいよ。もう少し、てーじょうに扱ってくださいよ」

押送（取調べのために検察庁に警察の留置場から送られること）で手錠をかけられた団塊親父の留置人が若い看守に言った。その言葉を無視するかのようにその若い看守は手錠をかけられた留置人を並べて、手錠の真ん中の穴にロープを通し、じゅじゅ繋ぎをしていた。

団塊親父留置人は低い声でもう一度言った。

「担当さん、そんなにきつく締めないで、もう少し、てーじょうに扱ってくださいよ」

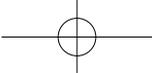
高尚な？ ジョークが理解できなかったその若い看守に団塊親父留置人は言い換えた。

「担当さん、丁重に扱ってくださいよ」

★22

職員室前を全力疾走してきた二年生の順一は危うく団塊親父教師にぶつかりそうになった。団塊親父は言った。

「順一君、若いということはいいことだね。走るのが速くて……でもね、そんなに勢いを



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

つけ速く廊下を走るとすぐに年寄りになるよ」

団塊親父の意味不明な言葉を極力理解しようしながらも怪訝な顔をして、順一が言った。

「先生、どうして廊下を走ると年寄りになるんですか？」

団塊親父教師は言った。

「それはね、廊下を速く走ると老化現象を促進すると言われています。それを防ぐためには、老化をゆつくりと落ち着いて加速しないで歩くことが大切なのです」

「……」

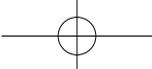
★23

四月に入っても時には雪が降る山形。北部の山間の雪深い地にある学校に通う団塊親父がもう雪も降らないだろうと四月中旬になって自分でタイヤ交換を始めた。

そばで見ていた娘が言った。

「お父さん、タイヤ屋さんに頼めばいいのに。タイヤ交換代をケチって、後でその何十倍もマッサージにかかるんだから……」

やっとのことで作業が終わったときには娘の言ったと通り団塊親父は腰が痛くなり容易



に立つことが出来なかった。

「だから、言ったでしょう！」

団塊親父は腰を曲げたまま、拳で叩きながら言った。

「あー、あー、I am very タイヤどう！」

★24

「お父さん、足を滑らせないようにして上ってね」

家族で山頂の神社を目指し石段を一步一步踏みしめている時、娘が言った。

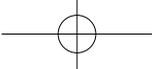
歴史を刻みながら真っ直ぐに天空を目指す羽黒山の杉林の群、美しい気品にあふれる濃い緑の寡黙な苔も静寂の空間に生き続けていた。

「あつ、痛い！」突然、団塊親父が声を発した。

「だから言ったでしょう。滑らないようにしてねと。あーあ、転んじやって！」

団塊親父はいかにも痛そうに顔をしかめ、身体を異常な形に曲げ、ひぎをさすりながら言った。

「あーあ、苔ちやった。それにしても、苔んな格好して、苔んにかかわるが、我ながら苔



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

いだね。あー、おかしい、あー、おかしい」
「……」

★25

原生林の自然に囲まれた神室少年自然の家の野外活動中、一年生の花子さんの目の前に一羽の紫アゲハが舞っていた。

あまりの美しさに花子さんは叫んだ。

「きれい！」

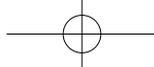
その側にいた団塊親父教師は言った。

「花子さん、蝶はね、様々なちよう能力を持っている昆虫なんだ。それにしても本当に、ちよう、きれいだね」

「……」

親父ギャグが理解できなかった花子さんは眼を上向きにし、口を開けて停止した。団塊親父教師はもう一度バツの悪そうな声で言った。

「蝶、蝶、綺麗だね」



「……」

★26

花見時に家で焼き団子を作ることになった。

だんご粉を耳たぶよりほんの少しばかり硬めにこね、熱湯にいれ浮き上がってきたのを氷水に取り、そして、串に刺し始めた。

娘が言った。

「お父さん、だめじゃないの。そんなに間を空けては！ きちんとくつつけて刺して！」

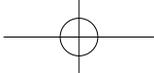
「そうだよな。ダンゴ同士が離れて串に刺さっているダンゴなんて考えられないな。ぴつたりくつつけないと、互いに連絡が取れないからな」

団塊親父はそう言いながら娘に言われたように丁寧だんごをくつつけて、串に刺していった。

「お父さん、何言っているか意味わかんない！」

しばらくして、団塊親父は叫んだ。

「これで、団子の出来上がり！ 完全に互いにぴつたりと結びついた官製団子の完成で



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

す！

「あなた、何言っているの。まだ、完成していないんじゃない。これから、たれを作って、それを付けて焼かなければならないのよ」

女房の鋭い声が飛んできた。

「たれを作って、たれをつける？ そうだったか。ところでいったい、たれがたれを作って、たれが団子にそのたれをたれたれとつけるの？」

との団塊親父の返事にすかさず再び女房の冷たい声が飛んできた。

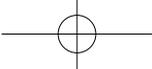
「あー、あー、自分のたれを知りなさい！」

★27

放課後、部活が始まりグラウンドの回りを生徒たちが走り始めた。

突然、先頭集団の一直線が悲鳴と共に乱れ、大きな輪になった。

生徒たちのはるか後方から、だぶだぶの腹をゆすりながら「はーはー」言いながら走っているのか、歩いているのか不明な団塊親父顧問はその悲鳴を聞き、力の限りの全力で前方に出た。



大きな蛇が草むらから飛び出てきたのだ。

生徒たちの手前、ここぞとばかり格好いいところを見せようとすく、生徒たちを避難させ、生徒の一人に野球部の用具室から、トンボを持ってこさせ、その蛇を捕まえようとした。なかなか蛇は捕まらなかったが、悪戦苦闘の末、どうにか持ち上げることができた。

団塊親父顧問は言った。「重いなー。ハの heavy！」

生徒たちが親父ギャグに気がつかないので団塊親父はなおも蛇り腰になりながら言った。

「本当に重いなー。ハの heavy！ ところで、直人、heavyの比較級は何だ！ ……忘れてた？ ……heavierだろう。 ……それでは、これ何だ？ ……へびいやー ……」

「……」

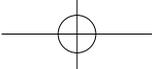
★28

二時間目の授業前、新一年生の健一が職員室の熱血教師、矢部先生の前に来て、言った。

「先生、教科書と宿題を忘れてきました」

「なに！ 中学校での授業が始まったばかりで、もう忘れ物か！」

矢部先生はいつもの演技で怒っていた。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「ママに電話して、すぐ届けてもらいなさい！ 最初からそんなことでこれからどうする！ とにかく、ママに電話して！」熱血矢部先生の演技はまさにプロだ。

健一はママを思い出したのか、今にも泣き出しそうな顔をし、うつむいたママだった。

その状況を側で見ていた団塊親父教師は、【教師が生徒を叱っているときは他の教師は決してその間に入らない】という教師間の暗黙の鉄則を破り、柔らかに言った。

「マー、マー、矢部先生、そんなに怒らない、怒らない。健一は心から反省しているようなので、今日のところはこの年寄りに免じて許してやってください」

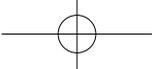
★29

雨上がりの午後、団塊親父教師は午後からの久々の出張に出かけた。

途中、ランドセルを背負った数名の小学生が傘を振り回してチャンバラごっこをしていた。

一人の児童が相手の顔の辺りをさかんに突こうとしていたのを見て、団塊親父教師は車を止め言った。

「目に刺さったらどうする！ アンブレラないから止めなさい！」



子供たちは見知らぬ親父から、突然ギャグらしきことを交えた命令文を言われ、びつくりして、その行為を止めた。

親父ギャグが完全に理解されなかったことを気づいた団塊親父は、子供たちを諭すように言った。

「とにかく、危ないからこうもり傘を振り回すのを止めなさいね」

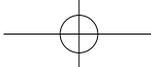
★30

矢部先生が出張で学校を留守にしたとき、数学のジャーニーズ系、天口先生が墨を借りようと、隣に座っている団塊親父教師に尋ねた。

「ついでに筆も借りてもいいですかね？」

「いいと思います。矢部先生からは何を借りても結構です。矢部先生は、墨のほかに筆まで借りて！ 天口先生は本当にふでふでしい奴だ！」とは決して言いません」

「……」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★31

会社に出勤するため、駐車場に行った団塊親父が「俺の鍵、どこに置いたっけ？」と言いながら、家に戻ってきた。

女房が言った。

「しつかりしてくださいね。呆けるには未だ早いのよ。その椅子の上に置いていたでしょう。……あるでしょう？」

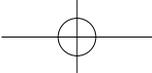
「あつた。あつた。そこにあるとはちつとも、キーがつかなかった」

★32

あと一年での定年退職を前に会社奨励の早期退職で少しでも退職金が多いほうがいいと判断して早期退職をした団塊親父は長年女房に苦労かけた御礼として、初めて二人で海外旅行に行った。

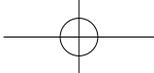
二週間のヨーロッパ旅行を終え、ブランド品を身体中巻きつけた女房が機中で言った。

「お父さん、グッチなんかみんな持っているのもうそんなに価値がないのよ。私が言ったようにやっぱりプラダのバッグにすればよかったわ」と何度もぶつぶつ言っていた。



それを聞いていた団塊親父の忍耐が臨界点を越えた。

「何を、文句言っているんだ。買い物に行つたのではないぞ！ 俺はヨーロッパの歴史を少しでもいいから見ようと思つていたのに……それを、何だ！ それをそつちのけにして、イタリアに行けば行つたで、買い物ばかりして！ 何が、ローマの休日だ！ 老婆の休日みたいな顔をして、婆一婆りのコートが歩いている格好をして買い物ばかりして！ そつちのほうがいい、コーチの方がいいとか？ それにしてもブランド、ブランドと一体どこがいいんだ！ 食事のときでもそうだ。いい歳をしてブランドみたいなまつ毛をくっ付け、一週間何も食べていないガリガリ瘦せたブルドッグがブルガリアのヨーグルトをブルブル振るえながら音を立て何がブルガリだ！ それにメリヤスのばばシャツを着たおばはんがよだれかけのおとつあんみたいなものを巻き、何がエルメスのスカーフだ！ それに、まだある。しゃーねー、おばんが碁盤をひっくり返したような顔をして、何がシャネルの5番だ！ グッチだとかブラダとか言つてブラグを逆に回したようなグルグルした目をして、探し回つた拳句、結局はグッチを買つたのは誰だ。それを何をいまさらグッチこぼしているんだ！」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★33

平成の大合併と言われ平成に入り日本各地で市町村の合併が相次いだ。

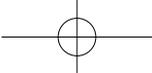
ここ大里村も例外ではなく、長年、村だったのが今年の四月から隣の市と合併となった。時代の流れとはいえ、市に吸収されてしまったことに未だに反対している団塊親父はひとりぶつぶつ言った。

「大里村が葉山すど、すになつても、ながみはなんぬも変わったわけでもねー。すぐねぐても、俺はいまだぬ、高血圧と糖尿病の合併症を併発したいな合併だ！」（大里村が葉山市と市になつても、中身は何も変わったわけでもない。少なくとも俺は未だに高血圧と糖尿病の合併症を併発した田舎っぺだ）

★34

団塊親父が女房と旅行に出かけ、女房がペットボトルのお茶を少々残し、捨てようとしたとき、いつも、「もったいない、もったいない」と残り物を何でも食べ、飲む団塊親父が言った。

「それを捨てるの？ 俺が飲む」



「今、自分のものを飲んだばかりでしょう。無理しないで捨てたほうがいいんじゃない？」
「いや、もったいない」と言つて、団塊親父は女房からそれを取り上げいつきに飲み干そうとした。

突然、器官内に入つたらしくむせ返つた。

激しく咳き込む団塊親父の側で妻が軽蔑した口調で言つた。

「だから言つたでしょう。捨てたほうがいいんじゃないつて！」

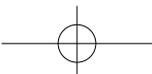
団塊親父はなおもむせながら、苦しそうにし、途切れ途切れに言つた。

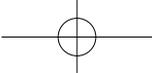
「あー、……年を……取ると……なかなか……身体も……言うことが……器官……ない」

★35

運動会を前日に控え、給食後に赤と白の幹部会議が開催されることになっていた。赤の応援団長の佐藤一樹はいつものようにご飯を口に入れては話し、味噌汁を口に入れては話続けていた。もう、全員食べ終わっても一人ゆっくりと幹部会議のことなどなんのその、いつこうに食べ終わろうとしない。

一樹の後ろに白組の応援団長の正人がしびれを切らして立っていた。





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

それを見た、団塊親父教師は言った。

「一樹！ 正人がさつきから待っているのかわからないのか！ 速く食べろ！ 赤組の応援団長がそんなことでなんだ！ 運動会で本気で一樹（勝つ気）あるのか！」

「……」

★36

「オーベーか？」 こう言つて、給食のとき、味噌汁のおわんを口に持つていこうとしていた美穂の頭を後ろから、あるお笑い芸人の真似をして、真が軽くたたいた。

その衝撃で味噌汁が飛び散った。

それを見た団塊親父教師は真のところにくつくりと近づき、触る程度で頭を押さえながら言った。

「そんな、ふざけたことするのは、おーめーか？ すぐに拭きなさい」

美穂に謝りながら真が言った。

「布巾、貸して、布巾！ ふきん、どこ？」

団塊教師はすかさず言った。



「真、人に頼らず、自分でふきんを捜せ」

「……」

★37

ある日の朝、いつも元気澁刺オロナミンCドリンクの矢部先生が顔をしかめ、のそりのそり、股をかばいながら痛そうにしてガニ股で出勤してきた。

それを見た、団塊親父教師は尋ねた。

「What's the 股？」

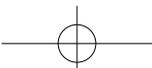
「……」

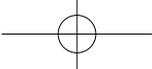
週末は部活の練習試合とか、大会で忙しい矢部先生、久々に何も予定がなかったので子供が馬に乗りたいということで近くの高原に出かけたそう。

子供以上に自分のほうがすっかり気に入って、長時間乗馬したらひどい股づれになったとのこと。

それを聞いた団塊親父は言った。

「矢部先生、そんなに痛くなっても乗馬が楽しいのでやみつきになって、来週、股、行く





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

んでしょう？」

「……」

★38

団塊親父教師が今日の授業でやるプリントを生徒に配布した。

近年の教育予算の削減でプリントも出来る限り両面印刷をするようにしている。

生徒の一人が言った。

「先生、うらないっす！」

団塊親父は即答した。

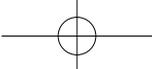
「俺か？ そうだ。俺は昔、占い師になろうとしたことがあつたがやはりいい加減で適当なことばかり言う詐欺師みたいなので占い師になるのを止めた」

「先生、そうじゃないんです。裏ないっす」

「そんなになまってどうしたんだ。『うらないっす』ではなく、『うらないし』だろう」

「違うつてばー、先生ー、プリントの裏が印刷されていません。『裏ない紙』」

「なんだ、最初から標準語を使えばいいのに……」



「……」

★39

八十六歳になる団塊親父の母親が言った。

「一度でいいから東京というところをこの目で見てみたいものだね。冥土の土産に東京見物させてくれ」

最後の親孝行をしようと早速上京し、はとバスに乗せて東京案内をさせた後、有名なレストランに連れて行った。これまでテレビでしか見たことのないフランス料理に母親は舌鼓を打っていた。

やがて香ばしいにおいがするデザートに出されたものを母親は指差し、団塊親父に尋ねた。

「これは何だい？ どうやって食べるのかね？」

団塊親父が言った。

「これはな、おふくろ、中にレーズン、要するに干しぶどうとカスタードクリームが入っていてな、上はキャラメルを被せ、それをバーナーで焼いたものだ。食べるときは上の部



団塊親父の逆襲 (ギャグ集)

分を破り、中のものと一緒にキャラメルとうまいぞ」

母親は冷めた口調で言った。

「お前は、いくつになっても馬鹿な事を言っているな。そんなことをして食べて、入れ歯と喉にキャラメって窒息したらどうすんだ！」

その側で団塊親父の女房が独り言を言った。

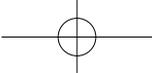
「この母ありてこの子あり……」

★ 40

「お父さん、何買つて来たの？」 帰宅した団塊親父に娘が尋ねた。

「友人の長男が東京で修行して一人前のパテシエになって、今度田舎に帰ってきて店を開いたので、どんなにうまいのか買ってきた。中でもバーム・クーヘンが一押しだそうだ。」

田舎では味わえない都会の味がするということで評判の店だそうだ。試しにどれほど美味しいか、少し、クーヘンか？」



★ 4 1

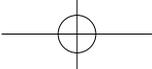
団塊親父は老化防止のためのいろいろな運動を自分で考案したり、雑誌などから運動方法を取り入れたり、これまで様々な事を試しては止め、試しては止めを繰り返してきている。「お父さん、今度は何やっているの？ また違った体操を見つけたの？ お相撲さんみたいに、しこふんで？ そんなことやつてそれ以上体ががたになつたらどうするの？ どうせ、どんな運動でも三日も続かないのだから無理しないほうがいいんじゃない？」団塊親父の娘が言った。

「今日の新聞記事にしこを踏むと関節にも、身体にもよいそうだ。今まで、あれこれと運動をやつてきたがようやくやくいものが見つかった。やはり何でも試してみることが大切だ。これも、しこ錯誤の末だ」

★ 4 2

ある朝、バスケットボール部に所属している瑞希が足にギブスをはめ、松葉杖をついて登校してきた。

団塊親父教師が尋ねた。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「どうした、瑞希？」

「昨日の試合で転んで足にヒビが入りました」と瑞希が答えた。

「そうか、それは大変だね。でもな、瑞希、そうやって誰しも怪我をしながらうまくなっていくのだ。勉強でも、運動でも何でも困難に打ち勝つヒビの努力の積み重ねが大切だ」

★43

初夏のある週末の昼下がり、団塊親父がステテコ姿で縁側に寝そべりめずらしく本を読んでいた時、一匹のハエが団塊親父の周りをうるさく舞っていた。

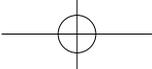
何度手で払ってもそのハエはしつこく団塊親父に付きまといつていた。

団塊親父はハエ叩きを持ち出し、射止めようとした。

団塊親父の若いときの俊敏さがもうなくなり何度も失敗し、今度こそと息を殺し、机の端に止まったハエを素早く叩こうとした。

しかし、またもや逃げられた。団塊親父はすかさず言った。

「このハエ、逃げるのが……ハエー。それにしてもあの昔の俺のハエある青春のすばやい動きはどこに行っちゃってしまったのだらうかー？」



★ 4 4

団塊親父教師が教室に入ろうとした時、美佳がぼんやりと外を眺めていた。

「どうした？ 美佳？」

「先生、やばいつす」

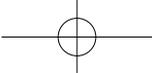
「その、やばいつす」はレイデイが使う言葉ではないね。……ところで、何か困ったことでもあるのか？」

「先生、追試を受けなければなりません。どうやって勉強していいのかわかりません」

「何の科目だ？」

「地理です」

「地理か？ そうだな。一番いい方法はまずあせらないことだ。そして、地理の勉強をするには特に食事から変えることだ。それには脳の血行を刺激し、記憶力を増進するために今日からなんの食べ物にも地理ソースをかけて食べることだ。それから、少しずつでもいいからなんでも暗記し、理解し、自分のものにしていくことだ！ 昔からよく言うだろう。地理も積もれば山となる」と。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「……先生の駄洒落、寒すぎて、余計にやばくなった。又追試だ！」

★45

生暖かい春風が心地よく窓から部屋の中に流れている昼下がり、経理担当のベテランがしきりに電卓をたたいてはぼやいていた。

「三万円が足りない。どうしたんだらう。計算が合わない？ 三万円が足りない？」

そこに通りかかった団塊親父がつぶやいた。

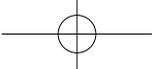
「三万円が足りない？ この陽気で頭が半分以上眠っているんじゃない！ 注意力三万！」

★46

下水管の通りが悪いので業務員の今泉さんがマンホールのふたを開け、中を掃除することになった。

しかし、なかなかふたを取り出すことができず四苦八苦していた。

何回も力いっぱい引っ張り出そうとしていた。



そこに通りかかった団塊親父が言った。

「余り、無理しないほうがいいですよ。腰にふたーんがかかるでしょう」

★47

「非常に香ばしいアローマが漂っていますね。どこのメーカーのコーヒーですか？」終生出世とは程遠い団塊親父が休憩室でドリップ式コーヒーにお湯を注いでいた時、団塊親父より歳がずつと若い上司が入って来て尋ねた。

団塊親父はすかさず答えた。

「いい香りでしょう。これはモカコーヒーです。課長さんもお飲みになりますか？ モカ（もっか）お湯を注いでいる最中ですのですぐに出来上がります……」

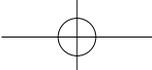
★48

給食が終わり歯磨きの時間が始まった。

団塊親父教師も生徒と一緒に歯磨きを始めていた。

そこに、急いで走ってきた朋和が早口で尋ねた。





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「いけねー。歯磨き粉忘れてきた。これ誰の？ 借りていい？」と言って団塊親父のサンスター・ORA2と書かれた歯磨きのチューブを指差した。

団塊親父教師は言った。

「おーらのだ。ツーかつても良いぞ」

「……」

★49

団塊親父が娘と一緒に買い物に行った。

「お父さん、お母さんが魚の干物を買ってきてくれていたね？ 何の干物か覚えてる？」

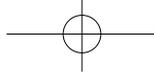
「覚えていないね。何でもいいじゃないの？……これでどう？」

「でも、お母さんはさんまの干物は食べたくないって言っていたんじゃない？」

「それじゃ、これは？ ところでこれは何の干物だ？」

「これは真鱈の干物でしょう」

団塊親父はじつとその干物を見てから娘に尋ねた。



「本当にそう？ 真鱈？ ……まあーじ？」

★50

山菜シーズンになり、地元の人たちばかりでなく、他府県からも多くの人が村にやってきていた。そんな中、ワラビ取りをしていた老人が熊に襲われ重傷を負った。

早速地元猟友会のハンターが招集された。会長である団塊親父が熊の駆除出発を前にして言った。

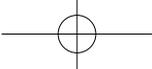
「今回襲った熊は非常に凶暴であり危険であるのでくれぐれも気をつけて、とにかく射止めるまで徹底的にくまなく探してください」

★51

「先生、きのう私の裏山から縄文式の土器と思われるものが出てきたんです」 社会の授業であずみが言った。

「そうか。あずみが住んでいるあたりは今からおよそ1万6千年から1万年前の縄文時代に集落のあった地域でこれまでたくさんの縄文式土器が出土している。もっと探してみた





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

らどうか？ すばらしいものがたくさん出てくるかもしれないぞ」

「今度の休みに探してみます」

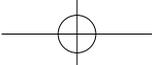
「そうだね。あずみ、それでは遠い昔の土器を探すときに大切なことを教えよう。それはな、当時の人々の生活形態はどのようなものであったか、どのような考えや、感情を持っていたのかなどを想像し、限らないロマンを求め、心臓を土器、土器させながら探すことだ」

「……」

★52

給食のとき、ほかの学年の給食当番が余分にお玉をもつていった。あいにく給食室にそれに準じるものがなく、芋に会用の大鍋に使用する大きいお玉しかなかった。取り合えずということでお玉を持って教室に戻り、味噌汁をよそおうとしたところに団塊親父教師がやってきて、言った。

「それにしても大きいな！ そんな大きなお玉で味噌汁よそおうの？ おおったまげたあー」



★53

グラウンドから教室の中に隣の小学校の明日に控えた運動会の合同練習の大きな声が響いてきていた。グラウンドの背後には、田植えを前にし、きらきらと輝くみずみずしい波打つ水面の田んぼ、その向こうに未だ残雪姿の月山と葉山がくつきりと浮かぶ。

団塊親父教師は言った。

「子供たちの元気な声はいつ聞いてもいいな」

そのうち、凄まじいドンドンという太鼓の音と共に集団演技よさこい踊りのソーラン節が大きなスピーカーを通してがんと響き渡ってきた。

「やーれん、ソーラン、ソーラン……」

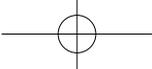
それにしても音がでか過ぎる。

いつもおとなしい勝が小さな声で言った。

「せんせい、うるさすぎますね……」

警視庁時代に東京で新宿騒乱事件を体験している団塊親父教師は言った。

「そうだね。勝。はつらつとソーラン節に合わせ、躍動する生徒たちの踊りはいいが、余りにもスピーカーの音が高く授業に妨害になるようだったらソーラン罪を適用するか！」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★54

教室の窓枠に一匹の深紅色のトンボが止まった。

それを見た団塊親父教師は、小さい頃、田んぼの稲穂に止まったトンボを捕まえるときによくやっていた、遠くから人差し指を大きく、ゆっくりと回しながら、徐々にその輪を小さくし、トンボの目の前まで近づき、トンボの目を回した後に捕獲する方法でトンボの羽を押しえようとした。

しかし、昔のトンボよりも賢くなったのか、それとも団塊親父教師がぼけ始め、昔の神通力がなくなってしまったのかトンボは団塊親父をあざ笑うかのようにして素早く逃げ去った。団塊親父教師は悔しがりながら言った。

「トンボーしあがつたな」

★55

1Aのクラス全員が町から山の学校まで二十キロの道を歩くことになった。

途中から山道になり、しばらくして、先頭集団の列が乱れ、「スズメバチだー！ 先生、



スズメバチだー！」と大声を出し後方になだれ込むようにして逃げてきた。

その状況をとつさに判断した団塊親父教師は前方に走っていき、スズメバチの大群に勇敢にも立ち向かい、生徒たちをすばやく避難させ、所持していた救急箱から虫除けスプレーを取り出し叫んだ。

「スズメメー！ スズメメー！ 生徒達に刺そうとは……このはちあたりが……このキンチョージェットスプレーが目に入らんか！ 恐れ多くもこのスプレーは……」

と叫びスズメバチめがけてスプレーのボタンを押した。スズメリかえった山々に勢いのある噴射音が響き渡った。

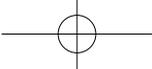
★56

年下の上司に報告しなければならぬ書類作成を急いでいた万年平社員の団塊親父は最後の行に間違えた。

提出時間が迫り時間がないので最初からやり直しをしないで修正して出すことにした。

あいにく手元に修正液を持ち合わせがなかった。

それで、向かいに座っている同僚に言った。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「亀ちゃん、修正液もっていない。余り急ぎすぎて最後になって間違えた」

亀ちゃんは気の毒そうにして団塊親父に修正液を渡した。

すかさず団塊親父が言った。

「すまないね。このご恩は修正忘れません」

★57

高速道路を運転していた団塊親父の車の後方から赤いスポーツカーが迫ってきた。法定速度を遵守し走行している団塊親父をあおるようにして追い越しをかけすぐ前に出てきた。団塊親父はびつくりして言った。

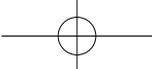
「急にハンドルを意図的に切りあがつて！ びつくりさせるな！ ヒヤッとした！」

よく見るとイタリアのフィアットだった。

「団塊世代の者を驚かすような運転をしないで欲しいな」と言っている矢先、今度はシルバーのスポーツカーが急に割り込んできた。

「ドイツもこいつも運転がどうも乱暴だね」

団塊親父はびつくりしたせいも急にか腹が痛くなつて、便通をもよおした。



割り込んできた車はベンツのコンバーチブルのスポーツカーだった。

★58

毎週一回の体育館での全校集会で定刻前に生徒が集まってきた。

余りにも左側に偏って整列していたため、熱血指導担当の矢部先生は叫んだ。

「二年生を中心にしてもっと右に寄れ！」

聞こえたのかそれとも聞こえないふりをしたのか「三年生は移動しようとはしなかった。

矢部先生はさらに大きな声を出し怒鳴った。

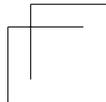
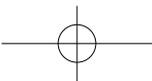
「三年生、もっと、右に寄れ、寄れ、寄れ！」

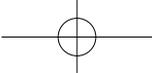
それを聞いていた団塊親父万年平教師が低い声で言った。

「寄れ、寄れって、まさに俺の人生だ。人生よれよれ。あれよ、あれよという間に俺の人

生が終わってしまうな」

その直後、集会の開始を知らせるよれ（予鈴）が鳴った。





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★59

英語の授業が始まった途端、明日馬という漢字を書いてあすまと読ませる男子生徒が教室に駆け込んできた。

あすま君は団塊親父英語教師に近寄り、「保健室に……行つて……いました。す……すみません」と言った。

「どうした？ 大丈夫か？」

あすま君は苦しそうにしながら、「だ……大丈夫です。ぜ……ぜ……喘息が起きてきて……す……すぐに落ち着きます」と答えた。

「喘息つて、それは個人情報ではないの？ 公にしていいの？」

「いいんです。みんな知っていますから……」

しばらくして、あすま君の喘息が収まったので団塊親父教師は言った。

「もう、大丈夫かな？ あすま君、そのような時は、急いで喘息力で走つてこなくともいいんだ。保健室で休んでいて。それにしても偶然だな。あすま君が喘息か？ 喘息のことを英語で *asthma* と書いて、アスマともアズマとも言うんだ。とにかく、無理せず、ゆっくりすることだ。もし、あすまで良くならない時は家の人と相談してお医者さんに診ても



らったほうがいいと思うな」

★60

六月中旬、中体連の地区大会を前にして体育館で壮行式が行われた。

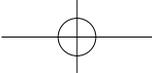
体育館の両脇の大きな戸が開けられているにもかかわらず中は蒸し暑く、熱気で溢れていた。

各部ともまずは地区大会で優勝し、県大会を目指していた。最後に校長が選手たちに激励の挨拶をした。

「これまで、あなた方の先輩たちが築き上げてきたわが校創設以来の古い伝統と誇りを後輩に継承する意味でも今回の大会では力の限り最後まで勝利をあきらめることなく戦ってきて欲しい」と言っただけにその時、一瞬強い風が体育館に吹き込んできた。

その直後、天井の方からパラパラと目視できるゴミが舞い降りてきた。それを見た団塊親父教師は言った。

「なんと言うタイミングのよさだろう！ この幸運な風はわが校に勝利をもたらしてくれらるだろう。選手たちの頭上に体育館の古い伝統からたくさんの誇りが舞い降りてきた」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★61

団塊親父が残業をして夜遅く帰宅した。

テーブルの上には冷め切ったおかずが並べられ、韓国ドラマに熱中している女房がテレビ画面から一瞬の目も離さず叫んだ。

「お父さん！ 勝手にご飯食べてね！」

団塊親父は返事もせず冷蔵庫から一日一本限定の三五〇ミリの発泡酒を取り出し、それを一気に飲み干し、おかずに箸を付けようとした。

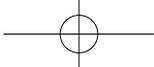
そこには焼きすぎで焦げた鮭が横たわっていた。

団塊親父は女房の後姿に向かって聞こえない低い声で呟いた。

「こげだ、こげたさがな食べられるか！」（このような、焦げた魚食べられるか！）

と言ったものの、女房に聞こえたのではないかと一瞬、はっとした。

そして、聞こえていなかったことに安堵し、焦げた鮭にゆつくりとした動作で箸をつけた。



★62

団塊親父教師が教室に入った途端、いつも元氣バリバリな良二が質問した。

「先生、何型？」

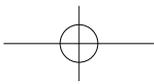
「何の型？」

「先生、血液型のこと。先生はO型だと思う。おおざっぱだから」

「血液型と人間の性格はなんら関係がありません。日本だけです。世界の中で血液型がどうのこうのといって詐欺まがいな行為に引つかかっている人が多い、おめでない国は……」

「でも、先生、本当に血液型は関係あるって！ 教えてください、先生の血液型を……」

「そんなに知りたいか？ それなら教えよう。……私の親父は新潟出身、お袋は山形、したがって……私の血液型は潟形型で身体もガタガタ、近頃は年のせい、歯はカタカタ、足はガクガク昼の給食後はクタクタ、夕食後はヘトヘトと自分の思うように動かないのだ！」





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★63

社会保険庁のずさんな管理が表面化し、その対応に追われ、電話相談を開始した。

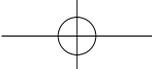
転職を繰り返して、来年、退職になる団塊親父も心配になり年休を取り、自宅から0120-657830のフリーダイヤルに掛けた。

しかし、「ただいま大変込み合っています。しばらく待って、おかけ直してください」の録音が繰り返されるばかりで三時間たつても電話線はつながらなかった。657830-老後悩みゼロの語呂合わせは典型的な真面目くさった役人が考えたのであろう。

団塊親父はなおも、数字を押し続けたが、つながらないのでますます疑心暗鬼になり、老後悩みゼロどころかいつそう老後の不安が募ってきた。

繰り返し、繰り返し同じ番号を押し続けながら目の前にした電話番号の最後のゼロにもう一つゼロを書きくっ付け、0120-657830を0120-657838にした後、しきりにぶつぶつとつぶやいていた。

「この調子じゃ、老後の悩み無限大」



★64

明日に控えた中間試験の問題作成中の矢部先生、資料の切り貼りをコピーに取ろうとしたところ、機械が故障し動かなくなつた。

赤ランプのついている箇所を何回も点検したが回復の兆しがない。

機械にぶつぶつ文句を言いながらマニュアルを見、問題の場所を見つけ出そうとしていた。

そこに通りかかった団塊親父教師が言った。

「また故障ですか？ 先週も修理に来たばかりで……一体修理屋さんは何をやっているのですかね？ やはり、会社の方針で儲けを最大限にするためにしばらくすると故障するように時間を正確に設定して百パーセント完璧な修理をしないと噂は本当のようですね。今度修理屋さんが来たら、その点をコピーどく問い詰めてみますかね」

★65

来年定年を控えた団塊親父の同期生の娘が去年から英会話学校NOVAに通い始めていたそうだ。

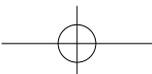


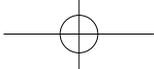
団塊親父の逆襲 (ギャグ集)

しかし、経済産業庁から書面記載不備、誇大広告、不実告知等もろもろの悪質な違反行為をしたとしてNOVAは業務停止命令を受け、閉鎖した。

「高い授業料だけ取り、いつでも好きな時間にレッスンが受けられるとっていたのにそれも出来ず娘の英会話はちつとも上達しない。俺が全額前払いの費用を払ったのだ！」とぶつぶつと文句を言っている同僚に団塊親父は言った。

「なにも高い金を出し、中には学歴詐称の不良もいると言われている外国人から直接英会話を習わなくとも自分でほとんど費用をかけないでやる気があれば出来るのに。そんなにしてまで娘に英会話を習わせたいのか？ 英会話を勉強させる前にしっかりと学んだ日本語と社会通念上最低限の礼儀作法をしっかりと身につけさせたほうが先決ではないの？ NOVAのケースは最初からもっと厳しく規制すべきであった。それにしても現代の社会において、NOVAばかりでなくあまりにも多くの詐欺まがいの、いや詐欺そのものの悪徳商法行為が多すぎる。それらの犯罪行為にはもっと厳罰をもって処罰すべきだ。ここまですべてNOVAなしにしてきた監督関係省庁の責任は重大だ！」





★66

総合の時間、生徒たちが美化コンクールのポスター作りをしていた。

様々な色のマジックマーカーを使い、プロ顔負けの腕前で作品を仕上げていた。その中にきらきらと光るマーカーを使用しているのを見た団塊親父教師が生徒に尋ねた。

「ほー！今の時代、そんなマジックマーカーがあるのか？昔はそのような光るマーカーはなかったなー」

「先生が若かった江戸時代は勿論マジックマーカーはなかったでしょう」

「そんな昔に生まれていないだろう。俺が生まれたのは明治時代だ」

「明治時代？」

「そんなわけないだろう！……それにしても、色が光つてきれいだね。本当に摩訶不思議だ！」

★67

団塊親父が息子に就職祝いを買ってきた。

明日からの新入社員研修を控えた息子が包みを開け、中に入っていた時計を見てびつく



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

りした声を上げた。

「お父さん、これ、オメガじゃない！ こんな高級時計、いったい誰がするの！」

「勿論、オメガするのだ。それはお前がこれから一流の社会人として生きていくための記念すべき時計だ。大事に使うのだ」

「……最初から高価な時計を新入社員がしたら、上司や先輩に睨まれるよ」

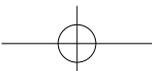
「そんなことなどまったく気にする必要はない。とにかくこれから会社のどんな仕事でも一流になるよう目指すのだ。そのためには時間を大切に、有効に使い、時間厳守を心がける意味でも最初から性能の良い時計を身につけることが重要なのだ。少々高くとも一生使えると思えば安いものだ」

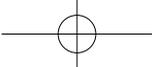
「それにしても高すぎる……」

その会話を側で聞いていた娘が言った。

「お兄ちゃん！ お父さんの言うとおりだわ。お父さん！ 私るときもオメガにしてね」

「わかるか？ お父さんが言わんとしていることを。さすが私の娘だ。お前はオメガ高い」





★68

六月のある暑い日、英語の授業中に窓から一匹の蜂が教室の中に入り込んで来て、天井の中央に止まった。

生徒たちは一斉に、「先生、蜂！ 蜂！」と言って騒いだ。

団塊親父教師、本当は怖いくせにわざと落ち着いた表情をして言った。

「どれどれ、蜂？……なんだ。蜂（はじ）に止まらないで、真ん中に止まって……」

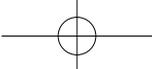
「先生、寒——い」の生徒の声に団塊親父教師曰く。

「そうだね、いい歳をして、相当寒いね。そんな蜂目茶な冗談を言って……あー、蜂かしい、蜂かしい！ それにしても、やはり、蜂はハッチ・hatch【孵化する】する前に退治しなければならぬ」

「……」

★69

団塊親父は大のインゲン嫌い。どこに旅行しようとその宿泊先に前もって、インゲンの入った料理を出さないように電話するのが常だった。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

ところがある旅館で連絡の行き違いでインゲンが入った料理が出されてしまった。

団塊親父は仲居さんに言った。

「私は世の中どうひっくり返ろうがインゲンが嫌いなので出さないように頼んでおいたのですが……私はそのインゲンの姿を見るだけで不機嫌になり周りが気を使ってインゲンな雰囲気になるんですよ……」

団塊親父のギャグをすぐに気づいた仲居さんは落ちつた口調で丁寧に頭をたたみに付け言った。

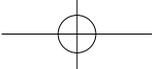
「当方の不手際でお客様に大変失礼なことをいたしました。私どものインゲン無礼をどうぞお許しください」

「……」

★70

団塊親父の美術教師は生徒たちに言った。

「今日は天気がいいので外に出て昆虫を見つけそれを書き写す勉強をします」
生徒の一人が手を挙げ質問した。



「先生、どんな昆虫でもいいんですか？」

「そうです。どんな昆虫でも、いいです」

「先生、蟻でもいいんですか」

「勿論、何でもありだ！ 動きのある昆虫をいかに写実的に描写するかしっかりとよく見て、ありのままに描きなさい」

「……」

★ 7 1

正月に家族で福笑いを始めた。

「お父さんの番よ」

娘の声に、目隠しした団塊親父はまつ毛を持ち顔の輪郭の描かれている大きな画面にそのまつ毛を入れようとしたがもの見事に外れた。

「お父さん、口のところにまつ毛を持っていつてはだめでしょう！」

家族全員が笑いこけた。団塊親父がすかさず言った。

「あー、そうか。ここだったのか。まつ毛が口に！ これはとんだ、まづげいだ」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★72

校長が理科担当の大越先生に尋ねた。

「大越先生、理科室での実験で硫黄を使った？」

「はい、使いました」

「どおりで……理科室の前を通ったとき、硫黄の臭いがした」

向かいに座っている団塊親父教師がそれを聞いて、何かギャグを発するのを察知した大

越先生が言った。

「先生、また何か言いたいのでしょうか？」

「……」

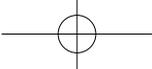
「教えてください。笑いませんから……」

「タイミングを失ったのでいいです」

「そう言わずに教えてくださいよ」

「そうですか。聞きたいですか？」 どうしても言いたかった団塊親父は言った。

「硫黄の実験をして、いおうな臭いが発生した。と硫黄とただけです」



「……」

後ろにいた矢部先生が言った。「いおう、成田屋！ それにしてもいつものよりも点が低い」

★73

女性社員が結婚することになった。同僚の実家から結婚祝いにと村の特産品が送られて来た。椎茸であった。

「何で、しいたけ？」包装紙を開けた彼女が叫んだ。

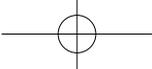
「それは、……旦那さんを椎茸ないようにしてくださいとの意味を込めて送ってきたんでしょ」と団塊親父が言った。

その直後に、他の団塊親父がすかさず口を開いた。

「それに、……旦那さんに生涯胞子するようにとのことでしょう」

「まったくの逆でしょう！」

「オー、怖い、怖い……今からこれじゃ……」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★74

二年生の数学の授業で一次関数をやっていた。

一人だけぼかんとして、なんら関心を示さず外を眺めていた義直に団塊親父教師が言った。

「義直、少しは感心を示して一次関数に挑戦してみたらどうかかな？」

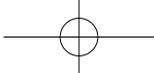
それを聞いた義直は突然立ち上がり、何を思ったのかお笑いタレント、小島よしおがテレビでやる手と足を盛んに動かして「そんなの関係ない！ そんなの関係ない！」と真似を شدした。

その動作に団塊親父がズーゾー弁ですかさず言った。

「そんなの関係ねーと言わねで、このいずかんすうはたいせすなのだ。すこすはかんすんをすめせ」（そんなの関係ないと言わねで、この一次関数は大切なのだ。少しは関心を示せ）と言つて、義直の真似を始めた。「そんなの関数ある！ そんなの関数ある！」

★75

来年、定年退職の団塊親父教師が朝、出勤し早速パソコンのケースを開けようとした。



しかし、ジッパ―が布にかんだらしくあけようとしてもどうしても開けられない。

何度も試みたが一向に開く気配させ見せない。困った挙句、何でもできる用務員の今泉さんに開けてもらうことにした。

「今泉さん、いつも申し訳ありません。またへまをしまして……ここがかんでしまったよう……開けてくれませんか。何だ、かんだと頼みごとばかりしてすみませんね」

「大丈夫です。とにかくやってみます」と言って一分もたたないうちに開けてくれた。

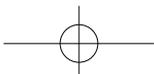
「そんなに強くかんだにもかかわらず簡単に開けるとは……私はそんなかんだん（簡単）なことでもない。あー、情けない、情けない」

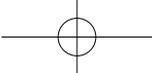
★76

ある夏の猛暑日「お父さん、今年こそクーラーつけてよ！ いまどき、クーラーのない家など私のところだけよ」娘がしきりに団塊親父に懇願していた。

「だめだ！ クーラーは身体に悪いばかりでなく、地球温暖化につながる」

地球の温度上昇を年々肌で感じている団塊頑固親父は、クーラーなどまったくつけようとしな。ぶすつとしている娘をしり目に何も言わず部屋を出ていった。そして、一輪の





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

花を持って戻ってきた。

「お父さん、なーに、それ」娘はまだむっとして尋ねた。

「きれいだろう。どことなく気品があるヒヤシンスだ。部屋が急にヒヤッと涼しくなってきただろう。これでこの部屋もへやすんす」

「……」

★77

給食の後、二年生の女子が水のみ場で上を見、歯磨きをしていた。

そこに幸が来て三里の鼻を見て声を上げた。

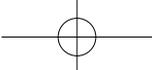
「三里の右の鼻には、提灯が……左の鼻からは一本の長い鼻毛が飛び出している」
周りにいた生徒たちがどれどれと言って三里の周りに集まって大きな声を出した。

「本当だ。本当だ。鼻毛だ。鼻毛だ。鼻毛が提灯を作っているみたい」

通りかかった団塊親父教師がその声を聞いて、三里の鼻を見てボソツと言った。

「すばらしい、鼻芸だ！」

「……」



★78

夜遅く残業を終え、途中の屋台で一杯ひっかけた団塊親父。帰宅し、家族は寝静まっているので音を立てないように何か食べようと台所に行ったら、食卓の上でほうれん草だけが団塊親父を待っていた。

「そういえば、最近おひたしを食べていなかったな。食べたいと思っていたのでちようどよかった」と言つて静かな声で歌いだし微笑みながらほうれん草に近づいていった。

「おひたし……振りね……、あなたに会えるなんて……」

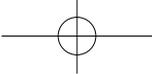
★79

英語検定試験が終わった後、信二が団塊親父教師に言った。

「先生、今回の英検、難しくて書けなかった。完全に落ちてしまった」

団塊親父が言った。

「そうか、そんなに難しかったか？ 完全に落ちてしまったか？ まあー。たとえ落ちたとしても、英、英。また挑戦すればいいのだ。一回、二回落ちたとしても全ていい勉強だ。」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

英、経験になったろう」

★80

合唱際をひかえ各学年が最優秀賞を獲得しようと思命になって練習に励んでいた。

午後から音楽担当の団塊親父教師が合同音楽指導にあたっていた。

生徒たちの声量ある響きと団塊親父の檄が体育館に飛び散っていた。

壇上から三年生の芽衣が熱唱のあまり目を閉じて歌っているのを見て団塊親父は叫んだ。

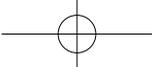
「誰だ！ 芽衣か！ 一生懸命に歌うことはいいが、みんなの中で一人だけめいをつぶつて歌っているとかえつて、めいーだつぞ！」

★81

青春の一ページである合唱祭を前にして、次第に各学級の練習に熱が帯びてきた。テレビでの学園ドラマを優る場面が今年もまた、当学校の随所で繰り広げられている。

そんな中、知里が職員室に走ってきた。

「天口先生に用がぁつてきました」



知里は担任の天口先生に近づくなり言った。

「先生、^{かえで}楓がいなくなりました」

なんでも、クラスの合唱練習の際、友達とちよつとしたことでもめ、飛び出して行き、すぐにみんなで校内を探したが見当たらないとのこと。

それを聞いた団塊親父教師も他の教師と共に楓を探しに職員室を出た。そして、微笑みながら大きな声でゆつくり叫んだ。

「かえーで、はやぐ、かえーでーおいでー！ かえーで、はやぐ、かえーでーおいでー！」
楓はその声を聞いて、半分めそめそ、半分笑いながら体育用具室から出てきた。

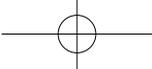
★ 82

季節の変わり目で風邪にかかっている生徒が多いある日。

授業中、声を出さないでいる生徒を見つけ、団塊親父英語教師がその生徒に尋ねた。

「どうした？ 声を出して私の後に続いて読んでみては？ それとも、風邪をひいたかな？」

その生徒はか弱い声を出し答えた。



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「せん……せい、扁……桃腺が腫れ……て、大きな……声が……出ません」
「そうか、それじゃ、無理しないでいいよ。負担がかかるようだったら声を出さないでもいいよ。わかった？」

「……」

「そうか、そうか、……無理して扁桃腺でもいい」

★ 83

夕食に山形県の名産、〴〵もつてのほか」という菊のおひたしが出た。

団塊親父と同様に子供たちも好物である。季節を感じさせる旬のものが家族全員お気に入りである。

それに加え、テレビで菊はボケ防止になるという番組を見て、すぐ信用し団塊親父の食べる回数と量が増えてきた。

団塊親父が箸を持つとうとする前に、子供たちが先を競って菊に殺到した。

それを見た団塊親父が言った。

「大好物の〴〵もつてもほか」を家族の長の私より先に食べるとはもつてのほかだ！ 私よ



りも先に食べたいときは黙っていないで前もって私に菊！」

「……」

★84

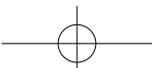
中学校の校長はとにかく忙しい。

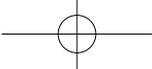
校長は今日も「あー忙しい。忙しい。毎日、分刻みのスケジュールで身体がいくつあっても足りない」とぼやいている。

それをそばで聞いていた来年、定年を迎える団塊親父平教師が言った。

「校長先生、忙しいことはいいことです。毎日、分刻みとは……。私なんぞは、まったく忙しくもなく、出張もなく、ふん刻みはふん刻みでも私のふん刻みは糞刻みで最近体調も昔のように芳しくなくネズミの糞みたいな糞がコロコロと出が悪く……。あー、あー、年を取るということはこういうことですかね」

「……」





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

★ 85

三年年の保護者会が夜の七時からあった。

いつも母親しか出席しない松下の父親が始めて顔を見せた。

玄関先で立っていた教頭に「こんばんは！ 校長先生」と呼ばれ、自分が気づかない間に校長が来ていたのかと、返事もせずきよろきよろしながら後ろを振り返ったが、校長の顔が見えず、自分に挨拶をしたものと判断。

しかし、タイミングを失い、返事もせずに黙っていた。

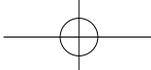
その状況を側で見ていた3年の副担団塊親父は、小さい声でささやいた。

「教頭先生、このような状況のときは校長になりきつていればいいのですよ。あまり、教頭ーんとしているとかえつて変ですよ」

★ 86

産休に入る先生の代わりに近藤という講師が来た。

なんでも教員採用試験に十回以上も落ちているにもかかわらず、未だに教師の道を諦め切れず毎年試験に挑戦しているらしい。



その近藤講師は正式のベテランの教師に授業に関してばかりでなく私的なことまでいろいろと注文をつける。熱心さのあまり自分の意見を言うことは理解できるがやはり講師の身分で試験を通ってきている先生に授業やプライベートのことまであれこれと言うことは差し控えるべきである。

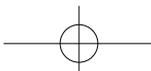
ましてや、自分よりも年上の先生の私的なことまで口を挟むことなど言語道断である。

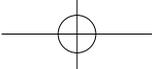
当初、多めに見ていた団塊親父教師も何度か私的なことを言われ、堪忍袋の緒が切れ、直接近藤講師に言った。

「近藤先生、本当に教師になりたいのであれば、少しは相手の立場というものを考えて自分の行動、言動をしてはいかがですか。仕事に関してあなたの意見を言うことはよいとしても、私的な件に関してまで主観を入れるとは、……講師近藤だ！」

★87

清掃時間が終わるのを待ち構えていた退職間近の最近頻尿ぎみの団塊親父教師は我慢できずトイレに入って行った。しかし、伸、友馬、弘毅の3人が、掃除をしないで水が撒かれた床を勢いつけて滑ったり、トイレの掃除用具入れとトイレの間にぎゅうぎゅう詰めの状





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

態になったりして遊んでいた。

団塊親父はもう少しで漏れそうになっているのを我慢して生徒たちに言った。

「掃除をサボっていつたい、みんなで何をしているんだ！ 伸！……伸じられない！ 友

馬！……私がいいと友馬で、そこに立っていなさい！ 弘毅、……お前は学級委員なのに

率先して掃除をサボって！ 大いに反省しろ！ 弘毅肅正だ！

「……」

★
88

昼食後の五時間目の授業は団塊親父教師にとつてつらい。南からの暖かい日差しを受けるとついというたた寝をしたくなる。

選択の時間、その日は英語の歌詞を暗記させる予定だった。リピートのボタンを押し、何度も何度も生徒に同じ歌を聞かせている間に団塊親父のまぶたが閉じていった。

突然、「先生が居眠りをしている。……先生、居眠り教師だ！」の生徒の声に目が覚めた。

「えい、なんて言った？」

「先生が居眠りをして……、居眠り教師だ！」



「そうか、そんなに俺が格好よかったか？」 団塊親父教師は寝ぼけたそぶりで言った。

「先生、何で、先生が格好よいのですか？ 居眠りをして……？」

「眠狂四郎だろう？ もうかれこれ、今から四十年位前に市川雷蔵という俺みたいのに二ヒルで二枚目の俳優が演ずる眠狂四郎という侍が出演する映画が流行していた。私は当時その眠狂四郎に似ていたので山形の眠狂四郎と言われていた」

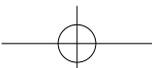
「うそ！ 先生が二枚目？ そんなずつと昔のことを言っても誰も信用しませんよ。今の先生は三枚目も通り越し、四枚目くらいです。それにそのニヒルって何ですか。ニヒルではなくアヒルの間違いでしょう！ さつき、先生はアヒルそっくりの顔で居眠りをしていたので……」

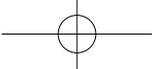
★ 89

「先生、便器にうんこがべつとりとついています！」

トイレ掃除をしていた生徒が団塊親父教師を叫んだ。

「どれ、どれ、……しようがないな。きちんと流しもしないでそのままにすると……授業に遅れると思うってよほど慌てたのかな？ それにしても何事も次に使用する人のこと





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

を考え、最後まで確認して行動しなければならぬ……このままにして、放送でトイレのうんこを流さなかった生徒に呼びかけてみようか？」

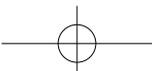
「先生、生徒とは限らないんじゃないですか。先生の中で流すのを忘れたボケが始まった先生がいるのでは……」

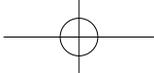
「そうだな。先生かもしれないな？……それじゃ、しばらくこのままの状態にして、大判用紙に大きな字で“便器塗りたて”と書いて、そのわきに“うんこに変わって、大便（代弁）します。うんこを流すのを忘れた人はすぐに流してください。うんこが移動したくとも流されず腐っています”とでも書き、張っておこうか」

「先生、それがいい」と言っただけで職員室に用紙を取りに行こうとした生徒を団塊親父教師は引き止め言った。

「冗談、冗談だよ。とりあえず便器を綺麗にしようか？」と言っただけでブラシを持ってごしごしと掃除を始めた。

それを見た生徒たちもブラシとバケツを持ってきて団塊親父教師を手伝い始めた。





★90

給食の時間、生徒全員が席に付き、「いただきます」をした後に、その日の欠席者と早退者の余ったおかずと牛乳、時にはデザートを希望者に配分するのが担任の仕事のひとつである。

今日はウインナー1本が残った。希望者が5人いたのでいつものじゃんけんをすることになり和也が勝った。

その直後、教室で生徒と一緒に食べることになっていた英語担当の団塊親父が言った。

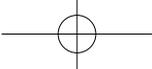
「Today's ウィンナー is Kazuya! Kazuya will win tomorrow, too! 今日の勝利者は和也! 和也はあしたもかすやー!」

★91

一日の授業が終わり、掃除の時間、朝から真面目に勉強に集中し、疲れているにもかかわらず、瑞希と亜里沙は一生懸命に廊下を雑巾で二人並んで競争して拭いていた。

そこに通りかかった団塊親父教師は言った。

「偉いね、疲れも見せず手を抜かず綺麗に雑巾がけをするとは……いつものことながら感



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

心するね」

瑞希は言った。

「先生、当然でしょう。私たちは美化委員ですからね」

その返事に団塊親父が言った。

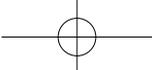
「そうだったね。二人とも美化委員。……二人の美化委員……それで、いつも廊下が美化
美化なんだ！」

瑞希と亜里沙は何も言わず口を開けたまま廊下に転げた。

★ 92

最近、生徒間で鉛筆回しが流行している。

団塊親父の再三の警告にもかかわらず、未だに授業中に鉛筆、ボールペンを「どたつ」という大きな音をたて机の上に落とし、一生懸命に勉強している他の生徒に迷惑をかけている生徒がいる。団塊親父教師この学校に来る前の学校では鉛筆回しの生徒から、鉛筆を没収し、始末書を書かせ、反省を促していたが、この学校に来てからはその気概がすっかり薄れてしまった。それでも我慢にも限界があった。団塊親父教師が吠えた。



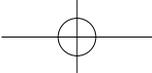
「他の人が誰も居らず、自分ひとりだけで鉛筆を回しているのならまだ理解できるが、他の人が明らかに迷惑と思っている以上、鉛筆回しは授業中はやめろ。最近の傾向として、あなたも鉛筆回しが格好のよいものとして一部の品位のないマスコミでも取り上げられているようであるが、そんなことはとんでもないことである。ある意味において、鉛筆回しが流行してから世の中がおかしくなってきた。鉛筆回しの流行がこの日本をだめにするといつても過言ではない。この考え方があらゆる場面に波及し、この日本がガタガタになってきているのだ。他の先生の授業の時はいざ知らず私の授業のときは回すな。年寄りの前で鉛筆を回されると血圧が上がってくる。いいか！ もう二度とまわすな。わかったか！」

と言っている最中に、注意された幸太が又回した。

「幸太！ 注意しているのに、まだわからないのか！」と言って、黒板での説明用に使っている竹の棒を幸太に向けた。

「先生、暴力だ！ 暴力だ！」

「何が暴力だ！ 暴力だ！」最初に言っておくがこの棒でお前を叩いたり、付いたり、又は脅そうとしたりは絶対にしないから心配するな。ただ私が言いたいことは、そう言う



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

前に自分のしている行動が相手の人たちにどのように受け止められているかを考える必要があるのではないかな？ お前が一生懸命に仕事をしている時、目の前で大勢の人が長時間に渡って鉛筆をくるくる回し続けたらどう感じる？ ……お前が真剣になって、集中して勉強しているときに他の人が鉛筆回しの練習をしていきなり大きな音を立てて鉛筆を何

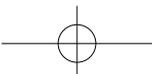
回も何回も「どたつ、どたつ」と落としたりお前はどうか感じるか？ ……そのような自分させなければいい、自分がしたいことをする、他の人がどう感じようがどう解釈しようが関係ないという自己中心的な考えを直してくれるのがこの棒だ。この棒は実に不思議な力を持つている棒なのだ。この棒の先端部分を一分間無言のまま見つめてごらん。その自分勝手に他人に非常に迷惑がかかる鉛筆回しという悪い癖が直るようになる。お前が言う暴力ではなく、この棒の力でな！ 棒の力で！ すなわち、棒力でだ！」

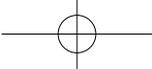
「……」

★ 93

一年生の英語の授業で大地が辞書を忘れてきた。

他の生徒全員が一生懸命に単語の意味を調べている中、大地だけ何もせずぼつんとして





いた。

それを見た団塊親父教師が自分の辞書を大地の机の上に無言のまま置いた。

大地はその辞書を見つめ学習意欲を失ったような口調で言った。

「先生！ 先生の辞書ぼろぼろだ！ 表も裏の表紙もない！ それに中もぼろぼろだ！
どうやって調べるのですか？」

団塊親父は静かながらも語気を強めて言った。

「大地、表紙が無いくらいでそんなに表紙抜けするな！ 一つ一つこつこつと調べていけばいいんだ！ 問題は中身だ！ 人間も人生も肝心なのは中身だ！ 最初にこの辞書を見て、なんと言えばよいのか考えてごらん。他人の辞書を断りもなくいきなり使うか？……思いつかないかな？ それでは言ってみよう。May I borrow this dictionary? (この辞書をお借りしてもよろしいですか?) ぼろぼろの辞書を借りる時だけでなく新品の辞書を借りる時でも borrow を使うのだ！」

★94

「麻薬、覚せい剤の使用は絶対にだめ」と中学校でもことあるごとに麻薬、覚せい剤だけ



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

でなくタバコも使用をしないように生徒に厳しく教育をしている。その矢先、アイドルグループ光源氏の元メンバー赤坂晃が覚せい剤使用で逮捕された。

生徒の中にもテレビのニュースを見て知っているものがいた。

団塊親父教師はアイドルグループ光源氏自体何なのかさっぱりわからなかったが生徒たちと言った。

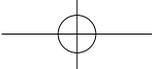
「いつたい、何だ、その赤坂晃という人は、どういう人か知らないけれど、どんな理由があるにせよ、絶対に麻薬、覚せい剤には手を出してはいけない。覚せい剤に手を出すとは晃かに赤坂だ。いや、明らかに浅はかだ」

★95

団塊親父が授業中に突然、ドアがノックされる音がした。隣で授業をしていた数学の天口先生が教室に入ってきて言った。

「先生、授業中、すみませんが、チョークを忘れまして……チョーク一本、いただけないでしょうか？」

「えー、いいですよ。一本と言わず、お好きなだけどうぞ」



まだ若いのに礼儀正しい、天口先生は教室から出ようとした時言った。

「ありがとうございます。助かりました。今日だけですから、もう来ませんから……」
その背後から、団塊親父は言った。

「そんな、今日だけとは言わず、チョーク、チョーク来て下さい。いつでも歓迎します」
団塊親父の言葉に天口先生は一瞬、チョーク立不動して、振り返り言った。

「またやられましたね。チョーク、いや……シヨック……」

★96

三年生の光二が職員室に入ってきて、担任の大越先生に言った。

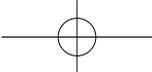
「先生、ネームプレート忘れてきた。貸して！」

「忘れてきた。貸して……ではないだろう。忘れてきました。貸してください」
自分で取れ。きのうも忘れてきて！」

「先生、取って！」

「自分で取れ！」

「何で、ネームプレート着けねばなんねな？」



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

「高校受験のとき、ネームプレート着けないで行くか？ 行かないだろう！」

「着けねでいぐ」

「約束するか？ それなら、着けないでいい」

「口約束する」

「だめだ。親に判子を押してもらって、着けないで行くと一筆書け！」

その会話を聞いていた団塊親父が言った。

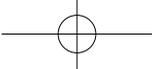
「光二、判子も押せないで、約束も出来ない？ それに随分、大越先生に判子的だね？」

言葉も態度も柔らかくし、大越先生の言うことを聞いたほうがいいと思うが……どうなんだ？」

★
97

三月十日の県立高校入試を三日後に控えた日、山間の村にはまだ時折猛吹雪を伴う大雪が舞っていた。

高校入試終了後は卒業式練習などの行事が入り、授業はなくなるので今日が中学校での最後の授業だった。



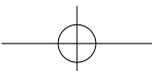
団塊親父はその最後の授業だけはいつもと違い真面目にやろうとしていた。そう思いながら生徒たちの顔を見渡すや否や、教壇頭上の蛍光灯二本に寿命が来たらしく突然ピカピカと点滅を始めた。

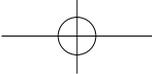
団塊親父は学級委員に業務員さんの今泉さんを捜し、取り替えてもらうように言った。すぐに今泉さんが来てくれ、どの蛍光灯かを確認した後、新しいものを持って来て、取り替えてくれた。団塊親父は生徒に人気者の今泉さんに礼を言った後、一言追加した。

「そうだね、中学校での最後の思い出の授業に、蛍光灯二本が急にピカピカと輝いたということは『二人よ！これから大いにピカピカと輝け』という非常に縁起がいいことだ。ついでに全員が志望高校に合格するように今泉さんに今年度の高校入試の『蛍光灯対策……傾向と対策』について諸君に話していただきますよ」

★98

高校受験は中学一年からでも遅いといわれている都会の生徒には考えられないがここ山形県北部の小さな村の受験生は三年生の年、初雪が降ってきてから始めて、自分が高校受





団塊親父の逆襲（ギャグ集）

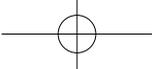
験をするという自覚を持つと言われている。しかし、中には本格的に雪が積もり始めてもいつこうに他人事のように考えている生徒もいた。

そして、やがて、初雪が降ってからあつという間に高校受験の日を明日に向かえた。数名の生徒は試験前日になってやつとのことで緊張し始め、ほほは痙攣し、足ががくがくの状態になっている。それらの受験生を前にして、団塊親父教師が活を入れた。

「そんなにガチガチになって本番でどうする。とにかく、今晚は十分に睡眠をとり、明日の朝は早く起き、ご飯をしっかりと食べ、うんが付くように快適なうんこをしてすつきりし、それから出かける前に蚊取り線香を焚くんだ。その際、どの会社の蚊取り線香でもいいというものではないんだ。キンチョーの蚊取り線香でなければならぬのだ。そのキンチョーの蚊取り線香を手に取り、合格するぞー」と大きな声で気合を入れ一気に折るんだ」

「先生、どうしてキンチョーの蚊取り線香でなければならぬんですか？ それに、何で、それを折るんですか？」

「それはな、……キンチョーの蚊取り線香、……キンチョーオール・可取り先行」だ。要するに緊張を折り、打ち砕き、可能な限り点数を取り、誰よりも先行するのだ！ そうすれば絶対に合格するという意味で、緊張可取り先行」なのだ！」



「……」

★99

卒業式を控え生徒たちと共に教師、業務員さんも忙しくその式の準備に追われていた。

壇上の真上からは大きな卒業授与式の看板がさげられ、その袖には校歌のたて看板と左右対称になるように式次第の看板が団塊親父教師によつて備え付けようとしていた。生徒の助けを得ながら、校歌と完全に対になるように調整しながら慎重にその場所を決定しようとしていた。その時である。団塊親父の腰に「ぴりい」とかすかな音が走つたのは。

団塊親父はその瞬間動きを止め身体を膠着させた。

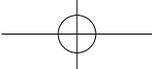
「先生！ どうしたんですか!？」生徒のひとりが尋ねた。

「いけない！ これらの対看板をつい、つい完璧な左右対称にしようとしたら、腰がやられたな……」

団塊親父は身体の停止状態を維持したまま言った。

「先生、本当に大丈夫ですか？」

「ありがとう。大丈夫だ。それにしても痛いな。やはり年を取るといふことはこういうこ



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

とかな。ちょっと無理をして対にするのにこだわって……これが……本当の対看板ヘルニアだ？」

「……」

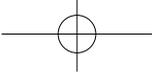
★100

公立高校入試も終わり、学校全体が卒業式準備にあわただしく動き始めた。団塊親父が尊敬している国語教師の矢部先生は連日、送辞と答辞を読む生徒の指導を始め、多忙を極めていた。その上、校長から卒業証書の氏名書きを指名されていた。

矢部先生の筆字はとにかく芸術である。プロの書家として飯を食べていけるほどの腕前である。通常、各学校で腕の立つ先生がいない場合は、高額を支払い地域に住む書家に依頼しているのが実情なのである。それを矢部先生は勿論無償で引き受けている。

それに比べ、還暦を前にした副担の団塊親父は未だに息絶える寸前のミミズが最後の力を振り絞って書いたようなへたくそな字を書き、何をやってもだめ教師なので、矢部先生の書いた証書に校印を押す仕事を命ぜられた。

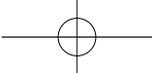
しかし、この校印を押す仕事も一見単純で簡単なようではあるが実は大変な仕事なので



ある。学校印、校長印、そして、割り印と押す位置が厳格に決められており、さらには少しでも曲がって押しはいけないし、とかく神経を使う面倒な仕事なのだ。

そして、校印を押し、乾いた後にも念には念を入れ朱肉が他の証書に付かないように番号順の証書と証書の間に一枚一枚ちり紙を挟めるほどの気を配らなければならないのである。失敗は絶対に許されないので団塊親父は何度も、本物の証書に押す前に廃棄用のコピー用紙で練習を重ねていた。朱肉の濃さが均等になっていなかったり、まっすぐに押されていなかった、割り印が正確に半分になっていなかったりと、悪戦苦闘を繰り返していた。

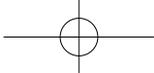
その側で矢部先生は精神を集中させ、あたかも蒸留水が流れるようにすすいと筆を滑らせていた。氏名、生年月日、卒業証書番号と次から次をその仕事をこなしていた。矢部先生が書いた筆字が完全に乾くのを待っている間、団塊親父は練習をしながら、これまで自分が担任をした生徒たちを思い出していた。それぞれの生徒の笑っている顔、泣いている顔、怒っている顔、ぶすつとしている顔、しょげている顔が浮かんできた。毎年、年賀状をくれる生徒、卒業式以来一度も会ったことの生徒、顔と名前が一致しない生徒、どうしても名前を思い出せない生徒。そういえばあんなこともあった。こんなこともあった。当時のさまざまな場面が走馬灯のように流れてきた。当時の笑い声、泣き声、叫び声が昨



団塊親父の逆襲（ギャグ集）

日あったように卒業証書一枚一枚から聞こえてきた。部活の汗のにおい、四季折々の花や樹木の香りも当時の風と共に漂ってきた。卒業生たちは今、元気にそれぞれの学校で、職場で無事に楽しくしているだろうか。卒業生たちはどの町でどのような生活をしているのだろうか。団塊親父の目が涙で潤んでいた。と同時に自分が学校を卒業したころも思い出していた。しかし、ボケが始まったのか、それともともと記憶力に乏しいのか、思い出そうとしてもほとんどというか、まったく思い出せないのである。高校の卒業式には出席しなかったので記憶にないのは当たり前であるが、小学校、中学校もまったく記憶にないのである。

ただ、卒業式で実際に歌ったのか、その後何かの番組でその歌を聞いたのがダブっているのか定かでないが、「仰げば尊し」と「蛍の光」の曲だけは歌ったのではないかとかすかに記憶の中にあるような気がするだけである。さらに、小、中、高の卒業証書すら全て捨ててしまったのである。というより、捨ててしまったこと自体記憶にないのである。手元に保管されていないので廃棄してしまったことだけは確かであろう。こうして、実際に自分がこの仕事をして初めて、これほどまで苦勞して卒業証書を完成している先生方がいたことを知った次第である。当時は勿論、そのことをまったく知らず、今となっては卒業証



「書作成に携わった先生方に心の底から申し訳ないと思いつながら、団塊親父はただ黙々と校印を押す練習を続けていた。そして、しみじみと自分の人生を振り返っていた。

「本当に人生というものは速いものだ。ついこの前まで小学生、中学生だったのがもう定年か。速いなあー。あつという間に人生がもう終着駅に着こうとしている。長かつたようでもあつたがまるで一瞬の風がすつと流れ去った感じだ。こうして私の人生ももう少して終つてしまうのか……」としばし、練習の手を休め、空を見つめた。そこには生徒たち一人一人の顔と自分のこれまでの人生の凝縮された空間が浮かんでいた。そして、団塊親父はぽつりと独り言を言った。

「校印矢のごとし」

